
飛びだせ！ すいどう会

Ｊ・Ｐ・フリーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛びだせ！ すいどう会

【Nコード】

N5834V

【作者名】

J・P・フリーマン

【あらすじ】

推理小説同好会 通称、すいどう会。推理小説を読みふける大学サークルだ。メンバーはたったの三人、たとえマイナーサークルと言われようともお構いなし。今日もまったりと本を読む。

ところが問題が急浮上、身のあるサークル活動を行わないとサークル室を追い出されてしまうのだ。そんなわけで、自作の推理小説を書き、文化祭で発表することにした三人だったが、次から次へと奇妙な事件に巻き込まれていく。果たして小説を無事に完成させられるのか！？

永久武、鳥井瑠依、長浜英知 推理小説をこよなく愛する三人組
が、さまざまな謎をコミカルに、そしてスマートにときほぐす。

登場人物紹介（前書き）

ここでは登場人物を紹介しています。

これは人物確認のための項目ですので、初めて本作をお読みになる方は、この項目は？読み飛ばす？ことをオススメします。

物語を読みながら、その傍らここを開いて、頭の中で人物を整理するためにお使いください。（推理小説の本のそでの部分に載っている主要人物一覧みたいなものです）

ストーリーが進むにつれて、ここに載る登場人物たちも増えていきます。

登場人物紹介

主要人物

ながひさたける
永久武

大学二年生

本作の主人公で、この物語は彼の視点で物語が進行する。

推理小説をこよなく愛する大学二年生。ふさふさの黒髪に、鋭い眼光の持ち主。細フレームの眼鏡をかけている。

大学に入学すると、鳥井瑠依と長浜英知を誘って、推理小説同好会、通称すいどう会を創立した。すいどう会の会長を務め、本人も自信満々に立ち振る舞うのだが、その勢いが空回りすることが多く、傍から見るとどこか頼りない感じがする。

平尾から「エターナル」と呼ばれているが、永久自身はそのあだ名をよく思っていない。

とりいらい
鳥井瑠依

大学二年生

すいどう会のメンバーの一人。健康的な小麦色の肌と、さらさらのロングヘアの女性。天真爛漫な性格で、興味を持ったものには、なんにでも首を突っ込みたがる。

すいどう会で小説を書くことになったとき、実際の生活の中から使えそうなネタを探すことを、永久に提案した。

ある呼び方をされると、鬼のように怒り、人間離れした身体能力でそう呼んだ相手を疾風乱打する。

高校は陸上部に所属していたため、脚が速い。

ながはま えいち

長浜英知

大学二年生

すいどう会のメンバーの一人。長身で、色白の優男。すばらしい観察眼と高い分析力の持ち主で、本作の探偵役を務める。

普段から冷静で慎重な行動を心がけているようで、事件や謎を解決するための糸口を掴んでも、それを証明するまでは誰にも自分の考えを打ち明けない。

ラーメンが大好きで週一回のペースで、『たま屋』というラーメン屋に行っている。

第一章：接触！ オカルト研の登場人物

すずもと

鈴木ほのか

大学二年生

大学非公認サークル、オカルト研究会の会長。知的な雰囲気が漂うものすごい美人。ただし黙っていればの話で、ひとたび口を開くと一般人にはついていけないような、ぶつとんだ話をする。超常現象の研究の活動には熱心で、宇宙との交信をしたり、近所の心霊スポットを回っている。

『光る玉騒動』で、すいどう会のメンバーと知り合う。

第二章：祝！ すいどう会創立一周年記念の登場人物

きくち せいや

菊池聖也

大学二年生

チエス部に所属しており、永久とは同じ学科。女のようなきれいな肌をしており、目は閉じられているのか、というくらい細い。チエスの腕前は抜群で、永久を十二手で破ったことがある。

第三章：脅迫！ 演劇部の登場人物

よしかわしほ
吉川柴帆

大学三年生

演劇部部长。細身で長身、短髪、澄ました顔つきの女性。非常にサバサバした性格である。圧倒的オーラと、驚異的カリスマの持ち主で、眼光一つで相手の動きを封じることができる。さらに相手の意志を奪い取るような眼差しを使えるため、並の人間では、彼女を言い負かすことができない。

演劇部の部長であると同時に、同部のスター的存在で、男女問わず人気がある。その絶対的存在感のため、平尾からは「クイーン」と密かに呼ばれている。

ひらおしんいち
平尾新一

大学二年生

演劇部所属。永久とは中学時代からの知り合い。問題が起きるとすぐに他人を頼りにする。そのため、すいどう会を訪れて、助けを求めることが多い。武曰く、人類の恥部。
他人に横文字のあだ名をつけたがる。

たかおかゆうき
高岡勇気

大学三年生

演劇部所属。どこかたびれた雰囲気を持つが運動神経抜群の男性。恵美梨とは恋人同士。下級生からの人望は高い。平尾からは「ブレイブ」と密かに呼ばれている。

池田恵美梨 いけだ えみり

大学三年生

演劇部所属。いつも髪型をポニーテールしている活発そうな女性。他人に対しては常に強気な態度で臨むが、高岡と接するときにはデレデレになる。このことから、平尾からは「トゥーフェイス」と密かに呼ばれている。

岡田宗太 おかだ そうた

大学二年生

演劇部所属。大根役者といっているほど、演技が一本調子。そのため台詞の少ない役しかもらえなかったり、裏方にまわることがほとんどである。

水野百合 みずの ゆり

大学三年生

演劇部所属。脚本担当。一年の頃から、脚本担当の先輩にくつついて、シナリオの書き方の勉強をしてきた。しかし、独り立ちした現在でも、自分で考えたシナリオが過去の先輩たちが書いたものと比べ、見劣りしていると感じている。そのため、自分には才能がないのではないかと思い悩んでいる。

第四章：無視！ 携帯電話の登場人物

藤堂広道 とうどう ひろみち

大学二年生

永久の高校の頃からの友人。柔道部に所属している。非常に大柄で

岩のようにどっしりとした雰囲気を持つ。いつも無表情で、感情を表に出すことは滅多にない。

永久がすいどう会を立ち上げようとした際に、彼にも声がかかったのだが、藤堂はすでに柔道部への入部を決めていたため、永久の申し出を断った。姉がいる。

ふかぜれい
藤堂沙姫

大学三年生

藤堂広道の姉。ノベルス同好会に所属している。弟にまったく似ておらず、小柄で丸顔、繊細な身体の線をしている。切れると言葉遣いが極端に悪くなる。サッカー部の細木健太と付き合っているが、あることがきっかけで、一時期、大変いがみ合っていたことがあった。

こはやしきょうか
小林杏香

大学三年生

ノベルス同好会所属。沙姫の友人その一。髪をブロンドに染めて、さらにウェーブを当てている。メイクもばっちりすぎるほど決めている。つまりギャル。

ふかせれい
深瀬玲

大学三年生

ノベルス同好会所属。沙姫の友人その二。いつも髪の毛を頭の上で、お団子にまとめたヘアスタイルをしている。

さわただゆづこ
澤田裕子

大学三年生

ノベルス同好会所属。沙姫の友人その三。沈着冷静なクールビューティー。滅多なことではその表情は崩れない。ピーマンが苦手。

第五章：レッツ・クッキング！ 料理研究会の登場人物

おおたゆみ
大田雪美

大学二年生

料理研究会に所属している。ぱっちりした目に大きな前歯が特徴。永久と同じ学科であり、すいどう会での彼の活躍を耳にしている。

おかもとみさ
岡本美紗

大学二年生

料理研究会所属。それなりにふくよかな女の子。見た目を裏切らず肝が据わっており、堂々と相手に意見を言う。自分が太っていることを指摘されると、猪のように怒る。

きたがわふうか
北川楓華

大学二年生

料理研究会所属。明るい髪色で、眼鏡をかけた女性。見た目から、陽気そうな性格に見られることが多いが、実は気が弱い部分があり、しゃべり方も自信なさげである。

ちくまよしえ
竹間吉江

大学二年生

料理研究会所属。短髪で小柄の女性。関西弁風なしゃべり方をする。

あくまで関西風のしゃべり方であって、本場の関西弁ではない。

1-1・オカルト研と光る玉

《すいどう会》

そいつは、大学に入学したばかりのわたし、ながひさたける永久武が去年の春に同士を集めて立ち上げたサークルだ。

その名前から、水道管やら生活水の流れについて話し合う会と思う人もいるかもしれない。だがはつきりいうと、ここでは水道は関係ない。

《すいどう会》とは略称なのだ。正式名称は推理小説同好会
推理小説を愛する三人がメンバーの小さなサークルだ。

わたしはサークル室のドアを開けて、部屋の中に足を踏み入れた。そこには色白で整った顔の男と、無邪気そうな髪の長い女がいた。
「今年の文化祭は自作の推理小説を出そう」わたしはサークル室に入るなり高らかに宣言した。

他のメンバーはわたしの言葉を冷静に受け取った。

「そうか」ながはまえいち長浜英知は興味なさそうに答えた。

「文化祭って……まだ半年以上も先じゃない」とりいらい鳥井瑠依に至っては言葉の裏に秘められた、『面倒』という意思がひしひしと伝わってきた。

なんて冷たい奴らだ。北風でさえわたしにこれほど冷たく接することは無いのに……

「いや、だからさ。わたしたちで小説を書こう」わたしはこぼれた気力を拾い集めてもう一度提案した。

「ふうん」イルイ（鳥井瑠依のニックネーム）は途中まで読んでいたヘレン・マクロイの『暗い鏡の中に』を閉じ、私を見た。「急に小説を書くとかいって、どうということなの？ 去年はそんな話一度もしなかったよ」

「うむ、いいことを聞いてくれた」わたしは部屋の真ん中にあるテーブルに一枚の紙を置いた。その紙こそが我々の存在を大きく左右するのだ。

「なにこれ？」イルイはテーブルの上の紙に視線を落とした。

「活動報告書だ。これを書いて事務に提出しないとわたしたちはサークル室を失うことになる」

「ええー？　なんでー」

つまりこういうことだ。うちの大学はメジャー、マイナーすべて含めたサークル数に対してサークル室が少ない。なので、大した活動を行っていないサークルは、少しはマシな活動を行っているサークルや新規サークルに部屋を明け渡さなければいけないのだ。

ちなみに部屋を追われるサークルは部員が少なく、活動内容も乏しいマイナーサークルだ。マイナーなのでサークル室から追い出されると、ますます活動がおろそかになり、メンバー同士の交流も疎遠になる。最終的には自然消滅してしまうサークルも珍しくない。

現に、わたしたちが今使用しているサークル室は以前、食材・調味料研究会（決して出会わないはずの食べ物と調味料を組み合わせることで、新しい味を発見しようとしていたサークル）が使っていた。

それで登場するのがこの忌々しい活動報告書だ。この活動報告書には四月から、翌年の二月までの、各月ごとのおもな活動内容を記述しなければならない。野球部なら、四月に紅白戦、五月に校と公式試合、という感じた。

この活動報告書の内容がしょうもないものだったり、報告書自体を提出しなかった場合は、サークル室明け渡しの対象とされてしまう。

わたしがこのことを二人に説明していくにつれ、二人の態度も真剣なものになっていった。

「だったらうちは、その月に何を読んだか書くだけでいいんじゃないの？　その報告書にみっちり書き込めるよ」イルイはなんとも間

抜けな答えを出した。

「だめだめ。サークル室がなくてもできることをいくら書いたって無駄だよ」

「それじゃあ小説を書くのだってサークル室がなくてもできるし」
むつとした様子でイルイがいった。

「大丈夫さ。ストーリー構成やキャラ設定の話し合いの場として、サークル室を使用していると言うことができるんだよ」

ここで今まで関心の薄かった英知が口を挟んできた。

「なあ、思っただが……書類を捏造して提出したらどうだ？ 四、五月に設定作成、六、七、八月に執筆、九月に印刷、十月に公開。こう書けばまともな活動をしているように見せられる。しかも、向こうは確かめる術もないからね」

「創作活動を行った団体は、その創作物と一緒に提出する必要がある、とここに明記されているんだよ」そう言っただけでわたしは問題の箇所を指差した。

「不公平だ！」英知は天を仰いだ。

「でも去年はこんな書類、書いてないよね」とイルイ。

「新しく部屋をもらったサークルは、親切なことに、準備期間として一年の猶予がもらえるのだよ」

「お前はそんなこと、一言たりとも言っていないかったなあ」英知は恨めしげな一瞥をわたしに向けた。

「わたしも知らなかったのだよ。その点は確認不足だった。悪いと思っただけよ。とにかく一冊でいいから小説を書く必要がある。でなきゃ、ここを追い出されるぞ」

といったものの、わたしには自信がなかった。わたしは高校生の頃から推理小説を読み漁っていたが、自分から小説を書いてみようと思ったことは一度もなかった。だから、ここはイルイと英知に大きな期待をよせていた。やはり持つべきものは友だ！

「二人は小説書けるかい？」わたしはにっこりとして訊いた。

「ぜんぜん」

「さっぱりだな」

なんと無常な答えだ。やはり持つべきものは、役に立つ有能な友だな！

サークル室を失うのはまずい。講義終わりの空いた時間に、のんびりだらだらできる場所を失うことになるのだから。特に一限目の講義と四限目の講義だけがある日に、わたしはここを重宝している。一限目が終わると、わたしはいつも二限目と昼休みと三限目の時間をここでまったりと過ごして四限目の講義に向かっている。家以外でくつろげる空間を失うと思うと、わたしはドブに片足を突っ込んだような気分になった。きっと他の二人も似たような感情が湧いているだろう。

「はあ、仕方ない」わたしは力なく腰を下ろした。「三人寄れば文殊の知恵。みんなで話し合つてなんとか書き上げよう」

という具合にミーティングを開始しようとしたときだった。その出鼻をくじくものが突如として出現した。そいつはノックもせずドアを開け放ち、すいどう会のサークル室に堂々と入り込んできた。わたしはそいつを見て、短いうめき声を上げた。

その男はわたしの中学生からの知り合いだった。思い返せば、中学校のときにこいつと知り合ったのが大きな間違いだった。なにせ奴は……いや、今はこの話はやめておこう。こいつの悪しき点を上げていくと二十四時間では足りない。

わたしたちの前に現れた男の名は平尾新一。ひらおしんいちこいつは日本の汚点

……いや、人類の恥部といつても過言ではない。

「よお、エターナル」何とも不快で湿っぽい声がサークル室に響き渡った。しかも相変わらず、わたしのことをエターナルと呼びやがる。

「わたしのことをエターナルと呼ぶなといっているだろ。何度いえはわかるんだ？」

「永久えいきゅうだからエターナルえいぎやうって呼んでもいいだろ。かつこいいじゃん」

「永久ながひさだ。それにかつこよくない。むしろダサいくらいだ」わたし

は上昇する怒りを何とか抑えて、冷静に対話することに努めた。

「ところで今日はお願いが会ってきたんよ」

「断る」わたしは英断を下した。

「ちよつと！ まだ何もいつてないし」平尾はきいきいと声を立ててわめいた。

「お前の頼みなど、どうせろくなものではないだろ」

こいつのこれまでの頼みごとはしようもないうえに、人を不快にさせるものばかりだった。しかし、今回はこれまでとは違っていた。「今回は俺だけの問題じゃないんだよ。オカルト研も絡んでるんだよ」

「オカルト研？ そんなサークルあったかな？」なんと英知が平尾の話に興味を示してしまった。わたしは心の中で「ノー」と叫んだが、英知ははずると平尾の話に食いついていった。

「オカルト研は大学非公認のサークルなんだ」平尾は得意そうに語りだした。「去年、鈴本^{すずもと}ほのかさんが設立しようとしたんだが、結局会員が一人も集まらず未だに正式なサークルとして認められていない。だけど鈴本さんは、密かにUFOとの交信やら、幽体離脱の方法とか独自の研究を行っているんよ」

「小学生の夏休みの自由研究のほうがまだ価値がありそうだな」わたしはぼそりと、だれにも気づかれないうようにつぶやいた。

「つまりオカルト研は鈴本さん一人でひっそりと活動しているわけか」

「うんうん、それでぼくは彼女と同じ学科で、お互いに知り合いだから、たまにオカルト研の活動内容とかもたまに聞かせてもらったりするんよ。あれは話で聞くと結構おもしろいね。実際にやってみようとは思わないけど。でね、次が重要なんだ」

ここで、平尾は一呼吸おいて本題を話し始めた。

「今週の火曜日のことでね、昼休みに鈴本さんに会ったんだけど、そのときの彼女、様子がおかしかったんよ。なんだかとても興奮しててね。それでぼくは、どうしたの？ 何かあったん？ と訊いた

のさ。すると彼女こう言ってきたんだよ。『靈魂を見た』とね」

わたしは怪訝な顔をして平尾を見た。

「そんな顔でぼくを見るなよ。ぼくはありのままを伝えているだけだし」

「それで、靈魂を見たとはどういうことなのかな？」英知は興味津々のようだ。

「ぼくが聞いたままのことを言うと、鈴木さんは毎週、月曜日と木曜日に近場の心霊スポットに行つて、心霊写真を撮影してるんだよ」
「なるべく手短に頼む。その話を延々と聞いていると、頭の中にボウフラが湧いてきちまいそうだ」わたしは我慢強くいった。

「それで彼女は今週の月曜にいつも通りに心霊スポットに行つたんだけど」ここで平尾は言葉を溜めた。「そこで緑色に光る丸い浮遊物を見たんだつて」

「ええー、それほんと？」イルイは半信半疑という声を出したが、目が輝いていた。

どうやらわたし以外は、平尾の話に惹きつけられているらしい。しかし、わたしにとっては、その手の話はいつ聞いても胡散臭くて信じる気になれなかった。

「なあ、平尾。人間の目というのは意外といい加減なつくりになっているんだ。だからその、鈴木さんが見たという謎の発光物体は、十中八九錯覚だったに違いない」

「うん、最初その話を聞いたとき、ぼくもそう思った。でね、『信じられないな』って彼女に言つたんだよ。そしたら彼女、怒つてね。次の木曜に同じ場所に行くから、ぼくも一緒に来いつて言われてね」
ちなみに今日は金曜日だ。ということとはつまり……

「つまり、お前は昨日鈴木さんと一緒に靈を見た場所に行つたわけか？」

「うん、そうなんだよ。そしたらね……」平尾はここで言葉を切り、わたしたちを順々に見た。どうやら聞き手を注目させる効果を狙っているらしい。「出たんだよ。本当に。彼女が言つてた通り、そい

つは緑色に光って、空中をふらふら漂っていたんだよ」平尾は思い切り感情を込めて言葉を振りまいた。

「それに、さらに驚いたことがあってね。その緑の浮遊物、急に現れて十秒くらい空中をふらふらしていたんだけど……なんと、一瞬で姿を消しちまったんだよ。信じられるか？ 本当に、パツ、という感じで消えたんだ」

「一瞬で消えた、か」わたしは平尾の話がどうもいまひとつ信じられない。はつきりいつて、わたしたちをからかっているのではないかと疑っている。

「そんな突拍子もない話は信じられないな。一から十までお前の作り話じゃないのか？」

平尾はため息をついた。

「本当だよ。なんなら鈴木さんにも訊いてみればいい。ぼくの話をちゃんと裏付けてくれるさ。それと最初にいつたろう。このことでもお願いがあるんだ」

「一体なんだよ？」

「さっきもいったように、鈴木さんの話を最初に聞いたとき、ぼくはどう考えてもありえない話だと思ったんだ。だからつい勢いで『もし本当にそれが霊的なものなら、君に一万円プレゼントするよ』とね、いっちゃったんだ」

なんとバカなことを言う男なんだ、こいつは。いや、わたしが同じ立場ならこいつのように大口を叩いていたかもしれない。ともかくこいつは一万円損したわけだ。だとするとこいつのお願いというのは……

「まさかお前……わたしに金を貸せと？」

「違う違う、そうじゃないんだ。ぼくが鈴木さんと一緒に、謎の発光物体を見たあと、彼女はがめつくお金の話を覚えててね、帰り道でお金の催促をしてきたんだ。ぼくは本当にあんなものが現れるなんて思わなくて、この理不尽な結果を認めたくなかったんだよ」

「金を出し渋るお前のほうが理不尽だ」

「まあ落ち着け、ちゃんと続きを聞いてくれ。お金の催促をされたから、ぼくはついこう言ったんだ。『あれは幽的な存在じゃない！何かの自然現象か、もしくは誰かのいたずらだ』ってね。そうしたら彼女は毛虫でも見るかのような目をして、『じゃあ一週間あげるから証明してみなさい』と言ってきたんだよ。だからぼくの首の皮はまだつながっている。」

そこで君たちにも協力してもらいたいんだ。ぼくが見たあの発光物体が、霊的存在ではないということをぼくと一緒に証明してもらいたいわけだよ」

「残念だがそれは霊的存在に間違いないな」私はぴしゃりといった。「おい！ さつきといっていることが違うじゃないか。信じられないとか、目の錯覚だとか、いろいろいつていただろ」

「お前が一万出せば済む話だろ」

「いやだ。福沢先生を手放したくない」

まったく、この男には処置なし、だな。

「身から出た錆だ。自分で何とかしろ。それとわたしたちは忙しいのだよ。お前にかまっている暇はない」

「お前らのサークルは本を読んでいるだけだろ。忙しいわけないし。推理小説マニアの知識を生かして、謎の球体の正体を暴いてくれよ」いちいち腹立たしいことをいう奴だ。

「今回はいろいろ事情があつて、自作の小説を書かなくてはいけないのだよ。これからその話し合いをするんだ。さあ、邪魔だから帰ってくれ」

平尾は往生際が悪かった。

「小説なんか、他の作品を真似て書けばいいだろ。ほらアガサ・クリステイなんてどうだ。あの人たくさん作品書いているから、マイナーな作品からどれか選んで、そのストーリーとトリックを拝借すれば一冊書けるでしょ」

高ぶっていたわたしの気持ちが一気に落ち着いた。そして腹の底から黒く冷たいものが這い上がってくる感覚が訪れた。

「おいド腐れ」わたしの声にイルイと英知は息を呑んだ。平尾も不穏な気配に気づいたようで身を硬くした。「そういうのは盗作というんだぞ。しかも、アガサ・クリステイの作品をパクれたと？ クリステイは推理小説の新たな可能性を開拓した偉大な先駆者だぞ。その偉人の聖域に土足で侵入してアイディアをかつぱらうなど万死に値する重罪だ。そんなことを平気で口走る貴様は地中を這い回る蛆虫以下だ。一回死んで、人生初めからやり直せや」

目の前の知り合いのあまりの変貌ぶりに平尾は真っ青になった。やつは病気の鯉のような顔をして口をぱくぱくさせている。

「い、いや、ちよつと、今の言葉は、例え話というか、冗談というか」

「それで？」

「はい？」もはや平尾の声は、消えそうなほどか細いものだった。

「それで、お前はいつまでその汚らしい姿を俺の前にさらしているつもりだ？ このなめくじ野郎！」

「ひい！ すいませんでしたああ」

平尾は回れ右をすると、ドアを急いで開け放ち、一目散に退散した。

平穏な空気が再びサークル室を包んだ。

「まったく、時間を無駄にしたな」わたしはもとの調子に戻っていた。「まあ、平尾の訪問はなかったことにして、小説の構想を考えよう」

英知はしぶしぶ賛成の姿勢を見せてくれたが、イルイはなにやら考え込んでいる様子だった。彼女は手のひらを額につけて、テーブルの上に視線を落としていた。

この姿勢は彼女の頭が高速で動いている証拠だ。

「どうしたイルイ？」わたしは思わず訊ねた。

イルイはゆつくりと上体をお越し、わたしを見た。

「さっきの幽霊の話なんだけど、本当だと思う？」

平尾がいなくなると同時に、奴の怪談話はわたしの中ではどうで

もよくなっていた。だからこのメンバーだけでさっきの話を続きが出てくるとは思わなかった。

「いきなりどうしたんだ？ お前そういう話好きだっけ？」

「二人は幽霊の存在を信じる？」イルイはわたしの質問をスルーして続けた。強引な会話をするときのイルイは、とっておきの考えを持っている。

それが何かはわからないが、とりあえずわたしは彼女の質問に答えた。

「あんまり信じる気にはなれないな」

「怪談は好きだけど、霊の存在を信じているかと訊かれたら、信じないと答えるね」英知も否定的な意見だった。

「じゃあ、鈴木さんと平尾くんが見た光る浮遊物はなに？」

わたしは平尾の話を思い返した。あいつは確かに『見た』といった。そのため一万円を失う運命にたどり着いたのだ。どうやら鈴木とかいう女の狂言ではないようだ。

緑に光る宙を漂う球体、しかもそれは一瞬で消えた。確かに不可解だ。

「説明できないが、何か偶然の一致でそのような現象が起きたのではないか？」英知は自分の意見を述べたが具体性は一切なかった。

わたしはお手上げだった。

「謎だな」

イルイはにつこり微笑んで、とんでもない提案をした。

「わたしたちでその正体をはつきりさせてみない？」

「おいおい、本気か？」わたしは呆れていった。「光る玉の正体を調べてどうするつもりだ？」

イルイが次に放った言葉は、わたしの心の鐘楼しんろうを見事に打ち鳴らした。

「光る玉の正体を暴いて、小説のネタに使おうよ」

1 - 2 ・夜の神社にて

イルイのアイディアは悪くない、いや、はつきりいつてよかった。小説の内容を一から考えるよりも、普段の生活からネタを探して、それを脚色していくほうが簡単ではないか。しかも、今ちょうどおあつらえ向きの話が目の前に転がっている。これは利用させてもらうしかない。

「すごいひらめきだな。光る玉の正体を暴いて、そのことを小説にすると考えたものだ」わたしは素直に感嘆した。

「えへへ」イルイはうれしそうにはにかんだ。

「それを題材に小説を書くにはいいが、おれたちに霊の正体を暴けるのか？」

「現場に行っている調べれば手がかりになるものがあるはずだよ。まずは、オカルト研の鈴木さんに話を聞いてみよう。平尾より詳しい話が聞けるはずだ」

というわけで、わたしたちは次の月曜に、当人に会うことに決めた。平尾にことづけを与えて、鈴木ほのかにすいどう会のサークル室まで来てもらうことにした。

わたしたちが鈴木ほのかを待っているとき、わたしは彼女の容姿を想像しながら彼女の到着を待っていた。オカルト研という肩書きばかり意識していたせいで、わたしが想像した鈴木ほのかは、痩せていて肌の色は病的なくらい白い。黒髪、尼そぎ、地味な色の服を厚着して、瓶底眼鏡をかけ、首から数珠か十字架のネックレスをかけてた、とんでも漫画キャラのようになってしまった。

わたしは苦笑いした。これではオカルト研の擬人化だな。

こんな程度の低い想像しかしていなかったもので、ものすごい美人がトートバックを片手に、ここに入ってきて、自己紹介をしたとき、わたしの思考は一瞬停止した。

「鈴本ほのかです。平尾君がいつていた人はあなたたちですか」凜とした声がサークル室にいきわたった。

わたしは哑然とした。わたしが想像していた人物とはまるっきり違う。

さらさらした黒い髪は艶かしく輝き、肌は透き通るように美しい白、頬にはほんのりと赤みがさして、暖かな生命力が見るものに伝わってくる。すらりと伸びた背は、わたしと同じくらいだろう。服装も春の到来を思わせる淡い明るい色柄のものだ。この女性を花に例えるなら、睡蓮がぴったりだ。

「ええ、どうぞお座りください。実は、鈴本さんにお願ひがあるんですよ。あなたが先週目撃した光る玉について話を聞かせてもらいたいのです」

「なるほど、あなたがたも霊界に魅せられた人々というわけですか」「いえ、違います」わたしはきっぱりといった。

「違う？」鈴本ほのかは眉をひそめた。「では、なぜその話が聞きたいのですか？」

これは面倒な人だな、とわたしは思った。

「わたしたちはね、その光る玉の正体をはっきりさせたいのですよ」鈴本ほのかの目がぴかりと光った。

「はっきりさせる？ 何をおっしゃっているのかしら。あれの正体ははっきりしていますよ。大きさ、色合い、そしてあの動き……あれは間違いなく集合型靈魂です。つまり亡くなった生き物たちの魂がある強力な怨念に引き寄せられ、融合した結果、一つの巨大な零体となっているのですよ」

わたしはイルイと英知をちらりと見た。二人とも話しについていないようで、遠くのほうを見ている目をしていた。わたしも似たような表情をしているのだろう。

大体、彼女はなぜそんな地球の裏側までぶっこんでいるような説明を自信満々にできるのだろうか？ きっと何かしら彼女なりの根拠というものがあるのだろうか、今はそのことを聞くつもりはない。

聞いたら最後、脳みそが溶け出しそうな異次元理論を延々と聞かされる羽目になるのは目に見えている。

「あなたは、その光る玉の正体を霊的存在と思われるようですが、わたしたちは違う存在だと思っています」

彼女はにやりと笑った。

「つまり、光の精霊だと思っているわけですね」
ウィル・オ・ワイプス

なぜそうなる！ この女と話していると一時間で脳卒中を起こしてしまいそうだ。

「自然の偶然が作り出したものか、人工物だと思っているのですよ」わたしの語気は自然と強まり、早口となった。「大体わたしたちは超常現象を基本的に信じていません。いいですか、わたしたちはあなたが光る玉を見たときの詳しい状況が知りたいだけなんですよ。いつ、どこで、どのように、その光る玉を見たのですか？ それを教えてください」

鈴木ほのかは急に面白くなさそうな顔をした。そしてため息をついて話し始めた。

「あなたたちも自分の理解できない世界を認めない、度量の小さい人たちですか。」

まあいいです。初めから話しましょう。最初にアレを見たのは、先週の月曜、ちょうど一週間前です。私は毎週月曜日と木曜日の夜にこの近辺にある十四ヶ所の心霊スポットから一つを選んで、その場所ので心霊写真の撮影をしているの」

こちら辺に十四ヶ所も心霊スポットがあるとは初耳だな。

「その日、私は大吉神社に行っていたのよ。それで神社のすぐ裏手にある山にあの霊魂が現れたのですよ。霊魂は急に現れて、その場を漂っていました。それでわたしは夢中になって写真を撮ったんですよ。霊を実際に見たのは、あのときが初めてでした。霊魂はしばらくすると、わたしの目の前からフツと消えたんです」

「そのときの写真、今もってますか？」イルイがいやにゆっくりとした口調で訊ねた。

「ええ、ありますよ」

鈴本ほのかは誇らしげな表情をして、バッグの中からデジタル一眼レフカメラを取り出した。

「おや、いいカメラじゃないですか」と英知がほめた。

「感嘆するものを間違っていますよ」そういうと鈴本ほのか、どうだといわんばかりに、液晶画面を見せ付けた。

液晶画面には一枚の写真が映っていた。その写真は全体的に暗かった、背景はほとんどわからない。しかし、目的のものは苦勞なく認識できた。

緑色の小さな丸が写真の右上に写っていた。おそらくこれが彼女のいつている靈魂なのだろう。

「ふふつ、驚いて声も出ませんか？」

「まあ、デジタルカメラの画像はパソコンを使えば加工できますからね。ちよつと知識がある人なら、このくらいの変な点なんてすぐ付け足すことができますよ」英知が命知らずなことをいい出した。

「なんですって！」鈴本ほのかは、わたしの思ったとおり、烈火のごとく怒り出した。「これは真正銘本物ですよ」

「でも、あなたの話を聞いていると、いろいろ引つかる点があるんですよ。例えば、靈魂を実際に見たのはこれが初めてだといっていました、その言い方だと、あなたは今まで肉眼で靈を見たことはなかったようですね。でしたら、あなたは靈感がある体質ではないのでしょうか。それが先週になって、急に靈が見えるようになったのは少し、いや、かなりおかしくありませんか？ ついでに平尾君もその靈魂を見たはずですよ。誰にでも見える靈なんて存在するのですか？」

「死んだものの未練が強ければ強いほど、靈魂が現世に及ぼす膨大になるのですよ。あの集合型靈魂の核となっている魂はこの世にきわめて強い未練を残しているに違いありません。その結果、周りにいるほかの人間や生き物たちの魂を取り込み、巨大な靈魂と化しているのです。そして、その巨大さゆえに、靈感に關係せずに、誰

にでもその姿を見ることができるとですよ。もちろん、あなたたちもね」

このままでは話は平行線で終わりそうだな。まあ、彼女の目を覚まさせることが我々の目的ではないので、このまま話を打ち切ってもいい。

だが、肝心の目的は、彼女のいう靈魂の正体を探ることなのだ。彼女から得られた情報は平尾と対して代わりがない。場所がわかったぐらいだ。

はつきりいつて、鈴本ほのかの頭は異次元空間に通じているらしいので、これ以上、正常で、ありのままの事実だけの話を彼女から聞くことは困難を極めるだろうとわたしは思った。ならば、正確な情報を手っ取り早く掴む方法はこれしかないだろう。

わたしは思い切っていった。

「鈴本さん、そこまでいうのなら、その靈魂を我々にも見せてくださいよ。誰にでも見えるものなのでしょう。だったら実際に見て、それから判断しようじゃないですか。本物の靈なのか、科学的に説明がつくものなのかを」

わたしの言葉を聞いて、鈴本ほのかに挑戦的な笑みが浮かんだ。

「いいですよ。今晚また、大吉神社に行きます。そのときにあなたたちもついてきてくださいよ。運がよければわたしのいつていた靈魂を見ることができますよ。そして、理論的に説明のつかない存在だと思ひ知ることでしょう。大吉神社の場所をご存知ですね」

「ええ、わかりますよ」わたしは答えた。

「今晚の八時に神社の鳥居の前に来てください。怖いなら来なくてもいいですけど」

「必ず行きますよ」

「そうですか、ではわたしはこれで失礼します」

彼女は部屋から出て行った。嵐は去った。

「なんというか」英知は苦笑いをしていた。「強烈な女性だったね」イルイもそれに同調した。

「うん。あんなに真剣な目をして、幽霊ことを語った人を初めて見たよ。黙っていればものすごい美人なんだけど……」

わたしは彼女を表すのにぴったりの言葉を見つけた。残念美人、これに匹敵するものはないだろう。

その夜、一番最後に到着したのはわたしだった。大きなリュックを背負った鈴本ほのかは、イルイと英知を相手に、自分のこれまでの活動について得意げに語っていた。五分遅れてきて正解だった。

大吉神社は名前と違っておめでたい雰囲気など微塵もなかった。四十四段の石段を登ったところにある小さな本殿は朽ちかけており、まわりには雑草がまばらに生えていた。

本殿の後ろに回ると、鈴本ほのかが見た山を見ることが出来る。境内から問題の山までの水平距離は、十から十五メートルくらいだろうか。この二つの間にはU字状の谷によって隔てられていた。谷といっても、底までの深さはせいぜい四、五メートルくらいだろう。それでもこの谷のせいで、光る玉が現れても、すぐに玉の元に駆け寄ることは不可能だ。

わたしたち三人は転落防止用の柵の前に立ち、懐中電灯で向かいの山を照らした。山は草木で覆われていた。それほど大きな山ではない。今わたしが立っている高さが、だいたい山の麓と中腹の間くらい、つまり山全体の四分の一だ。

「靈魂はいつ頃現れるんだ？」

わたしは振り向いて、鈴本ほのかに訊いた。そして固まった。

彼女は白い粉を使って、地面に怪しい模様を描いていたのだ。

「な、何をやっているんだ？」

「結界を張っているのよ。前に描いていたやつが雨で消えたから、今描きなおしているのよ。この中にいれば悪い霊から身を守ることができるわ」

「なるほど」わたしの感情は死んだ。「頼りになりそうだなあ」

そして十分後、結界は完成した。

「さあできたわよ」鈴本ほのかは自慢げな顔をしながら、結界を指差した。「さあ、入りなさい。線を踏まないようにしてね。魔力が弱まるから」

自作の結界は、円の中に六芒星ヘキサグラムが描かれており、六芒星の中心には漢字で『守』と書かれていた。冗談のように思える斬新な結界だ。彼女はランタンを点けて足元に置き、リュックの中からカメラを取り出した。どうやら臨戦態勢が整ったようだ。

照明はランタンと半月の明かり以外は何もなかった。

「出てくるかな？ 光る玉」イルイが無邪気に訊いてきた。

「出ないと困る。現物を見るためだけにわざわざここまで来たんだ。空振りだったら、時間の無駄以外のなんでもないぞ」

「この前の木曜日に靈魂を見たときは、だいたい何時ごとだったか覚えていますか？」英知が鈴本ほのかに訊ねた。

「さあ、あまり覚えてません。九時二十五分じゃなかったかしら」

「月曜日もそのくらいの時間でしたか？」

「うーん、たぶんね」

今は八時二十三分だ。光る玉が時間に正確なら、あと一時間も待たなければならぬ。

「週に二回もこんなことをしているのですか？」わたしは退屈が嫌いだ。なので、適当に話をして時間を潰そうとした。

「こんなのとは何ですか。まるでわたしのやっていることが価値のないことのような言い方じゃないですか」どうやらわたしは話のふり方を間違えたようだ。「わたしが選んだ十四の心霊スポットは本物ですよ。そこを探索しているときに、何かがいる気配を感じたことは一度や二度ではありません。どの心霊スポットにも確実によくないものがある感じがするのです」

「わかりました」わたしは焦って答えた。鈴本ほのかは、このままでは十四の心霊スポットを一ヶ所ずつ丁寧に説明していきそうだった。「ところで、そのカメラけっこういい品物ですね」と昼間に英知がいつていた気がするな。

「ああ、このカメラは同じ学科の飯島君が進めてくれたのですよ。彼は写真部で、カメラに関しては詳しくてね。わたし、飯島君に、暗いところでもばっちり写るカメラならどれがいい、と訊いたことがあるんですよ。それで買ったのがこれです」

初めて彼女とまともな会話ができた気がする。まったく、普通に振舞ってさえいればものすごい美人なのに……神はなぜこのような人間を創り賜もったのか？

二十分が過ぎた。もう二十分が過ぎた。そして、三回目の二十分が過ぎたとき、ついにそれは起こった。

「あれを見る」

最初に気がついたのは英知だった。わたしは英知が指差している方向に目を向けた。向かいの山に、それはあった。木々の間を緑色に光る玉が漂っていた。本当に出た！ここからでもはつきり見える大きさだ。鈴本ほのかはカメラのシャッターをきり、イルイは興奮して騒いでいる。

「ちょっと！とり憑かれますよ」鈴本ほのかの制止を無視して、わたしは急いで転落防止用の柵まで駆け寄った。なるべく近くで光る玉を見たかった。

光る玉は、周りの風景を照らすほどの激しい光は放っていないかった。自身が光っているだけだ。だが、それが逆に不気味さをもしだしていた。闇にぼかりと穴が開いたように、そこだけが幻覚的な色に染まっている。光る玉は右から左へ、ゆっくりと、ふらつきながら移動している。そして、驚くべきことに、話の通り、本当に一瞬で消えたのだ。光る玉は跡形もなくなり、目の前には元の闇だけが残った。わたしは瞬きすらしていなかったというのに、それが一体どういうことだ？

まさに百聞は一見にしかず。これは想像以上だった。緑色に光る玉が急に現れ、動き、しかもわたしの目の前で消えた。霊などいないと豪語したものの、これをどう説明すればいいのか、わたしにはわからなかった。

「どうですか、これで霊の存在を信じる気になりましたか？」鈴本ほのかは勝ち誇った口調でいった。

「よく考えてみないと、なんともいえないかな」これは明らかに強がりだった。

わたしの内心を見抜いたのか、彼女は余裕な態度を崩さなかった。「そうですか。まあ、そのうちあなたがたも、集合型霊魂説を認めることになるでしょうね」

その夜は、そこで解散となった。鈴本ほのかは自転車にまたがり意気揚々と引き上げて行った。わたしたち三人は自転車を押しながら、並んで歩いた。

話は当然、あの光る玉のことになった。

「あの光る玉、話に聞いた以上だったな」わたしはいった。

「そうか？ 話の通りだったじゃないか。緑色で、光って、動いて急に消える。まったくその通りだったじゃないか」英知はさりといった。どうやらわたしほど衝撃を受けていないようだ。

「実物を見て驚いたのは、タケ君の想像力が低いからだよ」なんともうれしいことをいつてくれる。

「お前だって、騒いでいただろ」わたしは言い返した。「ともかくこれで光る玉が実在することがわかった。次はあの玉の正体を暴くぞ」

「どうやって？」二人が訊いてきた。

「ふん。単純じゃないか明日の夜、あの山に登って、光る玉が出た場所でスタンバイしておくんだよ。そしたら光る玉の正体は何なのか一発でわかる」

「ずるい」イルイはこの方法が気に入らないようだ。

「その方法はスマートじゃないね」英知も批判的な意見だ。

「わたしの頭の中には灰色の脳細胞が詰まっていけないのでね。現実的な方法でやらせてもらう」

「それならこうしよう。モナミ^{友よ}、英知はボワロネタで返してきた。

「みんなであの光の玉の正体を推理するんだ。俺たちの目的はあく

までも小説を書くことだ。みんなの出した答えが事実と違っていても、理論的に光る玉の正体を説明できるなら、それを小説に書けばいい。そして納得のいく答えが出なかったら、現場に行って正解を見る。どうだ？」

悪くない提案だ。確かにわたしたちの目標は小説を書くことだ。わたしたちの考えた光の玉の正体が、実際の正体と違っていても、話の材料になれば問題ない。しかもわざわざ現場に向かう手間も省ける。

わたしは英知のすばらしい提案に賛成した。

「ああ、いいぞ。イルイはどうだ」

「楽しそう、推理小説好きの血が騒ぐわ」

「決まりだ。期限は次の木曜日の十三時でどうだ。それまでにわたしたちなりの解答が出せなかった場合は、山に登る」とわたしはいった。

「オーケー」

「うん、いいよ」

「とりあえず家に帰ったら、各自で自分の説を一つ考えておいてくれ、明後日のサークルで自分の考えを発表することにしよう」

推理小説を読みながら犯人を推理したことは何度もあった。しかし、現実世界での謎の推理はこれが初めてになる。遠足前夜の小学生のようにわたしの心は浮き立った。

1 - 3 ・ 光の裏

現実の壁は高く分厚かった。軽い気持ちではこの壁を越えることも、崩すこともできそうにない。つまり、家に帰って光る玉についていろいろと考えたが、何一ついい仮説が思い浮かばなかった。

「人知が及ばぬ世界、まさか霊界は本当に存在するというのか？」
火曜日のサークル室でわたしはうなった。

「なに言ってるの？」イルイは本から視線を上げてわたしに問いかけてきた。

「どうやら霊の存在を認めるときがきたようだ」

「ああ、光る玉の正体について、それらしい答えが見つからないのね」

「まあそうだな」わたしはちらりとイルイを見た。「イルイはもう自分の仮説を立てたのか？」

「うん」イルイはにこにこしながら答えた。

「参考にしたい。聞かせてくれ」

「えー、どうしようかなあ」

「頼む」イルイはもったいぶっているが、本当は早く自分の仮説を発表したいはずだ。こうやって下手に出れば話してくれるはず。

「仕方ないなあ」予想通りの反応だ。「特別にタケ君にだけ話してあげましょう。グリーンカラー 霊魂徘徊事件を」

なんてひどいネーミングなんだ。しかも事件じゃないし。

「この発端は一年前にさかのぼります。まだ大学に入りたての初々しさ残るほのかさんは、人生の一大決心をします。それが彼女の長年の夢だったオカルト研究会の創立でした。

ところがいきなり問題が発生します。その問題は単純にして致命的、そう、部員が集まらなかったのです！」

イルイは芝居がかったようすで語りだした。

「その話はもう平尾から聞いてるぜ」

「ちょっと、そこ！ 話の腰を折らない。もう話してあげないよ」
「すいません」

「えーっと、どこまで話したっけ？ ああ、そうそう。部員を集めることができなかったほのかさんは、現代科学の発達とともに陳腐化していった超常現象の地位向上のため、西へ東へと奔走し、独自の研究を開始したのです。自分の研究を認めてもらうことで、オカルト研への偏見がなくなると信じて……」イルイは感情たつぷりに話をしていた。

「その部分完全に創作だろ」

「次に余計なことといったら眼鏡割るから、あと本当に話をおしまいにするよ」

「わかった。心の中でつつこみを入れるよ」

「えーっと、ところが彼女の研究は、ことごとくうまく行かなかったのですよ。宇宙人との交信には失敗し、心靈写真も撮ることができず、拳句の果てには……えーっと」

「考えてなかったのかよ！ こいつ勢いだけでしゃべっているな。」

「まあとにかくいろいろうまくいかなかったのです。そして、度重なる研究のため、会の運営資金が尽き始めたのです。ほのかさんはバイトをして何とか資金調達を行っていましたが、ある日このままでは意味がないと悟ったのです。実りのない研究を続けても、人々の目を引くことはできない。このままでは部員は永遠に確保できない。こう思ったほのかさんはついに研究者としての道を踏み外してしまいます。彼女は霊の存在を捏造して、オカルト研の知名度を高めようとしたのです。そして、鈴本さんの謀略によって登場したのが、あの緑色に光る靈魂なのです」

「つまりあの光る玉は、鈴本ほのかが仕込んだというのか」

「うん、そうだよ」

「どうやったんだ？ 鈴本ほのかはわれわれと同じ境内にいたはずだ」

「向こうの山には共犯者がいたのよ。光る玉はその共犯者がつくっ

ていたの」

鈴木ほのかの自作自演というのは、ストーリーとしては面白かった。しかし、まだ肝心要の部分が残っていた。

「光る玉はどうやって作り出したんだ？」わたしは一番重要な部分を訊ねた。

「緑色に塗った電球を使ったのよ。電池と導線があれば緑色に光らせることができるでしょ。それを手に持って、ゆっくりと歩き回れば、昨日見たような光景をつくることができるのよ」

イルイは自信ありげに語ったが、わたしはその意見に賛成できなかった。

「違うと思う」わたしはズバリいった。「電球だと光が強すぎる。

それだと周りの風景まで照らすことになると思う。昨日見た光る玉は、玉だけが光って、きれいに漆黒の中に浮かんでいたよ」

「遠くから見たせいで、玉だけが光っていたように見えたのかもしれないよ」イルイは反論した。

「いや、そうは思わないね。遠くといってもせいぜい十五メートルくらいだ。そのくらいの距離ならちゃんと眩しさを感じるよ。でも昨日はそんなことはなかった。あの光は照明器具の類じゃないね」

わたしはさらに問題点を指摘した。

「あとは大きさのこともある」

「大きさ？」イルイは眉をひそめた。

「われわれは神社の境内から見たから、あの光る玉は、ビー玉くらいのサイズに見えたけど、実際の大きさは直径十五、いや、二十センチくらいあるんじゃないのかな。直径二十センチの電球なんて見たことがあるか？」

「うう、探せば見つかるかもしれないじゃない」イルイは食い下がった。

「じゃあ最後に一つ。光る玉をどうやって消したんだ？」

「電源を落としたら消えるよ」イルイは当たり前じゃん、と言わんばかりの調子だった。

「確かに電源を落とせば電球の光は消える。でも、一瞬で真つ暗になるわけではないんだよ。家の照明で試して見るといい。スイッチをオフにすると光はしばらくして消えるはずだよ。まあとにかく、照明はスイッチを切ってから完全に暗くなるまで、一、二秒ほどのタイムラグができる。」

わたしは昨日、あの玉を瞬きもせずに見ていたけど、あれはまさに、消滅したという表現が正しいかな。どう考えても照明はあんな消え方しないよ」

「つまり、タケ君は私の説だと、見え方、大きさ、消え方の三つに無理があるといいたいわね」

「まあそういうことになるかな」

イルイはがっかりしたようだ。先ほどの説を披露することで、わたしの賛同を得られると思っていたらしい。しよげた顔を見せられてもわたしの意見は変わることはなかった。あの光る玉は照明を使用した眩しい光ではなかった。あれはもつとぼんやりとした光だった。

それに遠くとはいえ、照明を手にとってわれわれの前を歩き回れば、それだけ姿を見られる危険が高くなる。光る玉にあわせて懐中電灯を向けるだけで、馬脚を現す事態が起こるのだ。わたしならそんな綱渡りに近い方法など採用しないだろう。

停滞した雰囲気がサークル室を包み始めたそのとき、英知が負のオーラをまとって入室してきた。

「やあ」英知は明らかに活力が足りていなかった。

「どうしたんだ？ 元気なさそうだな」

英知は椅子に座り、ゆっくりと説明し始めた。

「昨日家に帰ってから、ずっとあの光る玉の正体を考えていたんだよ。ずっとね。それで、時計を見たらもう一時になっていたんだ」英知はここまでいうと、力のない笑顔を見せた。「部屋の電気を消して寝ようとしたときに、足がかりになりそうな考えが思い浮かんだのさ。そこから電気をつけて、机に向かっていろいろなパターン

の仮説を考えたんだよ。それで気がついたら明け方の五時半になっていてね。参ったよ。今日の一限目は小テストがあったのに。おかげで今日は三時間しか寝てない」

「それであの光る玉がどうやって作られたのかわかったの？」イルイが熱いまなざしを英知に送った。

「わかった」英知はにやりとした。寝不足のせいか邪悪な笑顔に見える。

「聞かせてくれないか。あの玉はいったい何なんだ？」わたしは前のめりになりながら訊いた。

「発表は明日だろ。それまで待つてくれよ。俺は、光る玉の正体には見当をつけているんだ。けどね、誰が、何のために、やったのかはまだわかっていないんだ。つまり俺の解答は三分の一くらいしかできてないんだよ。今日と明日で残りを調べるから、今はまだ待つてくれないか」

「重要な手がかりを握ったまま、そのことを人に話さないのは死亡フラグだぞ」わたしはこれ以上ないほどの的確な指摘をした。

「推理小説のお約束だね」とイルイ。

「現実でそんなこと起きるかよ」英知もにやにやしながら答えた。

結局、わたしは明日、英知の答えを聞くことにした。

「じゃあ、明日の十七時にサークル室に集合、そこで自分たちの推理の結果を発表すると言うことでいいな」

しかし、英知は時間の変更を求めてきた。

「いや、十九時にしてくれないか」

「え？ どうして」

「準備があつてね。それと暗くなつてからの方が、都合がいいんだよ」

どうやら英知の奴、何か考えているらしい。まあ断る理由はないし、ここは英知の好きにやらせて見よう。

「ああ、いいぞ。十九時だな。イルイはどうだ？」

「わたしも大丈夫だよ」

英知は自分の意見が通って満足そうにうなずいた。「よし、それじゃあ明日の十九時を楽しみにしてくれ。度肝を抜いてやるよ」

そういうと英知は、寝不足でふらつく足取りのままサークル室から出て行った。

「準備って何だろうね？」イルイは英知が出て行った後のドアを見ながら訊ねた。

「さあ、わからないけど、あいつのいつていた、誰が、何のために、を調べるつもりなんじゃないのか」

わたしは今自分の言った言葉を反芻した。『誰が』、『何のために』、この言葉が出てくるということは、英知はあの光る玉は人工的に生み出されたものだと思っっているようだ。

ならば、昨日、鈴木ほのかと一緒に神社に行ったとき、向かい側の山には誰かがいたということになる。

いったい誰だ？ あの手には当然照明など存在しない。その未知なる人物Xは、あのすべてを黒に染め上げる闇の中になぜいたのだ？ やはりイルイの言っていたように、鈴木ほのかが靈魂の自作自演騒ぎを起こしており、向かいの山には闇に溶け込んだ彼女の共犯者がいたのだろうか。

それとも、英知の奴は、これとは違う解答を持つてくるのだろうか。

わたしはここではっとした。小説のネタ集めのために首を突っ込んだが、どうもわたしはこの謎に両肩あたりまで、どっぷりと引き込まれてしまったようだ。わたしの好奇心は、わたしの思考を操れるほどにまで成長し、わたしにこの謎の真相を暴けとしきりにせつていく。

これが知リたがりの宿命だろう。推理小説を読んでいるときだつてそうだ。犯人を、トリックを、結末を知りたいからこそ、何時間ページをめくる。残りのページが少なくなるほど、絡まった糸が一本一本ほどけていくような快感を得られるのだ。

そして、物語のすべてを飲み干したときに、わたしの知的好奇心

は満足する。今回はどうだ？ つじつまあわせの仮説だけで満足できるのか？ 真相が知りたくないのか？ わたしが今向き合っているのは、人の頭の中で作り出された謎ではない。わたしが、いや、われわれが出会ったのは現実にある、生きている謎だ。なあ、永久武よ。これは金を払っても手に入れることのできない謎なんだ。自分には関係ないことと言って、邪険に扱うなよ。中途半端に首を突っ込んで、途中で抜け出すことなんてできないだろ。なんせお前は推理小説同好会をつくるほど、ミステリーが好きなんだからよ。

「ねえ、ねえ、ねえ」イルイの呼び声でわたしは我にかえた。「どうしたの？ ぼーっとしちゃって」

「いや、ちよつと考え事をしていただけさ。それよりもなんだ？」

「みんなで光る玉の正体を推理して、小説を書くのはいいんだけど…… 答え合わせはしないの？」

「答え合わせ？」何のことだと、わたしは首をかしげた。

「だからね。実際の光る玉とわたしたちの推理した光る玉の正体が、本当に同じものかどうなのかが気になるわけ。光る玉の本当の正体を知らない、問題を解いても点数がわからないテストのようで落ち着かないのよ」

「あは、あははははは」わたしは笑った。盛大に笑った。

イルイはそんなわたしを見て、ぽかんとしていた。だが、すぐに顔をしかめて攻撃的な口調でいった。

「ちよつと、なにがおかしいのよ」

わたしは何とか笑いを抑えていった。

「いや、類は友を呼ぶのだな」

どうやらこの物語は未完で終わりそうにないな。

次の日の十九時十五分、サークル室にはわたし、そして、イルイがいた。

「どうやら」わたしはあくびをかみ殺しながらいった。「英知は死亡フラグを成立させてしまったようだな」

そのとき、わたしの携帯電話が鳴った。わたしの携帯電話の画面に『H』の文字が浮かび上がっていた。噂をすれば影だな。わたしは電話にでた。

「どうした英知、遅れるのか？」

電話の向こう側からいつもと変わらない英知の声が聞こえた。

「あーっ、なあ武。もう二人ともサークル室にいるのか？」

「うん、あとはお前だけだ」

「悪いけど、今から二人で農学部西棟の裏に来てくれないか？」

「ええっ、なんでだよ？」わたしは英知の不可解な頼みに戸惑った。

「来ればわかるよ」英知の口調は有無を言わせぬ感じだった。

わたしはため息をつき、彼の希望を了承した。

「わかった。今から行くよ」

「ありがとう。待ってる」

うちの大学には、教育学部、工学部、理学部、農学部、法学部の五つの学部がある。大学の正門は敷地の南にあり、そこからまっすぐ進むと理学部がある。その理学部から見て、北東に教育学部、北西に農学部、さらに南東に工学部があり、南西に法学部が存在する。サークル棟は理学部からずっと東に進んで、教育学部と工学部を超えたところにある坂を下ればたどり着ける。

というわけで、わたしたちは坂をえっちら、おっちら上り、大学の隅っこにある農学部西棟裏に行った。目的地はアスファルトの細い道になっており、道の脇にはクロマツやモミジなどの木が植えられていた。時間も時間なので、そこは近く暗く、西棟の窓から漏れる光だけがあたりをほんのり照らしていた。人は一人も見当たらず、ひっそりと静まり返っていた。無による秩序がその場を支配していた。

わたしたちにとっては、人が一人もないのは問題だ。英知はどうした。

「おい、英知。来てやったぞ」わたしは声を上げたが、返ってきたものは何もなかった。

「英君どうしたんだろうね」

「さあ、知らないよ。とにかくケータイにかけてみるか」

わたしはポケットから携帯電話を取り出し、アドレス帳を開いた。そのとき、わたしの視界の隅に何かが映りこんだ。次にイルイが騒ぎ出した。

「ちよつと、あれ見てよ」その声にはかなりの割合で興奮が混じっていた。

わたしは顔を上げて、それを見た。そして驚愕した。

わたしたちの目の前にはあの光る玉が浮かんでいた。それも一つではない。七、八、いや十体以上いる。その大きさはさまざまだが、どの玉も暗闇の中を上下に動きながら、ゆったりと宙で舞っていた。幻想世界に引きずり込まれたかのように思える光景だ。

わたしたちはその光景に釘付けになった。しばらくすると一つの光る玉が消えた。神社で見た消え方そのままだった。次に二つ目が消え、三つ目も消えた。そして、半分以上の光る玉が消えたときに道の脇から英知が姿を現した。

「英知、これはお前がやったのか」わたしは気持ちの高ぶりを抑えて訊ねた。

「ああ、そうだよ」

英知の口調は実に落ち着いていた。そう、奇妙なまでに落ち着いていた。昨日のサークル室で、光る玉の話しをしていたときは、疲れた様子はあったものの誇らしげに見えた。ところが今の英知には浮ついた感情はまったく感じられなかった。英知の顔には真剣な表情が張り付いていた。

光る玉がもう一つ消えた。わたしはどうやってそれを再現したのかを、英知に訊ねようとしたが、彼のほうが先に口を開いた。

「二人とも聞いてくれ」英知の口調はやはり真剣だった。いったいどうしたというのだろう。「俺は昨日、誰が、何のために、光る玉を作ったのかと言ったよな。それで俺は順番に考えていったよ。

まずは、鈴木さんが光る玉を見たことでということが起きたの

か、俺はまずそのことに焦点を当てた。それで一番最初に光る玉が出てから、誰が何をしたのかを、紙に書き出していったんだよ」

「紙に書き出すほどのことじゃないだろ。鈴木ほかが大はしゃぎして、平尾が一万円失って、わたしたちが神社に行って光る玉を見た、わたしたちが知っているなかで起こったことと言えば、それくらいだ」

英知は首を振った。

「俺も最初はそれぐらいしか思い浮かばなかった。だけど一つ一つのことを思い返すうちに、すぐに重要な見落としに気がついたよ」英知の周りを漂っていた光る玉がまた一つ消えた。「それは鈴木さんが、大吉神社にばかり行くようになったことだ」

わたしにはその意味が十分理解できなかった。それでも、英知は話を続けた。

「それから、鈴木さんが嬉々として写真の撮影をしていた場面を思い返して気がついたよ。あの本殿の裏は光る玉を撮影するにはちょうどいい場所だね。」

わたしはこの二つのことを頭に入れて、鈴木さんとおなじ学科の人たちの何人かに聞き込みをしたんだよ。いくつか有益な情報が得られた。

そして俺は、ある仮説をたてた。その仮説が事実と同じなら、はつきりいつてやばい。俺たちでこの怪現象の原因を止める必要がある」

わたしたちで止めるだと？ これにはさすがのわたしも困惑してきた。

「おい、おい、それはちょっとオーバーじゃないか？」

「今から俺の話を聞いて、それから判断してくれ」

わたしと英知の間で、最後まで残っていた光る玉が消えた。

1 - 4 . 光は消ゆ

次の日、木曜日の十八時に、わたしたちは光る玉が現れた山の、登山口付近に生えている茂みの中に潜んでいた。

あのとき、英知の推理を聞いたわたしたちは、彼と気持ちを共有することにした。彼の推理は無駄がなかったし、もっともらしく聞こえた。この一件には、最初は想像もしなかった人間の欲望が渦巻いている、というのが彼の考えだ。

そして、英知の推理が正しいのなら、その欲望を持つ人間がまもなくここにやってくるはずである。

十五分後、その人物は登山口にやってきた。土がむき出しになった、せまい山道を登ってくる足音が耳に入る。彼は何も知らずにのんびりと歩を進めている。彼がわれわれの潜んでいる茂みの前まで来たとき、わたしたちはそろそろと山道へと進み出た。

彼は熊にでも遭遇したような顔をした。まあ、茂みから人間が出てきたら、誰だって驚くだろう。

われわれの目の前にいたのは、四角顔で、目の小さくて鼻の大きな男だった。服装は山登りにふさわしく、長袖のシャツの上に、厚手のジャケット、ジーンズという組み合わせだった。シャツとジャケットは無地の黒、ジーンズもかなり暗めの色だった。肩からは黒色の大きなシヨルダーバッグがぶら下がっている。

「やあ、昨日はどうも、なかなか有意義なカメラ談義でしたね」

英知は目の前の男に話しかけた。英知曰く、彼はこの人物とカメラについての話をしたらしい。

「君は、昨日カメラの話の聞きにきた……長浜君か」男は英知の名前を、記憶からひねり出すような感じでいった。「こんなところで何をしているんだい？」

「やっぱり飯山さんでしたか」

「え？ 何のことだい？」

「鈴木さんは今日来ませんよ」

英知が放ったジャブは見事に命中した。彼の顔色はみるみる変わっていった。

彼の名前は飯山信吾。平尾や鈴木ほかと同じ学科に所属し、鈴木ほかがかがカメラを買うときにアドバイスを送った人物で、あの夜、光る玉を作り出した人物でもある。

「なんでそこで鈴木さんが出てくるのかな？」彼の口調はゆっくりになった。明らかにこちらを警戒している。

「いえ、別に」英知は偽りの笑みを浮かべた。相手に安心感を与えるような実に穏やかな笑みだ。「ところで飯山さんはどうしてここに？」

「ぼくは」ここで飯山は一呼吸置いた。「この山の上から町の夜景を撮りに来たんだよ」

「そうだったのですか」英知は笑顔を潜めて、臨戦態勢に移った。

「では、そのバッグの中には当然、シャボン玉液と畜光塗料なんて入っていないですよ」

英知の口から放たれた言葉は、飯山の急所を打ち抜いた。飯山は明らかに驚愕し、一歩あらずさった。

「さつきからなんだ、君たちは。言っていることがまったくわからないね」飯山はわめいたがこれは明らかに虚勢だった。わたしの心には何も響かない。彼の言葉は次から次へと宙に消えた。

「でははつきり言いましょう。光る玉は飯山さんが作っていたのでしよう」

「光る玉？ いったい何のことだ？ さっぱりわからないな」

「そんなことはないと思いますよ。鈴木さんは光る玉を靈魂と称して、いろいろな人にこの話を聞かせたといっていました。鈴木さんは飯山さんにも話したといっていました。あなたがまったく何も知らないはずはありませんよ」

「ああ、そのことね」飯山はいかにも今思い出したという口調でいった。

飯山はさらに何か言おうとしていたが、英知の言葉が遮った。

「あなたが先週からここで何をしていたのか当ててみせましょう。あなたは鈴木さんが十四の心霊スポットをいつも同じ順番で巡っていたことを知っていた。だから、その順番から考えて、先週の月曜日にこの場所に鈴木さんがここへ来ることを予測できた。あなたは鈴木さんより早く、たぶん今くらいの時間にここへ来た。そして、この山から向かいの神社が見える場所に陣取り、神社側から姿を見られないように、茂みか草木が密集している場所に身を隠した。次に持ってきた道具をバッグから取り出して、下準備をしたのでしよう。シャボン玉液、洗濯のりと食器用洗剤とガムシロップ、あとグリセリンを混ぜればなかなか丈夫なシャボン玉ができるそうですね。それと畜光塗料を洗面器のような容器に入れて混ぜ合わせる。それから手持ちの懐中電灯の光をそいつに当て続けて、鈴木ほのかが神社本殿の裏側に現れるのを待っただけだ。

あなたは鈴木ほのかがやってきたところ見計らって、懐中電灯の明かりを消した。容器の中のシャボン玉液には畜光塗料が混ぜてあるから、懐中電灯の光をたっぷり吸ってきれいに輝いていたはずだ。その液体の中にハンガーが何かで作った輪を浸して、光るシャボン玉を作ったのでしよう。シャボン玉はご存知の通り、空中を不規則に、かつてきままに動き回る。そして割れると一瞬でなくなってしまう。これは鈴木さんや俺たちが見た光る玉の特徴と一致しますよ」「くははははは」飯山は笑った。「おもしろい話だな。光るシャボン玉ね。それをぼくが作ったというのかい？」

「バッグの中を見ればわかります」

「君たちにそんな権利はない」飯山は落ち着きを取り戻し始めた。「だいたい、何でぼくがそんな凝ったことをしなければならないのだい？」

風が吹き、木々の枝を揺らした。森がざわめいている。聞こえる音はそれだけだ。二人の話は今は止まっている。英知と飯山の視線は空中でぶつかり、弾けた。

わたしとイルイは前日に、飯山が光る玉を作るようになった理由を、英知から聞かされた。最初は到底信じられないような理由だった。しかし、ほかに考えようがなかったし、わたしたちがぶつけた疑問の数々に英知はすべて答えて見せた。

英知は見抜いていた。この騒動の核心を

「説明、しましょうか？」英知はいった。この場の流れが再び動き出した。

「神社本殿の裏からは光る玉がよく見えて、写真も撮りやすいです」英知はここで相手に鋭い眼光を向け、ぴしりと言い切った。「その逆もしかり。光る玉が現れた場所から、つまりあなたのいた場所からだとさぞかし写真が撮りやすかったのではないですか？　鈴本ほかさんの写真を」

飯山の顔が醜くゆがんだ。凶星だ！　英知の考えは、やはり正しかった。

「あなたはだいぶ前から鈴本さんのことをストーキングしてましたね」英知は一気に畳み掛けた。「彼女が心霊スポットに出向くときには必ずこっそりと後をつけて写真をとっていたでしょう。白昼堂々と学内で盗撮なんてできませんからね。人が多くて見つかる危険が高すぎる。それと彼女は、心霊スポットにいるときに、何かの気配を感じると言っていました。それはたぶんあなたのことではないのですか？　あなたはストーキングを彼女に知られそうになったことが何度かあるでしょう。これ以上続ければいつかはばれる。そう思ったあなたは策を練った。そして思いついたのでしょう。十ヶ所の心霊スポットから、一番安全な場所を選び、どうにかして彼女がその場所にだけ来るように仕向ければ、安全に彼女を撮影できる。そして選ばれたのが大吉神社だ。彼女をこの大吉神社にだけ通わせるために、彼女が食いつきそうなくらい心霊現象を演出した。それが畜光塗料を混ぜたシャボン玉だった。あなたの目論見は成功でした。光るシャボン玉を目撃した鈴本さんは、それをめつたに拝むことのできない巨大な靈魂の塊だと解釈した。そして彼女は靈魂

がまた見れることを期待して、次の木曜日も、週明けの月曜日も大吉神社に来了。あなたは隠れてこっそりと彼女の写真を撮るだけだ」
「君は、理論は先走りすぎているよ。なぜわたしがストーカーであることを前提として話を進めているのだ？　うちの学科には、ぼく以外に十二人の男がいるんだぞ。」

それに何より、ぼくは写真部だからわかる。遠くの人物を撮るなら望遠レンズがいる。だけどそれじゃあ、照明のない場所では、暗い写真しか撮れない。カメラに詳しい奴なら誰だって、そんなカス写真を撮るために、光る玉とかいう大掛かりな仕込みなんてしないさ。だから君たちの言っている一件はカメラに詳しくない奴の仕業だ。鈴木さんの振る舞いにうんざりした誰かが、彼女をからかうために起こしたいたずらだ」

飯山は額にじんわりと汗をにじませながら熱弁をふるった。なるほど、彼のいうことは筋が通っているように聞こえた。照明のない場所では、夜間に写真を撮っても暗い写真しか撮れない。だとしたら、鈴木ほのかを安全に撮影するために、光る玉を使い、大吉神社に彼女を釘付けにするという英知の推理は、破綻してもおかしくなかった。

しかし、彼の理屈は英知には通用しなかった。

「俺は昨日、あなたとカメラについての談笑をしたばかりですよ。あなたの持っているカメラは、デジタル一眼レフカメラですよ。デジタルカメラで撮影した画像はパソコンに取り込んで、自由に加工ができるはずですよ。当然画像の明度を明るくすることもね。そうすれば、暗い明るいとはもう関係ありません。写真部に所属しているあなたが知らないとは言わせませんよ。」

これで写真撮影説が息を吹き返しましたね。あともう一つ、昨日のあなたはこう嘆いていましたね。『男ならカメラの一つくらい持っているべきだ。でも、うちの学科ではカメラに興味がある奴が、ぼく以外にいないんだ』とね。

カメラに詳しいのはあなたただだ。あなたが光る玉をつくり、彼

女をこの場所にだけ来させるように仕向けたのですよ」

「ばかばかしい。そんなもの全部作り話だ」飯山の気力は風前の灯だった。

「作り話かどうかは、あなたのバッグを見ればわかることです」英知は毅然として言った。

「そんな義務、ぼくにはない」

「こっちは三人いるんですよ。まだそんなことを言いますか？ いい加減認めたらどうですか？ 自分の敗北を」

飯山はうめき声を上げて、がつくりとうなだれた。もはや逃げ場がないと悟ったようだ。

「一番最初に彼女を見たとき、天使に出会ったと思ったよ。凜とした顔立ち、滑らかな髪、透き通るように白い肌、この世のものとは思えない美しさだった。ぼくはすぐに恋に落ちた。」

でも、その恋心はすぐに揺らいだよ。何せ彼女は口を開けば、幽霊だの、宇宙人だの、未確認生命体だの、そんなぶつとんだ話ばかりするんだ。僕の中では彼女は、その、別の意味で近づきたい存在になった。それでもぼくは彼女の容姿に魅せられたままだった。

遠くから眺めるだけなら最高なんだ。ぼくはしゃべらない彼女を欲した。だから彼女の一瞬、一瞬の表情、しぐさを写真におさめることにしたんだ。

君の言っていたことはだいたいあってるよ。彼女が心霊スポットに出かけるときが、一目もなくて撮影にはちょうどよかった。採れた写真はパソコンで加工して、彼女の姿がはつきり見えるようにした。でも、彼女に気づかれそうになったことが何度もあってたね。彼女に見つかるかもしれないという不安がだんだん大きくなっていった。それで安全な撮影方法を考えて、霊的なものを自分で作って彼女を一ヶ所に留めることを思いついた」

「それで畜光塗料をシャボン玉に混ぜて、暗闇で光る玉をつくったわけですか」わたしは飯山と対面してから、初めて口を開いた。

「いったいどうしてわかったんだ？」飯山は訊ねた。

「目覚まし時計ですよ。うちのは短針と長針の先に、蓄光塗料がついてね。真っ暗な中でも時間がわかるのですよ。それでもしやと思っただけですよ。光の正体はわかった。次に、玉の正体をずっと考えていました。玉の動きや消え方を思い出しながら、搾り出した答えがシャボン玉だったということですよ」

いつの間にか日が西の水平線に隠れだした。空の色がうす紫に変わる。

「それで」英知が最後の仕事に取り掛かった。「今までカメラにおさめた鈴木さんの写真はきちんと消すのでしょね」

「おいおい、冗談言わないでくれよ。ぼくの大切なコレクションなんだぞ」

「鈴木さんに今回の一件の真相をすべて話しますよ」英知は脅しを入れた。

「彼女はオカルトに傾倒しきっているんだ。君たちがいくら理論的な解説をしようとも彼女は、光る玉は霊的存在であって、人のつくったものではないと言うよ。君たちががんばって突き止めた真相も鼻先で笑われるだろうね」飯山は余裕の笑みを浮かべ答えた。

英知は頭をかき、それから左斜め後ろの茂みに向かってしゃべった。

「こんなこと言っていますよ」

次の瞬間、茂みをもろすごい勢いで突き破り、鬼女と化した鈴木ほのかがその姿を現した。彼女は最初からこの場にいたのだ。わたしたちで彼女を説得してなんとかついてきてもらい、わたしたちとは別の茂みに身を潜めてもらった。そして、ことの経緯を隠れてじつくりと見てもらうことにしたのだ。

彼女を見た飯山は、魚のような顔になった。明らかに状況が飲み込めていない。

鈴木ほのかは鹿のように山道を駆け下りてきた。わたしたちを掻き分け、更に進む。

「ソドムにいいいい」彼女は飯山めがけて飛び、脚を出した。「墮

ちろおおおおお！」

見事なとび蹴りだった。鈴木ほのかの足は飯山の腹にめり込み、飯山は吹き飛んだ。彼はそのまま山道を転がり落ち、下まで行つて止まった。彼は全身ほこりまみれになって、仰向けに倒れた。気を失っているのだろうか、それとも死んでしまったのだろうか、ぴくりとも動かない。

「くだらねえことで、わたしを引つ張り出しやがって。研究のためにあてる時間が無駄になったわ」彼女の中で怒りが煮えたぎっていた。「次に同じようなことをやったら、背骨へし折るぞ」

そういつて、彼女は荒々しい雰囲気とともにここから退場した。「というか」イルイはややあきれた口調でいった。「勝手に写真を撮られたことは起こらないんだね」

わたしたちは帰路についた。日はすっかり水平線の下に隠れ、太陽に消されていた暗闇が姿を見せていた。

「どうするかな」わたしは唐突にいった。

「何が？」とイルイ。

「小説を書くにあたって、今回の出来事の真相を、登場人物の名前を変えてあとはそのまま書くか、どうかだよ」

「やめたほうがいいね」英知はきっぱりいった。「人物の名前を変えても、もし、当事者たちがそれを読むと、何のことだがはつきりわかると思うよ。鈴木さんはともかく、飯山はありのままのことを書かれると、コケにされたと感じるのではないかな。」

俺は今回の一件で彼から十分すぎるほどの恨みを買ったと思うよ。なのに、彼に更なる追い討ちをかけて確執を深めることは、正直に言つて避けたい。光る玉のトリックは採用しても、その玉が現れるようになつた経緯は変更したほうがいいと、俺は思う」

わたしとイルイは黙つて彼の意見に耳を傾けた。わたしたちは彼の意見に同調した。そして、光る玉のトリック以外をどうするかと考え始めたとき、わたしの頭に名案が浮かんだ。

「そうだ。イルイが考えた仮説を使おう」

イルイは光る玉をつくったのは鈴木ほのかとその共犯者だと主張した。その話と実際のトリックを組み合わせて本を書こう。

「イルイの仮説？ 俺はそんなもの聞いてないぞ」と英知。

そういえば、こいつはイルイが話しているときその場にいなかったな。

「なあ、イルイ英知にもあの話聞かせてやれよ」

「うん、いいよ。えーっとね、この騒動の始まりは一年前に……」

2 - 1 : ぬるいソーダ & 1 t ; 前編 & g t ;

四月二十七日、この日はわれらがすいどう会にとって特別な日だ。ちょうど一年前、わたし、つまり永久武が大学に入りたてのころだ。わたしは推理小説に傾倒しており、できることなら、わたしは、推理小説がサークル内で確固たる地位を築いているところに入部しようと思っていた。しかし、不幸なことにそんなサークルは存在しなかった。

まず、わたしが訪れたのが、文学部だった。そこにいた人たちとわたしの嗜好は合わなかった。彼らが好んで読む小説は、夏目漱石、石川啄木、ドストエフスキー、トルストイなどの純文学作品がほとんどの割合を占めていた。さらには、古典やら、俳句やら、エッセイにまで手を出していた。ちなみにわたしはそのどれにも興味がな^い。わたしがサークルを見学していたときに、当時の文学部の部長さんがわたしに、『好きな小説家は？』と訊いてきた。わたしは迷わず『D・M・デイヴァイン』と答えたが、相手はぽかんとして、無反応だった。それでわたしはデイヴァインのことについてあれこれ説明すると、部長さんは『ああ……』という感じであいまいにな^ずいただけだった。わたしはここではやっていけないと悟った。

次にわたしが訪問したのが、ノベルス同好会というサークルだった。ここは大はずれだったな。何せ、このメンバーは全員、ライトノベルしか読まない奴らだったのだ。そして、彼らが金田一耕助^{きんだいちこうすけ}を知らないと言ったときの衝撃は、わたしの脊髄^{せきすい}を硬直させたものだ。あまりのことに、わたしは『犬神家の一族』、『八つ墓村』などどキーワードを飛ばしたら、『ああ！ はい、はい』という、作品名だけは知^きっていることが伝わる返事が返ってきた。ちなみに、彼らは金田一^{きんだいち}のことは知^しっていた。

ほかに小説が関係していそうなサークルは存在しなかった。普通の人間ならここで挫折するだろう。しかし、わたしは無限の行動力

の持ち主なのだ。なければ…… つくる！ 大学公認のサークルとして認められるには、メンバーを三人以上集めて、書類を書き、大学の生活支援課に提出する必要があった。

わたしはまず高校からの友人である、鳥井瑠依（通称イルイ）、ながはまえいち長浜英知、とうとうひろみち藤堂広道に連絡を入れた。藤堂はすでに柔道部への入部を希望していた。わたしが事情を話して、名だけの存在でいい、つまり幽霊部員でいいからといって、書類に名前を記入することを促した。しかし、藤堂は『そんなやり方は好かん』といってつぶねた。まったく、正々堂々をモットーとするあいつらしい返事だ。

だが、運はわたしに味方していた。イルイはまだどのサークルに入部しようか迷っていたし、英知はおもしろいサークルがない、といってフリーのままでいるつもりでいたのだ。わたしの誘いに二人は乗った。これで公認サークルとして必要なメンバー三人がそろったわけだ。わたしは、書類に二人の名前を書いてもらい、生活支援課へと舞い込んだ。こうして、《推理小説同好会》、通称《すいどう会》が誕生したのだ。

その日が四月二十七日、つまり明日だ。明日になると、すいどう会は創立一周年を迎える。

「というわけで、明日は創立一周年記念パーティーをしましょう、ぱちぱちぱち」イルイは一人で盛り上がり、拍手のモーションをしていた。サークル室には、彼女の口でいつている『拍手の擬音』だけが響いた。

今日は四月二十六日、明日は二十七日。明日が、すいどう会が創立されて、ちょうど一年になる日だ。イルイは前日になって、その創立一周年を記念したパーティーをやらうと提案してきた。

「別にやる必要ないよ」わたしは彼女の提案を一蹴した。いっしょく

イルイは信じられないという目でわたしを見た。まったく、女というのはなぜそんなに記念日にこだわるのだろうか？ あと、ことあることに記念日を作っていくのはどうということだ？ 初めて出会

った日、付き合い始めた日、初めてキスをした日、初めて×××した日、まったくあげていけばきりが無い。ああ、そういえば、結婚記念日を忘れた旦那さんには、次の日の料理に毒が盛られると聞いたことがある。あと、奥さんの誕生日を忘れた旦那さんは包丁で刺されるという噂を聞いたことがあるな。

消極的なわたしに対して、英知は違った。

「いいんじゃないか。創立一周年という日は明日しかないんだし」
イルイは感激して、英知に微笑んだ。

「だよ、だよ」

そして、わたしのほうへ向き直り勝ち誇った顔でいった。

「さあ、これで二対一よ」

「わかったよ。やるよ。部員の意見に耳を傾けるのも会長の仕事だ」
やれやれだ。「ところでパーティーといっても、何をするんだ？」

イルイは指をおりながら説明をしてみた。

「まずは、その日の講義が終わったらサークル室に集まってお菓子とジュースでささやかなお祝いをします」人に説明をするとき、イルイはなぜか、ですます口調になる。「それからみんなで一緒に晩ごはんを食べにいきます。以上」

「それだけかよ」わたしは思わずつつこんだ。

「だって次の日も講義があるし、あんまり遅くまで騒げないよ」

「まあ、それもそうだがな」まあ逆に拘束される時間が減っていいか。「わたしはかまわないよ。その案で」

「おれもそれでいい」と英知。

イルイはいかにも満足そうにうなずいた。

「それじゃあ決定ね」

こうしてすいどう会創立一周年記念パーティーが催されることになった。

その日の講義が終わり、わたしはサークル室へと向かった。すいどう会のサークル室は、ほかのサークルと同じようにモルタルの壁

にコンクリートの床できており、西側に大きな窓が一つ取り付けられていた。コンクリートの寒々しさを薄めるために、床の中央には汚れた赤色の絨毯（拾い物^{じゅたん}）が敷かれており、絨毯の上には、三脚の背もたれつきの木製椅子と木製の丸テーブル（部費で購入）が置かれていた。部屋の奥側の壁には、わたしの胸までの高さの本棚が二つ仲良く並んで置かれていた。中身は四分の一も埋まっていない。中に入っている本は部費や、みんなで出し合った資金で購入した推理小説なのだが、この数の少なさが、サークルの歴史の浅さを物語っていた。各サークル室にはコンセントが取りつけられているのだが、うちにはそれに指すためのプラグを有する道具が何一つない。ほかのサークル室には電気ポットや扇風機、さらにはパソコンさえも持っているサークルがあるというのに。まあ、愚痴をいってもしかない。

サークル室にはイルイと英知がすでに来ていた。

「あれ、パーティーの準備は？」

「もうできていると思ったの？　タケ君だけに楽をさせないよ。これからみんなでやるのよ」

「わかったよ。それで何をするんだ？」

「みんなで生協に行ってお菓子とジュースを買うのよ。ところで、お菓子とジュースで何かリクエストはある？」

「瀬戸内ソーダ^{せとうち}」英知は間髪いれずに答えた。

「わたしも、飲みものは瀬戸内ソーダがいい」

「じゃあ、わたしも瀬戸内ソーダにしようかな。でも、瀬戸内ソーダは生協には売ってなかったよ。自動販売機でしか買えなかったはずだよ」イルイは過去の記憶をたどりながらいった。

わたしも、生協の飲料水が置いてある棚を思い返した。確かに瀬戸内ソーダは生協には置いてなかった。わたしはいつも学内の自動販売機で買っていた。

「じゃあ、わたしが学校の自動販売機で買ってくるよ。二人は生協でお菓子を買っておいてくれ」わたしはソーダ購入を引き受けた。

サークル室に鍵をかけ、わたしたちは出かけた。坂を上り、理学部と教育学部の建物の間を通り、生協に向かった。イルイと英知は生協の中へと消え、わたしは生協の建物の前を通り過ぎ、十メートルほど先にある自動販売機を目指した。

わたしは自動販売機と向かい合った。三人の需要を満たす商品は、自販機最下段、右から三列目に陳列されていた。そいつの外見は細長い円柱のシルバーの缶で、その下半分に三本の青の線が一周して描かれている。そして、真正面には、妙にかくかくした青い字で、瀬戸内ソーダと書かれていた。

わたしは千円札を財布から取り出し、自販機に渡した。そして、何も考えず、瀬戸内ソーダのボタンを三回押した。当然のごとく、取り出し口には三本の瀬戸内ソーダが転がっていた。

わたしは取り出し口に手を伸ばし、すべての缶を取り出した。缶はひんやりと冷たかった。わたしはジャケットの右ポケットに缶を一本しまい、つり銭を取り、残り二本の缶の端を左右の手でつまむように持ち、その場を離れた。

生協の前で待つこと二分、イルイと英知が白いビニール袋をぶら下げて出ていた。購入したものはポテトチップスふた袋だった。

わたしたちはサークル室に戻った。英知は椅子に座り、テーブルの上にポテトチップスを置いた。イルイも椅子に腰を下ろし、一息ついた。わたしは右手に持っていた缶をイルイの目の前に置き、左手に持っていた缶を英知の目の前に置いた。そして、ポケットから冷たい最後の一缶を取り出し、席についた。

イルイはポテトチップスの袋に手を伸ばし、英知は自分の瀬戸内ソーダを握った。

パーティーが始まろうとしたとき、わたしは気づいた。

「皿がない」

「え？」イルイは戸惑った。

「ポテトチップスを出す皿がない」わたしは真剣な表情でいった。

「ポテトチップスは、中身を皿に移したほうが、みんなで食べやす

いだろ。三人で袋の中に手を突っ込んで、食べるなんてありえないだろ。紙皿でいい。用意するべきだ」

「でも生協には紙皿なんて売ってないよ」イルイは困った顔でいった。

英知は瀬戸内ソーダの缶を握ったまま、無感動な目でわたしを見ていた。

わたしには考えがあった。「心配するな。わたしに考えがある」わたしは立ち上がった。「ちょっとついて来いよ」

そういつてわたしはサークル室を出た。イルイ、それから、英知がわたしの後に続いて、サークル室から出てきた。

うちの大学はサークル棟が三つある。三つとも、造りはまったく同じで、長方形の二階建ての建物だ。それが三つ、同じ方向を向いて、等間隔で建てられている。学部の建物に一番近い棟がA棟、あとは順番にB棟、C棟になっている。すいどう会のサークル室はA棟にあった。

わたしたちはA棟から出て、B棟の横を通り過ぎ、C棟に入った。それから二階に上り、とあるサークル室のドアをノックした。

「どうぞ」中からサイのようにのんびりとした声が聞こえた。あいつの声だ。

わたしはドアを開け、内部を見渡した。

そのサークル室はすいどう会と違い、物があふれていた。奥の壁には大きな棚が二つあり、中には調理器具や、漫画、さらには、プラモデルまで置かれていた。位置口付近には大きな木箱がありその中には、バットにグラブ、そしてボール、要するに野球道具が詰め込まれていた。入り口側の壁にはサークルの看板が、物干し竿と一緒に立てかけられていた。部屋の中央には細長の四角いテーブルが一つあり、その周りには六脚のパイプ椅子が乱雑に置かれていた。

その椅子には四人の人物が座っていたが、用があるのは、その中の一人、菊池聖也^{きくちせいや}だった。菊池はわたしと同じ学科の学生で、わたしとは親しい仲だ。彼は男にしては凹凸^{おうちゅう}のないきれいな顔をしてい

る。肌は白く、髪は元氣よく頭の外側に広がっていた。目は絵に描かれた狐の目のように細い。彼はチェス部に所属していた。

つまり、わたしたちが訪れたところはチェス部のサークル室だ。

「菊池、ちょっといいか」

「どうした」菊池は座ったままで、こちらを向いて返事をした。

「ここに紙皿、できれば平皿、置いてないか？」

「あるよ」菊池は即答した。

さすがだ。わたしは彼の返答に満足した。チェス部は二週間に一度の頻度で、サークル室で（本当は禁止されているが）飲み会を行っている。だから、紙コップや紙皿といった備品が常にサークル室に置かれているのだ。

「悪いが、二つほどもらえないか？」

「ああ、それくらいならいいよ」

そういつて菊池は奥の棚から、紙の平皿を二枚取り出し、わたしにくれた。

「ありがとう」わたしは笑顔でいった。

「いいって、それくらい」

わたしは礼をいって、その場を辞去した。これで目的の品物が手に入った。

「ほら、皿を手に入れたぞ」両方の手にある皿を、イルイと英知の前に掲げた。

わたしたちは、サークル室に戻り、皿をテーブルの上に置き、ポテトチップスの中身を二つの皿に移した。これでパーティーの準備は整った。

わたしは席につき、自分の瀬戸内ソーダに手を伸ばし、缶をつかんだ。

「ん？」わたしが違和感を感じたのは、そのときだった。

わたしたちが、紙皿をもらいに行く前、ほんの五分ほど前には、キンキンに冷えていたソーダが、ぬるくなっていたのだ！

2 - 2 : ぬるいソーダ&It;後編>

ありえないことだった。部屋を出る前に缶を触ったが、ソーダは確かに冷たかった。それが紙皿をもらいに行った、わずか五分程度の時間でここまでぬるくなるはずがない。真夏の日でもこんなことは起こらないだろう。ましてや今は四月の下旬、夏よりずっと気温が低いからおさらだ。これはわたしの理解を超えた出来事だ。

「どうしたことだ？ ソーダがぬるくなっているぞ」わたしは困惑したまま二人にいった。

「え？ そんなことないよ」イルイは驚いた表情で答えた。

この答えにわたしはますますわけがわからなくなった。

「そんな馬鹿な。ちよつと貸してみろ」そういつて、わたしはイルイの手からソーダをもぎ取った。

その瞬間、わたしは自分の手を信じられなくなった。缶が冷たいのだ！ わたしはイルイのソーダをテーブルに置いて、英知のソーダをつかんだ。その缶から伝わる感覚、それはまさに『冷たさ』だった。

「どういうことだ？ わたしのソーダだけがぬるくなっている」わたしはテーブルに英知のソーダを置いて、驚嘆した。

「そんなわけないじゃん」イルイは笑いながらいった。

「なら持ってみろよ」わたしはむつとして、自分のソーダを差し出した。

イルイは笑って、ソーダを手にしたが、その顔にはすぐに驚きの表情が浮かんだ。そして、右手にわたしのソーダ、左手に自分のソーダを持って、その違いを確かめた。

「本当だ！ タケ君のソーダがぬるくなってる」

イルイもわたし同様に驚きの声を発した。

「わかったか。わたしのソーダだけが、ぬるくなっているということが」

「エイ君も確かめてみてよ」イルイはそういつて、英知にわたしのソーダを差し出した。

英知はそれを受け取った。しかし、わたしとイルイのようなリアクションはとらなかった。

「たしかに、ぬるくなっているな」と冷静にいっただけだった。

英知はわたしにソーダを返した。

「いったい、これはどういうことなんだ？ どうしてわたしのソーダだけがぬるくなっているんだ？」わたしは本気で考え込んだ。

「これは」イルイが、なんともいえない表情でいった。「不可能犯罪ならぬ、不可能現象だね」

「不可能現象か」わたしはゆっくりといった。「なるほど、実に適切な表現だ。この状況は確かに『起こり得ない』のだから」

わたしの中で緊張感が広がった。先日、わたしたちが関わりを持つことになった。『光る玉騒動』よりも数倍奇妙な出来事だ。同じ状況下に置かれた三本のソーダの缶。それなのに、そのうちの一本だけが急激にぬるくなるなんて！

「どうしてタケ君のソーダだけが、ぬるくなったのかな？」とイルイ。

「そう、それが一番の問題だ。だが、その前にもう一つ問題がある。この時期に、わずか五分でソーダがぬるくなること自体ありえないんだよ」

「うーん、そうだね。真夏で、サークル室が蒸し風呂みたいに暑くても、五分でそこまでのぬるさにはならないよね」イルイはわたしのソーダを指差しながらいった。

「何から何までさっぱりわからない」わたしはつぶやいた。「二人はどうだ？ どうしてこんなことになったのか、考えられることはあるか？」わたしはイルイと英知に問いかけた。

「誰かがすり替えた、とか」イルイが自信なさげにいった。

「わたしたちがサークル室から出たとき、ちゃんとドアに鍵をかけておいた。それに」といつて、わたしは窓を指差した。「窓にもち

「やんと鍵がかかっている」

「そうだよ」イルイは苦笑いした。

「それに万が一、犯人がこのサークル室の合鍵を持っていて、すり替えが行われたとしても、何のためにそんなことをするんだ？」

「うーん、タケ君に日頃の恨みを抱いている人が、仕返しにやったとか……」

わたしは首を振った。

「どこかの誰かさんは、わざわざ、わたしたちが留守の間にサークル室に忍び込んで、わたしの瀬戸内ソーダを、あらかじめ用意しておいたぬるい瀬戸内ソーダと取り替えて、こっそり出て行ったというのか？ そんなくだらないことする奴なんて、いないだろ」

「だよー」イルイは笑うしかなかった。

それに彼女の推理では、五つの大きな穴がある。

一、今日のパーティーで瀬戸内ソーダを飲むことに決めたのは、パーティーの準備をするときだった。犯人はどうやってそのことを知ったのか？

二、犯人はどうやってぬるい瀬戸内ソーダを事前に用意したのか？

三、わたしたちがサークル室を抜け出したのは、偶然だった。

四、犯人は、テーブルの上にある三つの瀬戸内ソーダから、どうやって、わたしの瀬戸内ソーダを見分けたのか？

五、そもそも犯人はどうやって、サークル室の合鍵を用意したのか？

サークル室は再び静かになった。

窓からは西日が部屋の中に差し込んでいる。窓にはカーテンがついていなかった。部費を使って購入しようとしたが、ほかの物を買って揃えているうちに、使える資金がほとんどなくなってしまったのだ。だから今のところ、カーテンは買えないままだ。

日の光……窓から差し込む太陽の光が、屈折して、わたしの缶に集中したとは考えられないだろうか。太陽光は一ヶ所に集まれば、熱エネルギーが発生するはずだ。その熱がわたしのソーダの缶を温

めた可能性はないだろうか。

わたしはサークル室、主に窓際を見渡した。鏡、ガラス瓶、ペットボトル、光を屈せつさせるものは何一つなかった。あるのは壁にはめ込まれた窓だけだ。これでは光が一ヶ所に集まることはないし、熱エネルギーが生まれることもない。

だめだ。この考えは違う。わたしは、そう自分に言い聞かせた。すいどう会一周年記念パーティーのはずが、とんだ展開になったな。

そのとき、イルイが両手で、思い切りテーブルをたたき、立ち上がった。

「わかったあ！」その声には勝利の確信が満ち溢れていた。

「本当か？」わたしは期待してイルイを見た。

「これは複雑にみえて、非常に単純な事件だったのよ」

「事件じゃないし」

「とにかく聞いて」イルイはわたしの茶々を制した。「答えはこうよ」「ここでイルイは言葉を区切り、わたしと英知を見た。「タケ君のソーダは、最初からぬるかったのよ」

サークル室の中は静まり返った。

「はい？」これがイルイの解答を聞いたあとの、わたしの第一声だった。

「だからね、自動販売機から出てきた時点で、タケ君のソーダはぬるかったのよ」

何をいつているのだ、こいつは？

わたしの心中を察することなくイルイは続けて話し出した。

「タケ君は、業者の人が中身の飲み物を補充したばかりの自動販売機で、買い物をしたのです。業者の人が中身を補充する前には、瀬戸内ソーダが二つ残っていた。その二つのソーダはずっと前から自動販売機の中に入っていたので、十分冷えていたのです。ところが、業者の人が補充したばかりの瀬戸内ソーダは、輸送トラックで運ばれていたから、常温で保存されていたの。これだと、中身を補充さ

れたばかりの自動販売機には、キンキンに冷えた瀬戸内ソーダ二つ、入れられたばかりのぬるい瀬戸内ソーダがたくさん入っていることになるよね。その状態で、瀬戸内ソーダを三つ買っと、冷たいソーダが二本、ぬるいソーダが一本出てくるというわけです。それで、タケ君は冷たい二本をわたしとエイ君に渡して、ぬるいソーダを自分で選んだわけです。

どう、わたしの推理。完璧でしょ」

「うん、完璧な間違いが一ヶ所あるね」わたしは、最後までがまんして聞いてからいった。

「ええ？ どこよ」イルイは不機嫌そうにいった。

「わたしは自動販売機から三本のソーダを取り出すとき、すべてのソーダの缶に触った。どのソーダも確実に冷たかったよ。それからこのサークル室に帰ってきたときに、ポケットから自分のソーダを取り出したけど、確かに冷たかった。これは保証するよ」

わたしは、イルイにとっては衝撃の事実を突きつけた。

しかし、イルイは折れなかった。

「うーん、タケ君が勘違いをしてたんじゃないのかな？」

「おい、おい、わたしが嘘をついているというのか？」

「嘘じゃないよ。勘違いっていったんだよ。瀬戸内ソーダを買っていたときも、サークル室に戻ってきたときも、タケ君がぼーっとして、ソーダの温度に気がつかなかった。それで、紙皿を取りに行つて、帰ってきたときに、自分のソーダを触つて、ぬるいことに気がついた、ということじゃないのかな」

「さすがにそれはないだろ。不注意すぎるわ」わたしは語気を強めていった。「断言する。わたしのソーダは、サークル室を留守にする前までは、冷たかった」

「じゃあ、証拠だせ」イルイが不敵な笑みを浮かべながらいった。

「ないわ！」

わたしは英知の方を見た。彼からも、何か言ってもらおうと思つた。しかし、彼を見たとなん、その気は消えた。

英知は両肘を丸テーブルの上に乗せ、手を組み、額を組んだままの両手に押し付けていた。彼は何かを必死に考えていた。わたしは思った。きっと、この不可能現象の解答を導き出そうとしているのだと。

しかし、それは違った。よく見ると、彼の口元は笑みを浮かべていた。さらに注意深く彼を観察すると、彼の両肩が微妙に震えていた。

英知は、笑いをこらえていた。

「おい、ちよつと」わたしは英知に声をかけた。「英知、何がそんなにおかしいんだ？」

英知は、両手を解いて、にやけ面を見せた。

「答えが目の前にあるというのに、二人とも実に検討はずれな議論をしているなあ、と思つてね」

答えが目の前にある？ わたしは英知の言葉が信じられなかった。

「どういうことだ？」わたしは真剣な口調で訊ねた。

「そうよ。エイ君は、タケ君のソーダだけが、どうしてぬるくなつたのか、わかっているというの？」イルイもわたしと同じ調子で訊ねた。

「そうだよ。答えは一度、出ていたよ」英知は涼しげな面持ちでいった。「瑠依ちゃんの最初の解答さ」

「すり替え説？ あんな穴だらけの推理が真相だというのか？」わたしは、英知が冗談をいつているのだと思つた。

「じゃあ、いったい誰がわたしのソーダをすり替えたのだ？」

「俺」英知は、なんの変化もつけずに、普段どおりの口調でいった。

「はい？」わたしとイルイは、声をそろえていった。

「俺がすり替えた」英知はもう一度、さつきと同じ口調でいった。わたしは混乱しきつていた。うまく頭が回らない。しかし、何か言わなくてはならない。わたしは必死に頭を動かして、ようやく言葉を搾り出した。

「どうして、そんなことを？」

「お前から渡されたソーダがぬるかったんだよ。ソーダの買出しを任された、責任ある人物が他人にぬるいソーダを渡したんだ。それで俺は、『これはけしからんな』と思ったわけだよ。だから、俺のソーダとお前のソーダを入れ替えたんだ」

わたしとイルイは、英知の話を聞いていたが、理解できない部分があった。

「ちよつと待てよ。さっきも言ったけど、わたしは自販機から、ソーダを取り出したとき、全部のソーダの缶に触った。そのとき、すべてのソーダは冷たかったぞ」

「そのときだけな」英知はぴしりといった。「お前が買った三本のソーダのうち、一本は、やはり瑠依ちゃんの言っていた通り、業者の人が補充したばかりのものだったのだろう。ただし、補充したてといつても、二分か、三分か、四分、詳しくはわからないが、わずかな時間が経っていたはずだ。それくらいの時間ならアルミ製の容器だけが冷えて、中身のソーダは冷えなかったはずだ。」

お前はそんな状態のソーダ缶を触ったんだよ。確かに冷たかっただろうな。自販機の取り出し口から出したときは。だけど、容器の中身がぬるいと、外に出したときから、容器の温度はだんだんと、気温に近づいていくんだ。しかも、アルミ製だから、時間もそれほどかからないよ。お前は冷たさを嫌って、容器の上の端っこの部分を、つまむようにして持っていたよな。その持ち方だと、容器と手が接触している面積がかなり少なくなり、容器の温度変化がわからなかったはずだ。

そして、お前は容器の温度がどんどん上がっていることにも気がつかず、サークル室に戻り、だいぶぬるくなった容器を、俺に渡したわけだ。それから紙皿をもらいにサークル室を留守にしただろ、その間に容器から完全に冷気が失われたわけだ」

そうだったのか。イルイの考えはほとんど正しかったわけだ。違っていたのは、補充されたてのソーダの容器の冷え具合を考えていなかったのと、問題のソーダが、最初から最後までわたしの分だと

考えていたことだ。

これでほとんどのことは理解できた。わたしは、残る一つの疑問を英知にぶつけた。

「いつすり替えたんだ？」

「紙皿をもらうため、二人がサークル室から出て行こうとした時さ。あのとき、俺は二人の後ろにいて、一番最後にサークル室から出た。二人がドアの方を向いて、俺に背を向けたところで、こっそりと、俺のソーダとお前のソーダを交換した」

「なんだよお。そんな単純なことだったのかあ」わたしは、真相を知って、がっかりした。こんなことに気がつかないとは、われながら情けない。

「けど、ソーダがぬるいなら、最初にいつてくれればよかったのに」わたしは英知をなじった。

「ちよつとした、いたずらだよ」英知は笑っていった。「それを、二人が不可能現象だとか言い出して、見ていて面白くなってきてね。少し黙っておこうと思ったんだよ」

「なんだか、エイ君に振り回された感じがするね」イルイが素直な感想を漏らした。

「まったく」わたしは同意した。

「はは、ごめん、ごめん。今度、二人には冷たく冷えた瀬戸内ソーダをおごるよ」

「約束だよ」イルイはむうつ、とうなった。

「わかったよ。さて、それよりも目の前のおやつをいただこう。ソーダも早く飲まないと、武のやつみたいにぬるくなるぞ」

そういつて、英知はプルタブを起こし、缶を開け、ポテトチップスをつまみ始めた。イルイは、ポテトチップスをぱりぱりと食べた。わたしも自分のソーダを、納得のいかない顔で開け、口に含んだ。あまりの甘ったるさに、わたしは顔をしかめた。

3 - 1 ・ 舞いこんだ脅迫状

いつものサークル室には、わたしと、イルイこと鳥井瑠依とじいるい、そして、長浜英知ながはまえいちの三人がいた。わたしは推理小説をポケットにおさめたまま、一人で思いにふけていた。

今日は四月三十日、しかも金曜日。明日から胸おどる五月上旬に突入だ。胸おどる理由は、もちろんゴールデンウィークがあるからだ。

五月一日、土曜日、休日。五月二日、日曜日、休日。五月三日、憲法記念日、祝日、五月四日、国民の休日、祝日。五月五日、こどもの日、祝日。なんと五連休！ 夢のような時間だ。

わたしは、ゴールデンウィークの予定など、特にないのだが、毎日をだらだら過ごしてやろうと思っている。

例えば、禁断の四度寝だ。二度寝だけでも気持ちいいのに、さらにその倍、寝なおすのだ。最高の快楽を得て、昼過ぎに起きる。まさに犯罪的自堕落といってもいい。普段の二連休では、時間を損したと思うが、今回は五連休なのだ。一日くらいそんな日があってもいいじゃないか。

あとは、一日中、読書をするのもいいな。外界から隔離され空間つまり、アパートの部屋に閉じこもったまま、活字の海に身を沈めるのだ。

何を讀もうかと考えているときに、わたしの思考の鎖はイルイによって断ち切られた。

「今年は新入生、入部しなかったね」

まったく、イルイは触れてほしくないことを言ってくれるものだ。うちの大学では、ちゃんとサークル紹介を行っている。その流れはこうだ。各サークルは自分のサークルを紹介する書類を書き、二月末日までに生活支援課に提出する。その提出された書類は、サークル紹介用パンフレットに載せられ、新入生たちの目に入る。新入

生たちはその情報を元に、興味を覚えたサークルを訪問するというわけだ。

ちなみに、そのサークル紹介の書類の提出は任意だ。書いて出せば、多くの新入生にサークルの存在を認知されるが、提出しなければ、新入生の間で知名度が著しく低くなる。だから、どのサークルも新入部員を獲得するために、普通は書類を提出するのだ。

もちろん、すいどう会こと、推理小説同好会もサークル紹介の書類を提出した。その紹介用の書類は、みんなで煽り文句やイラストを三日間で考え、丁寧に清書した。しかし、努力と結果が必ずしも比例するとは限らない。驚くことなかれ。なんと、四月中にすいどう会を見学しに来た一年生はゼロだ。きっと、本好きな連中は、文学部かノベルス同好会に流れていったのだろう。

文句を言っても仕方がないが、四月が終わろうとしているのに、新入部員がいないというのも寂しいものだ。現実を見てみると、ゴールデンウィーク目前の楽しい気持ち が薄れていった。イルイめ、余計なことをいつてくれたな。

「まだ、今年の新入部員がゼロと決まったわけじゃない。五月になつてから入部する人が、出てくるかもしれないじゃないか」

わたしは強がりをついた。入部の受付期間が四期限定ということはない。入部希望者は一年を通じて、好きなときに、サークルに入部することができる。だから、四月に新入部員の数 がゼロだからといって、その年の勧誘が失敗したことにはならない。

しかし、五月を迎えると、入部届けを提出する者が著しく減少するの、また事実だ。おまけに、うちのサークルは今のところ、見学者がゼロという絶望的の不安要素もある。

いきなりサークル室を訪問して、入部を希望します、と宣言する人が現れるのは、名前を聞いただけで活動内容がわかるサークルだとか、人気のあるメジャーなサークルだ。その他のサークルの新入部員は、まずサークルの見学に来て、活動内容を知ってから、後日改めて入部届けを出しに来るといふ流れを踏んで、入部するのだ。

四月末のここまでで、見学者ゼロの我がサークルに、入部希望者がこれから現れる可能性は限りなく低い。

「いまさら入部希望者なんてこないよ」イルイは残酷な事実を述べた。「今は新入部員のことはおいといて、そろそろ小説を書き始めようよ」

「何いつてるんだ。文化祭までまだまだ時間があるんだぞ」

十日ほど前にも同じやり取りがあった気がするなあ。しかし、今は立ち位置が逆転していた。あのときは、わたしが執筆の提案をして、イルイと英知がけだるげに聞いていた。今回は、イルイが執筆の催促をして、わたしが面倒そうに返事をしている。

しかし、わたしの心情をわかってもらいたい。ほんの十日ほど前には小説を書くために、どうすればいいのか四苦八苦していた。ところが、『光る玉騒動』のおかげで、小説に使えるようなネタが一週間以内で手に入った。物事が、予想より遙かにうまく進んだのだ。気持ちも緩むというものだろう。

「執筆は明日、いや、ゴールデンウィーク明けから始めればいいだろう」

「だめ人間の発言だな。ゴールデンウィークは時間が有り余っているんだから、そのときに、やったほうがいいぞ」と英知。

「遅かれ早かれ、やらなきゃいけないんだから、早めにやったほうがいいよ」イルイも優等生風の発言をした。

わたしは仁王立ちをしていった。

「会長権限！」私は高らかと宣言した。「原稿作成はゴールデンウィーク明けから始める。休めるときに、休み、英気を養うべし」

英知はあくびを一つし、あきたといわんばかりの眼差しで、わたしを見た。

「まあ、お前がそこまで言うなら、反対はしない」英知はちょっと間をおいた。「けどな、『光る玉騒動』は短編ものになりそうだな。文化祭で発表するページ数のことを考えると、同じような長さの短編を三、四作ぐらい書いておいたほうがいいと思う」

わたしは椅子に座りなおして、しばらく黙って考えた。確かに短編一作だけだと寂しいな。『光る玉騒動』はトリックは実際にあつたことをそのまま使っているが、全体のストーリーはわけあって、イルイが提案した薄っぺらなストーリーに変えている。ページ数もペラペラで、内容もペラペラなら、我らすいどう会が低く見られることは必至。学内の評判も上がらないということだ。評判が低いまままで新入生の獲得ができるのか、いや、できない。

「わかった」わたしは落ち着いていった。「一作目を仕上げて、二作目に取り掛かろう」そしてこう続けた。「ゴールドンウィーク明けから」

二人の冷めた視線が私に突き刺さる。

「会長権限だ」わたしはもう一度宣言した。

こんな感じでサークル室の空気が白けてきたところで、いきなりドアが開け放たれ、あいつがやってきた。

「ちわーっす」

わたしはそいつに背中を向けていたが、ドアが開いた瞬間に誰だかわかった。そいつが部屋に足を踏み入れると、部屋の空気が腐っていくのが感じられた。わたしは嫌悪の目つきでそいつを見た。

この世の汚点、世界の不名誉、人類の恥部……そう、平尾新^{ひらおしんいち}一だ！
わたしはゆっくりと振り向いて奴をみた。

「何しにきた」わたしは敵意満々の声でいった。

平尾はそんなことにも気づかずに歩を進めて、わたしたちのところにまできた。

「困ったことが起きたんだよ」

「そうか、大変だな。さあ帰れ」

「なんでだよ！」平尾は不愉快な声でわめいた。

「どうせまた、くだらんことで困っているんだろ？」

「このぼくのアキレス腱にかけて誓う」

「本当だな。くだらなかつたらアキレス腱をぶった切るぞ」

平尾は口元を歪めたが、何があつたのかを話し始めた。

「ぼくが所属している演劇部に、脅迫状が届いたんだ」

「きよ、脅迫状？」これは、わたしの予想の遙か上をいく、深刻な出来事ではないか。

「それはいつの話だい？」英知がすかさず口を挟んだ。

「今日だよ。昼休みに、同じ部の高岡勇氣たかおかゆうきさんが見つけた。ドアの隙間からサークル室に入れられたんだろうな。ドアを開けたらすぐ下に茶封筒があつた、といっているんだ」

「脅迫状にはなんて書いてあつたんだ？」英知の口調は静かだった。
「ぼくたちはね、九月に桃花とうかホールで公演をやる予定なんだ。脅迫状には、その公演を中止しろと書いてあるんだよ。信じられないだろ。まるで漫画の世界だ」

公演の中止、それも大学の演劇部の公演の中止を要求？ いったいどういうことだ？ そんなことのために、わざわざ脅迫状を出した奴がいるというのか？

わたしが最初に思い浮かんだ考えはこうだ。

「だれかのいたずらだよ」これ以外に考えられるか。

「部長もそういつてたけど、脅迫状のせいで部の雰囲気がおかしくなっているんだよ」

「たかが、いたずらまがいの脅迫状がきただけで、部の雰囲気がおかしくなるわけないだろ。お前の思い過ごしだ」

平尾は珍しく真剣な表情をしていた。

「じつはな……」平尾は言いにくそうにしていた。「九月の公演は毎年やっているんだけど、年によって会場が違うんだよ。それで、今年の公演会場が決まったのは二日前なんだよ」

「だからなんだよ？」

「脅迫状には、今年の公演会場がちゃんと書かれていたんだぞ。公演会場のことはサークルメンバーには伝えたけど、まだ宣伝活動はしていないんだよ。だからサークルメンバーの誰かが、脅迫状を書いたんじゃないかって、そんな憶測が広まっているんだ」

「なるほど、外部にほとんど伝わっていない情報が、脅迫状に書か

れていたということか。でもな、サークルの誰かが話したという可能性があるぞ。電話とかメールとか使えば、いつでもどこでも情報を垂れ流せる」

「わざわざ言うか？」

「可能性はゼロではない」わたしはきっぱりといった。

英知がすかさず口を挟む。

「確かにその可能性はゼロではないけど、5%にも満たないだろ。公演会場を急いで誰かに教える必要も考えられないし、これはやはり演劇部のメンバーの誰かが脅迫状を書いたと考えるのが遥かに自然だな」

平尾は英知の助けに感激したようだ。

「話がわかるね、あんた」

「しかし、何で君は、脅迫状が届いたあと、うちに来たんだ？」と英知。

「率直に言うと、誰が脅迫状を書いたのかを調べてほしい」

「はあ？　なんでわたしたちがそんなことを」わたしはわけがわからずに、抗議した。

「推理小説同好会だから、簡単に犯人を推理してくれるだろ」

「お前、この前うちに来たときと同じこといつてるな」

「他に頼れる人がいないんだ。頼むよ。このまま脅迫状のことをほおっておいたら、サークル内に不協和音が広まって、劇の練習どころじゃあなくなってしまう」

「自分たちで解決しろ」

平尾はわたしの言葉を聞くと、その場にあぐらをかいて座り込んだ。

「首を縦に振ってくれるまで動かんぞ！　お腹が痛くなって、トイレに行きたくなっても、ここで脱糞してやる」

うぜえ。このまま座っている奴の顔に、ヴァレリー・ディミトロフばりのローキックを打ち込んでやろうかと考えた。

わたしは殺気を抱いて立ち上がったが、イルイがわたしのジャケ

ツトの袖を引っ張った。

「なんだよ？」わたしは怪訝な顔でイルイを見た。

イルイは笑顔で手招きをしている。わたしは顔をイルイに近づけた。

「小説のネタになるかもしれないよ」

わたしは首を振った。

「これは、冗談にしては度の越えたいたずらだよ。小説に使えそうな話じゃない」

「それはわからないよ。犯人には何か目的があつたのかもしれないし」

わたしはため息をついた。こうなつたイルイを納得させるのは骨が折れる。

「わかつたよ。そこまでいうなら、演劇部にいつて問題の脅迫状を見てみよう。それから一週間様子をみる。また何か起こつたら、犯人は本気で公演を中止させる気だろう。ただ一週間様子をみて何もなかったら、脅迫状はただのいたずらだったということで、わたしたちは、その件について一切関わらない。それでいいだろ」

「うーん、まあ、それでいいよ」イルイは何とか同意してくれた。

「ぼくは犯人を見つけてほしいんだけど……」平尾は不満げにいった。

「ただのいたずらならほっておくのが一番だ。時間が経つにつれて、みんな気にしなくなるよ。変に嗅ぎまわるほうが、余計に空気を悪くする。だから、ほおっておく方がいいんだよ。脅迫状がまた送られてきたら、そのときは、犯人を捜してやるよ」

こうして、わたしたちはこれから演劇部を訪れ、実際の脅迫状を見ることにした。

わたしは、この件は九十九%、しょうもないいたずらだと思つていた。第一目的が不明だ。演劇部の公演を中止にして、誰が何の得をするというのだ。ただの大学サークルを本気で脅迫する人間なんていないだろう。

だが、今回は残りの1%のほう^が正しかった。

3 - 2 ・ 吉川紫帆、登場

わたしたちは、平尾の後について行き、演劇部にたどり着いた。

さすが演劇部というだけあって、サークル室には衣装や小道具が、奥の壁際に沿って並べられていた。部屋の中には八人の部員がいてお互いにおしゃべりをしていた。わたしが見た限りでは、部員たちが不安になっている様子を感じることはなかった。

平尾はサークル室に入ると、元気よくいった。

「へへっ、助っ人を連れてきましたよ」

八対の目がすべてわたしたちに注がれた。

サークルメンバーの中に、犯人がいるかもしれないと言ったのは平尾だ。なのに、その犯人の可能性がある人たちの前で、堂々と助っ人を紹介するとは、アメンボほどの知能も持ち合わせていないのか、こいつは。

「おい、こら」わたしは、平尾にしか聞き取れないような小さい声でいった。「いちいち、わたしたちのことを紹介しなくていい。脅迫状だけ見せてくれ。わたしたちは外で待っている」

「なんだよ。しょうがないなあ」と平尾。

わたしたちはサークル棟から出て、平尾を待った。平尾はすぐに出てきたが、困った顔をしていた。

「どうしたそんな顔をして」とわたしはいった。「借金で首が回らなくなっただか」

「違うし、借金なんてないし」平尾は強くいった。

まったく、ユーモアを理解する心がない奴だ。

「脅迫状なんだけど」平尾はばつが悪そうだった。「部長が、『くだらない』といって、びりびりに破いて捨てちゃったんだ」

「破れた脅迫状は？」

「風と共に去りぬ」

「そうか。それじゃあ、わたしたちも風のように去るか」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」平尾は、はじけんばかりの勢いでわたしたちを制止した。「実物はなくても、勇氣さんがその脅迫状を見ているから、勇氣さんに頼めば、ある程度は脅迫状について説明してくれると思う。今から呼んでくるから、待っててくれ」

「その勇氣つて人はサークル室にいらっしゃるうな。あんまり長く待つことになる、本当に帰るからな」わたしはうんざりしながらいった。

「へへっ、すぐにお連れしやすよ、旦那」

「小芝居はいいから早く行け」わたしはいらいらしながら促した。

高岡勇氣は、しっかりした体格をしているが、目の下にくまが見え、疲れがたまったサラリーマンのような男性だった。

「さっきもサークル室に来てたけど、あんたたちは、どういう方なんだ？」勇氣さんは、まずこう切り出した。

わたしは名乗ろうとしたが、ここでまたじゃまな奴が横から口を挟んできた。

「あっ、紹介がまだでしたね。彼らはみんな、推理小説同好会の人なんです。右から、ぼくの友人のエターナル君……」

わたしは平尾のすねを蹴飛ばした。

「あう！」

こいつがいると、本当に話が進まないな。

「お前は自分の意思でしゃべるな。次に勝手なことを言い出すと、帰るぞ」

最終警告を平尾に突きつけた後、わたしは、あつけにとられている勇氣さんの方へ向き直った。

「さて、失礼しました。わたしは推理小説同好会、会長、永久武と申します。隣の二人は鳥井瑠依と、長浜英知です」

わたしが二人を紹介すると、二人とも自分で挨拶をした。

「鳥井瑠依です」イルイはやわらかな笑顔を見せながらいった。

英知は軽く頭を下げて、名を名乗っただけだった。

「実は、わたしたちは平尾君に頼まれて、やってきたわけですよ」

わたしはここで言いよんだ。「その……脅迫状の問題を解決するために」

『脅迫状』という言葉を聞くと、勇氣さんは顔をしかめて、平尾を見た。

「余計なことをするな。お前のやったことは、悪い噂を広めるようなものだ」

「すいません」平尾は視線を下げて、恐縮していった。

どうやら、平尾以外の演劇部員は、脅迫状のことに触れられてほしくないようだ。まあ、それもそうだ。脅迫状をもらうなんて、未知の経験のはずだ。たださえ神経が逆立つできどこだというのに、そこに部外者がやって来て、いろいろ嗅ぎまわるのはさらに気分を害することなのだろう。

これは自然と解散になる流れだなと、私が期待していると、好奇心の塊が、終焉への流れを断ち切った。

「さっそくなんですが、脅迫状を最初に発見したのは、勇氣さんなんですよね。その脅迫状について教えてほしいことがあるんですけど」イルイが目を輝かせて訊ねた。

おい！ 違うだろ、と私は心の中でつつこみを入れた。さっきまでの話の流れで、どうしてそんな質問ができるんだ？ こいつはさっきまで寝ていたのか？

「え、ええ？」勇氣さんもこれには面食らったようだ。「ぼく個人から言わせてもらえば、脅迫状のことはそっとしておいてほしいんだよ」

「そこを何とかお願いします」イルイは、口の前で両手を合わせて、はかなげな視線を勇氣さんに送った。

このイルイの攻撃は、反則だ。男には効きすぎる。

「そうはいつでもね」勇氣さんはイルイから視線を外した。明らかに困っている。

勇氣さんが折れるのも時間の問題だと思ったとき、サークル棟から一人の女性が現れた。

その女性は演劇部のサークル室にいた人だった。人目を惹く容姿をしているので、わたしは彼女のことをすっかり覚えていた。彼女は背が高く、無駄な脂肪のない、すっきりと細い体つきをしていた。身長はわたしより高いだろう。英知と同じくらいはあるのではないか。ともかく、女性にしてはかなりの長身だった。髪は短髪で、目は、相手を射抜くような鋭い眼力を秘めていた。

「さつきから出入りが激しいと思ったら、こんなところで何しているの？」

なんて美しい声だ、とわたしは思った。ひまわり畑を照らす、夏の日の光のような輝きのある声だ。この人は、人を惹きつけるすべての条件を満たしている。

「紫帆^{しほ}」勇気は助け舟の登場で、ほっとしたようだ。「実はだな。平尾の奴が脅迫状の差出人を見つけるために、部外者を連れてきたんだよ。それで、脅迫状についていろいろ聞かせてほしい、と訊かれているところなんだ」

「へえ、そうなの」彼女はわたしたちを見た。「それであなたたちは何者？」

「推理小説同好会ですよ」

「推理小説同好会は、本だけじゃあ飽き足らず、実際の事件にも首を突っ込むわけ？」

「いえ、違います」一名を除いて。「今回は平尾に、どうしても、と言われてきただけです」

彼女はため息をついた。「話してあげなよ。勇気」

「いいのか？」

「あれは性質^{たち}の悪いいたずらなだけよ。本気の脅迫状じゃないわ。彼らにいつまでここに居られる方が迷惑よ。それに、あちこちに言いふらされるわけじゃないんでしょう」

「はい、守秘義務は守ります」イルイは誇らしく答えた。

「それじゃあ、さっさと話して、さっさとお引取り願って」彼女はそういつて、この場を立ち去った。

「今の人はどなたですか？」わたしは勇氣さんに訊ねた。

「よしかわしほ吉川紫帆、うちの部長さ」

なるほど。たしかに、人の上に立つのにふさわしいカリスマ性が感じられた。きっと部員から信頼されている、立派な部長なのだろう。

そんなことを考えているわたしの横で、イルイが生き生きとしながら、勇氣さんに質問をした。

「それじゃあ、いきますね。まず、脅迫状の内容を教えてくださいませんか。覚えている範囲でいいので」

「内容は簡単なものだったよ。『今年の九月、桃花ホールで行う公演を中止しろ』だったかなあ」

「それだけですか？」

「ああ、それだけ。それがよくある茶封筒の中に折りたたまれて入れられて、サークル室のドアの隙間から入れられていた」

「脅迫状は手書きでしたか？ それとも印刷されたものでしたか？」

「A四判の用紙に印刷されていたよ」

「それじゃあ、筆跡から犯人を割り出すのは無理ですね」

「というか、脅迫状自体がもうないんだから、どちらにしても筆跡は見られないだろ。しっかりしてくれよ、イルイ迷探偵。」

「とりあえず、聞きたいことはこれくらいですね」

「えっ、それだけ？」勇氣さんはもつと根掘り葉掘り訊かれると思っていたらしい。わたしもそう思っていた。

「はい、そうです。ありがとうございました」

「ああ……それじゃあ、ぼくはこれで」勇氣さんは肩透かしを食らった力士のように、どこか納得しない雰囲気を見せながら引き上げていった。

「あんな質問でいいのか？」わたしは疑わしげにイルイを見た。

「いいの、いいの」と自信たっぷりに答えた。

「君の中には自信の貯水池でもあるのかな」

「もう、なによ、その言い方」イルイはむっとしていった。

「英知は、かかしの様に突っ立てただけだが、訊くことはなかったのか？」わたしはそう訊ねた。

「彼に訊いたところで、重要なことは何も聞き出せないだろうね」
実にそつけない返事だった。

今日の用が済んだので、サークル室に戻ろうとするわたしたちを、平尾が止めた。

「ちよつと待つて。また何かあつたら連絡したい。誰か連絡先を教えてくださいませんか？」

「じゃあ、おれのメールアドレスと電話番号を覚えておくよ」そう
いつて英知は携帯電話を取り出した。

英知のやつは、この件をどのように見ているのだろうか。わたしと同じように、いたずらと思っているのか。それともイルイと同じ意見で、犯人は何か目的があつて公演を中止にさせようとしているのか。

わたしはそのことを聞いてみた。

「英知、お前はその脅迫状が本気だと思っっているのか？」

英知は少し考えてから答えた。

「まだ、なんともいえないね」

次の日は何も起きなかった。わたしは十一時半に目を覚まし、昨日、スーパーマーケットで買ったカップ麺を、朝ごはんなのか、昼ごはんなのか、はつきりしない食事を済ませた。後は再びベッドに転がった。そして、枕元においてある読みかけの本、コリン・デクスターの著書、『ジェリコ街の女』を読み進めた。小腹がすくと、冷蔵庫の中から、サイダー（スーパーマーケットでご当地サイダーフェアをしいたので、試しに一瓶ずつ購入したもの）を取り出し、机の上にある、開封済みのチョコレートビスケットと共に胃におさめた。『ジェリコ街の女』は十六時には読了した。モース主任警部は毎回、読者を笑わせてくれる。今回もルイス部長刑事との掛け合いが光っていたな。わたしは次に、ヘニング・マンケルの『白い雌

ライオン』を書店のビニール袋から取り出して、ページをめくり始めた。二十時を超えたら腹が減ってきたので、冷凍庫を開けて、冷凍チャーハンをチンして食べた。食後に野菜ジュースをコップ一杯飲み、風呂に入り、そしてまた、布団に寝ころがり、『白い雌ライオン』の続きを読み始めた。時計の針が、二時半を示した頃、わたしはさすがに眠たくなって、本にしおりを挟んで眠りに落ちた。

まったく、わたしの理想どおりの一日ではないか。

しかし、次の日、五月二日は、そのようにはいかなかった。まずわたしは、朝の十時に、枕もとの携帯電話で起こされた。相手は英知だった。

「どうしたよ？」わたしは寝起きのくぐもった声で答えた。

「武、また脅迫状だ」

「うん？」わたしは、自分の脳みそが完全に覚醒していなかったため、英知の言っていることを、すんなりと飲み込めなかった。「脅迫状がどうした？」

「さっき平尾君から電話があって、演劇部にまた脅迫状が届いたそうだ」

わたしは、三秒くらい時間をかけて、英知の言葉を脳に浸透させていった。

「それは」わたしはようやくベッドから起き上がった。「本当か？」

「さっきから言ってるけど、本当だ」

「それで、平尾は何ていつているんだ？」

「すぐに来てほしいといっている」

わたしは、そんな義理はないと言おうとしたが、一週間以内にまた問題が出てきたら、そのときは協力すると言った気がするな。あんなこと言わなければよかった。

「わかったよ」わたしは、しぶしぶ了承した。

「瑠依ちゃんにはもう伝えておいた。お前も早く準備してこいよ。一旦、サークル室に集合だ」

すいどう会のサークル室には、イルイ、英知、平尾がすでに揃っていた。わたしは部屋に入り、平尾に話の詳細を訊ねた。

「みんなが揃ったんで、説明するわ」平尾は今朝の出来事を話し始めた。「演劇部は今朝から劇の練習をする予定だったんだよ。それでみんな多目的ホールに集まったんだ」

「劇の練習というと、九月のあの公演の練習か？」とわたしは訊ねた。

「うん。その最初の練習だよ。台本の本読みさ」

「わかった。続けてくれ」

「練習は九時半からだったんだ。それで、うちのサークルはいつも練習前にお茶が配られるんだ。ああ、お茶といっても、紅茶とかコーヒーとか種類が……」

「そこは詳しく説明しなくてもいいんだよ」話がわき道にそれ始めたので、わたしは修正を試みた。

「ああ、そう。まあとにかく練習前に飲み物が出て、みんなはそれを飲みながら練習をするんだ。通し稽古のときは違うけど」

「その飲み物はどこから出て来るんだ？」

「多目的ホールには給湯室があつてね、お湯はそこで沸かすんだ。インスタントコーヒーと紅茶のパック、あと紙コップはサークル室から持っていく」

「ふむ、それで飲み物がどうかしたのか？」

「三年生の池田恵美梨さんと、水野百合さんが飲み物を用意しようとして、給湯室でお湯を沸かしていたんだよ。そこで脅迫状が見つかったんだ」

「脅迫状には何て書かれていたか、わかるか？」

「今回はぼくもはつきり見たよ。茶封筒に入れられて、文章は印刷されてた。内容は『早く公演を中止にすることだな。意地を張ってもいいことは何もない。お前たちが意志を曲げないのなら、行動を起こさせてもらう』だったかな」

「一昨日の脅迫状よりも内容が充実しているな」

「それで二人が、みんなが集まっているところで、部長に脅迫状のことを報告したんだ。だから、みんなにも脅迫状のことが伝わったんだよ」

平尾はここで一息入れた。

「なあ、これでわかっただろ。これはいたずらじゃなくて、本当の脅迫なんだ」

「ああ、そのようだな」わたしは不本意ながら同意した。

しかし、この時点でわたしの頭の中にある一つの理論が出来上がっていた。

「それに、犯人は演劇部員の中にいるな」

「本当かい？」平尾は驚いた様子でいった。

イルイは上唇をふりつとした下唇に沈めて、難しげな顔をしていった。

「どうしてそんなことがわかるの？」とイルイが訊ねてきた。

「簡単なことだよ。脅迫状を書いた人物は、演劇部が今日の朝に、多目的ホールで練習を知っていた。さらに、その人物は多目的ホールの入り口や、演劇部がいつも練習に使っている部屋ではなく、給湯室に脅迫状を置いた。このことから、犯人は演劇部がいつも多目的ホールで給湯室を使っていることを知っている人物、つまり演劇部の行動を熟知している人間ということになる。ならばもう、部員の誰かが、やったと考えるのが普通じゃないか」わたしは自信に満ちた態度で答えた。

「なるほどねえ」イルイは、うんうんとうなずいた。

「そして、わたしは、今回の脅迫状を残した人物がだれか、予想がついている」

「マジかよ！ おまえ天才だな」平尾は飛び上がりにはしゃいでいる。「それで誰なんだ？」

「平尾新一、お前だ」

平尾の馬鹿騒ぎが一瞬にして消えた。そして、サークル室から音が消えた。遠くから、おそらく女子大生の大笑いが、かすかに聞こ

えてくるだけだ。

しばらく平尾は、サイの尻みたいな顔をしていたが、正気に戻って猛抗議を始めた。

「ふざけるなよ！　なんでぼくになるんだよ」

「お前は俺たちに、本気で脅迫状の問題に取り組んでほしいあまり、第二の脅迫状を自分で作り、それを給湯室に残したんだ」

「ちがう、ちがうちがうちがう」平尾はもげんばかりに首をふり、脳みそを揺らしながら否定した。

「脅迫状が一週間も経たないうちに、そう都合よく舞い込むか。観念しろ」

「冤罪だ！」

「まあ落ち着けよ」と英知。「平尾君の話だけでは情報量が少なすぎるよ。平尾君が本当にやったかどうかは、あとで検討すればいい。それよりも、脅迫状を見つけた、百合さんと恵美梨さんに話を聞いたほうがいいよ。見つけたときの状況がわかるし」

「そうですよね」平尾は笑顔になった。内心では、きっと、英知の助け舟に心の鼻水を流しながら、痛く感激していることだろう。

「わかったよ」わたしはいった。「じゃあ多目的ホールに行くか」わたしはここで、はてな、と思った。

「ところで、脅迫状が見つかったせいで、今は練習が中止になっているのか？」

「いや、部長がまた脅迫状を破いて、『こんなくだらないものに惑わされるな、練習だ』といって強行したよ」

「じゃあ、練習中なのに、なんでお前は今ここにいる？」

「開始早々にトイレといって抜け出てきた」

本当に、こいつは……

3 - 3 ・不協和音

多目的ホールは、サークル棟から北に向かったところにある。生活支援課に申請書を出せば、好きな日に使うことができる。その日には、休日、祝日も含まれているので、演劇部には重宝されていると、平尾が説明した。

多目的ホールは白い外壁に覆われた、面白みのかけらもない、一階建ての四角い建物だった。

その入り口では、二人の女性が立って話をしていた。そのうちの一人は見覚えがあった。すらりと伸びた背、爽やかさをもし出す短髪、演劇部部长、吉川紫帆さんだ。練習はどうしたのだろう？ 休憩でもしているのかな。

もう一人の女性は、初めて見る顔だ。肩甲骨あたりまで伸びた黒髪のロングヘアー、小さな鼻に、薄い唇、さらにピンクのプラスチックフレームの眼鏡をかけている。どこかおどした雰囲気があり、ゆったりとした服装に身を包んでいる。簡潔に言うならば、ちよつと気弱なクールビューティーといったところだ。

紫帆さんは、わたしたちの存在に気がついたらしい。こちらにゆつくりと近づいてくる。ピンクフレーム眼鏡の女性も、紫帆さんの後に続いて、わたしたちとの距離を縮めた。

「君たちか」

「わたしたちですよ。昨日は名乗りそびれましたね。推理小説研究会の永久武です」

イルイと英知も同じように挨拶をした。

「平尾からもう聞いているかもしれないが、わたしが演劇部部长の吉川だ。そして」紫帆さんは、隣の女性の頭をぽんぽんと叩いた。これは男女でたまにやる動作だが、身長差があるのでよく似合っていた。「こいつはわたしのお気に入り、水野百合だ」

ふむ、こういう意味のお気に入りかは深く考えないことにした。

ともかく、この人が脅迫状を見つけた一人、というわけだ。

「あつ、えーっと、水野百合です」そういつて百合さんは頭を下げた。彼女はぎこちない挨拶をした。自分の名前を言うときも、結構な早口だったし、おそらく人見知りなのだろう。

「水野さんは、脚本担当なんだ」

「へえ、脚本を書いているんですか」イルイは興味ありげに彼女をみた。

脚本と小説、ジャンルは違えど同じ書き物だ。わたしは、同じもの書きとして（わたしはまだ一作も書いていないが）、彼女に対する親近感が湧いた。

「すごいですね」わたしの素直な感想だった。

しかし、彼女の表情は明るくなることはなく、逆に曇った。

「わたしなんて、そんなぜんぜん駄目です。過去の先輩たちの書いた脚本と比べても、見劣りしていますよ」

あまりにネガティブな発言で、この場の重力増したかのように、重苦しい空気が漂った。

「そんなことはない」紫帆さんが、この空気を打ち破るようにいった。「百合はだんだんと上達しているよ。今回、わたしに見せてくれた脚本は、これまで書いてきたなかで、一番のできたぞ」

「うん」紫帆さんの励ましも、あまり効果はなかった。百合さんの表情は曇ったままだ。

「ところで」平尾が話を変えた。「二人ともなんでここにいますか？ 練習は？」

「今は休憩中だ」そういつてから、紫帆さんはじろりと平尾をにらんだ。「ところで、ずいぶんと長い間、お手洗いに行っていたじゃないか」

「ええ、一時間と四十分くらいですね」

「多目的ホールのトイレも使わずに」

「二ヶ月分くらい溜め込んでましてね。全部出し切って、公共のトイレを詰まらせるのは問題でしょ」

平尾の頭に、手刀並みに鋭いチョップが振り下ろされた。平尾は、頭を抑えて、その場にうずくまり、声ではなく、音を発した。

「さっさと立て、まだ、これから十二時まで稽古するぞ」死人に鞭を打つような言葉をかけた。

「熱心ですね」わたしはいった。「脅迫状が届いているというのに」紫帆さんは、そんなこと聞きたくないと言わんばかりに手を振った。

「脅迫状なんて関係ない。九月の公演はどうしても成功させたいの」彼女の言葉には何か気迫のようなものがこもっていた。

「どうしてですか？ 何か特別な理由でもあるのですか？」わたしは、彼女の真剣さを不思議がって、思わず訊ねた。

「去年、大学を卒業した先輩たちが、九月の公演を見に来てくれるのよ。県内に就職した方しか来ないけどね。それでも三人の先輩たちが公演を見に行きたいから、日程と場所が決まったら教えてくれと、一週間ほど前に連絡を下さったのよ。その三人は、今の三年メンバーが、かなりお世話になった方たちなの」

「へえ、そうだったんですか」

「わたしたちが入部した年は、不作の年だね。わたしと、百合と、勇気と、恵美梨の四人しか入部しなかったのよ」

四人で不作とは、いい身分のサークルだな、とわたしは思った。「それで当然、指導が個々に集中するわけよ。練習はきつかったけど、それと同じくらい、先輩たちは、楽しませてくださったわ。福山さんからは演技指導や、台詞の言い回しを教わったし、わたしが部長をすることになったとき、水川さんには、部のまとめ方を教えてもらった。それに百合も、小塚さんから、脚本の書き方を教えてもらったよ」

紫帆さんは、過去を懐かしむ、うつとりとした声で語っていたが、ここで言葉を切り、まっすぐとわたしを見据えた。

「だから、その三人の先輩には、わたしたちの成長した姿を見てもらいたいんだ」そういった彼女の目には、強い意志が宿っていた。

その強靱な意志にわたしは圧倒された。詳しく言うと、彼女の眼力はわたしの神経細胞を麻痺させた。わたしは金縛りにあったように動けなくなり、彼女の顔を見返すことしかできなかった。わたしは本能的に感じた。この人には圧倒的オーラ、驚異的カリスマがある！

「わかつてもらえたかな。なぜわたしたちが、これほど熱心になれるのかを」紫帆さんは、そういつて眼力を緩めた。わたしはようやく力が戻り、身体を動かせるようになった。

「ええ、あなたの意思は伝わりました。強烈なまでにね」わたしは、ここで胸を張った。「ですから、その炎のような意思が弱まらないように、わたしたちもお手伝いしますよ」

「なにい、どういうこと？」

「脅迫状を書いた犯人を、突き止めるということですよ」

「知らない世話ね。探偵ごっこなら他所でやって」

「わたしはお遊びだと思っていません。紫帆さんたちの想いに水をさす不屈きな輩を見つけ、二度とこんなことをさせないと誓わせる。ただそれだけです」

わたしがこのように訴えても、彼女の硬い表情は変わらなかった。それどころか、またわたしの目をじっと見つめ、あの魔法と言っている、強烈な視線を放った。

彼女の眼力は、蛇にらみのような、相手を押さえつけるものではなかった。そう、その逆、むしろ相手を自分に惹きつけ、他のことを何も考えられないようにする、そんな力があるのだ。自分の意志が、彼女の瞳に吸い込まれるように、消えてゆく。彼女の目を見つめることしかできなくなる。それも自分の意志ではなく、彼女がそうさせるのだ。

意志をなくし、抜け殻となった者は、相手の言いなりになるしかない。

「もう一度言う。首を突っ込むな」

強烈な言葉の一撃だった。わたしは思わず屈服しそうになる。彼

女から目を逸らすことすらできないこの状況を打破する方法は、一つしかなかった。

わたしは、己を奮い立たせ、自分の中に残された意志をかき集めた。そして、わたしは彼女を睨み返した。彼女には彼女の想いがあるなら、わたしにも、わたしの想いがあることを、彼女に思い知らせるしかない。わたしはまぶたに力を入れ、するどい視線を彼女に送った。

二つの視線が宙で交錯する。彼女の眼力に負けてはならない。わたしは彼女の瞳を射抜かんばかりの眼光を放ち、そして、いった。「いやです」

二人の間で沈黙が流れた。わたしには何分もの長い時間を感じられた。しかし、実際は十秒ほどしか経っていなかった。

彼女の目から怪しい輝きが消えた。彼女は唐突に振り向いて、こういった。

「邪魔だけはしないこと」

それから彼女は、多目的ホールの入り口へと歩き出した。

わたしの意志が彼女に通じた瞬間だった。

わたしは悦に浸ったが、すぐに紫帆さんの声がした。

「ほら、なにぼけつとしてるの？ 中に入るの入らないの？」

「今、行きますよ」わたしは額の汗をぬぐった。

> i 3 2 3 4 8 — 4 1 0 5 <

わたしたちはガラス張りの両開きの扉を抜け、玄関へと入った。多目的ホールの内部は土足厳禁なので、わたしは木製の靴箱の中から、備え付けのスリッパを取り出し、履き替えた。入り口からまっすぐ進むと、そこには大きな広間があった。椅子を並べても余裕をもつて六、七十人は収容できそうだ。床は薄いピンクの絨毯で、奥

にはステージが見える。あの上で、いくつかのサークルが劇をやったり、演奏をしたりするのだろう。

「そっぢゃないわよ」と紫帆さんが、広間を覗いていたわたしに声をかけた。「そっぢゃは大ホールよ。練習場は奥の小ホールでやっているのよ」

わたしたちは玄関から、右にのびる通路を進んだ。まず右手に見えたのが、談話室というプレートが飾られた部屋だった。その談話室の隣の部屋には、給湯室と書かれたプレートが張られていた。右手の一番奥、つまり給湯室のさらに隣には、男子トイレ、女子トイレが並んでいた。小ホールは、左手の一番奥、トイレの向かい側にあった。

わたしたちは、小ホールの前まで来たが、ドア越しからでも、部屋の中の、殺伐とした雰囲気伝わってきた。二人の人物が言い争っている、いや、この表現は控えめだ。誰かと誰かが、言葉と言葉で殴り合いをしている。そんな感じた。

紫帆さんは、すぐさまドアを開け、中に飛び込んだ。

小ホールのど真ん中で、二人の男性が向かい合って、怒鳴りあっていた。一人は、わたしたちが昨日、対面した人物、高岡勇気だ。

ポニーテールの活発そうな女性が、二人の間に入って仲裁を試みていたが、効果は露ほどもないようだ。

その三人の周りを囲むようにして、十数人の部員たちが不安と恐怖の感情を纏い、その様子を傍観したり、互いに囁き合ったりしていた。百合さんはわたしの隣で、恐怖のためか、身を硬くした。

「やめなつて！」ポニーテールの女性が懇願した。

「おまえは黙つてろ。こいつが脅迫状を書いたかもしれないんだぞ。ちゃんとこの目で見たんだ！こいつが給湯室に入るところを」と高岡が、鋭い口調で怒鳴った。

「だから何度もいつているでしょ！コンビニで買った菓子パンと、コーヒーを食べていたんですよ」相手も負けていない。

「それなのに、脅迫状を見逃していたというのか？」

「本当に、気づかなかったんですよ！」

紫帆さんが、部員たちを書き分けて、二人の前まで進み出た。

「何をしているの！ 大勢の前で怒鳴りあって、みつともないと思わないの？」

鞭のように、しなやかな言葉の一撃が、二人の間に打ち下ろされた。

それからわたしは、目を疑った。なんと平尾のやつも、喧嘩寸前の二人の間に、悠然と進み出ていったのだ。あいつは何をする気だ？ 平尾はにやりとして、二人に語りかけた。

「そうそう、あんまり場の雰囲気が悪くすると、他の『ブイン』から『ブーイング』を浴びせられますよ」

その場が静まり返った。悪い意味で。

勇氣さんと、その相手は、感情の死んだ顔で平尾を、ただただ見るだけだった。平尾の隣にいる紫帆さんは、次に発しようと考えていた言葉が、気管支あたりまで引っ込んでしまったようだ。彼女の後姿が悲しく映った。ポニーテールの女性は、やりきれない思いで、視線を落とし、顔をしかめ、唇を噛んだ。周りの部員たちがさっきまで表に出していた、不安や、恐怖といった感情はすべて溶けて消え去り、後には何も残らなかった。わたしたちと、百合さんは、この展開に思考が追いつかず、十年くらい倉庫にしまわれたままの置物と化した。すでに何も聞こえないし、何も動かなかった。

虚無の世界の訪れだった……

「あれ？ みんなどうしたの？」平尾だけがその世界の住人だった。なぜ、なぜこいつは、この緊迫した場面で、大勢の前に出てきてあんなことを言えるのだ？ こいつはもう……もう……病院行きだよ！

「平尾」紫帆さんの思考回路が、回復の兆しを見せ始めた。

「はい、なんですか？」

「さっきのは、いったい、なんだ？」

「ええっと、場の空気を和ませようと思ひまして」平尾は、けろり

として答えた。

「そうか。ご苦労だった。もう、引っ込んでいろ。戻れ」紫帆さんの言葉は、不思議なくらい途切れ途切れで、感情のかけらさえ、こもっていなかった。

平尾は行きと同じくらいの、悠然とした足取りで、わたしたちのところへ戻ってきた。イルイは平尾に、未知の生命体を見るかのような眼差しを向けた。英知は濁った目で、どこか遠くを見ていた。わたしは平尾の姿が視界に入らないように努めた。

「何があつた？」紫帆さんは目の前の三人に訊ねた。

最初に飛び込んだときの勢いはもはやなく、彼女の気力は風前の灯だった。この状況をリカバリーすることは不可能だ。

「勇氣さんに、言いがかりをつけられたんですよ。脅迫状を給湯室に置いたのは、俺だって言うんですよ」わたしたちの知らない男が落ち着いて説明した。

「そうなのか？」紫帆さんは、勇氣さんに訊ねた。

「ああ、そうさ」

「なぜそう思った？」

「^{そつた}宗太が、ここに到着してからすぐに、給湯室に入っていったのを見たんだ。今日のお茶入れ係でもないのに、何で給湯室に入ったか不思議だったよ。それで、恵美梨と百合が、給湯室に入ったときに脅迫状が見つかっただろ。それで、午前中の練習のときに、もしかしたらって、思ったんだよ」

紫帆さんは、宗太と呼ばれた男の方を向いた。

「給湯室に入ったのか？」

「はい」

「なんのために？」

「今朝、寝坊をして、朝ごはんを食べている余裕がなかったんです。それで、途中でコンビニで朝食を買ってきたんです。それで、給湯室で買ってきたものを食べたんですよ」

「そこがわからない」勇氣さんが口を出した。「なんでわざわざ給

湯室に入ったんだ？ 小ホールでも飯は食えるぞ」

「勇気、ちよつと黙つてて、話がややこしくなるから」紫帆さんが制止した。

いいのかわからないが、ぴりぴりした空気が戻ってきた。「どうして、給湯室で食事にしようと思ったの？」紫帆さんは、静かに訊ねた。

「床にあぐらをかいて食べるより、椅子とテーブルがあつたほうが、食べやすいんですよ。だから給湯室に入って、食事をしたんです」

勇気さんは、その話を鼻で笑った。「そんな言い分を……」

「勇気！」紫帆さんは、ぴしりといった。

勇気さんは顔をしかめた。すかさず、隣にいるポニーテールの女性、彼の肩に手を置いて、勇気さんをなだめた。

「そのときに、茶封筒はなかったか？」

「それは、わかりません。給湯室に入ると、すぐ近くの椅子に座つて、食べるのに夢中でしたから」

勇気さんは何か言おうとしたが、ポニーテールの女性に腕を掴まれて、断念した。

「恵美梨」紫帆さんは、ポニーテールの女性に声をかけた。「脅迫状はどこにあつた？」

どうやら彼女が、百合さんと一緒に脅迫状を見つけた女性のようにだ。

「南側の窓に近い床の上に落ちてたわ」恵美梨さんは、はっきりと答えた。

「それでは、テーブルを挟んだ向かい側の床に落ちていたというわけだ。つまり、宗太が気がつかなくても無理はない。テーブル自体が死角になって、入り口付近からでは見えなかった可能性がある」

「そうですよ。テーブルが邪魔してて、脅迫状がすでに落ちていても気づかなかつたんですよ」宗太君は、鬼の首をとつたかのようにはしゃいだ。

「勇気、まだ言いたいことはあるか？」と紫帆さん。

「あるよ」勇氣さんは重々しくいった。「こいつが、九月の公演に不満を持っているのを知っている」

「それはどういうことだ？」

「宗太は、演技が未熟なせいで、端役しかやらせてもらえないことは、紫帆も知っているよな」

「ああ」紫帆さんはうなずいた。

「宗太は、サークルにいるときだけは、それを仕方ないことと思っているが、本当は心底おもしろくないと思っているんだよ。ぼくは見ただよ。宗太が生協で、友人と話しているときだ。その会話の内容は、演劇部に対する不満ばかりだった。『もつと大きな役がほしい』、『おもしろくない』、そんなことばかり言っていたな。それで極めつけが、『おれが活躍しない公演なんてなくてもいい』と言いつつたことさ。さすがに、この台詞には、ぼくも耳を疑ったよ」

「それで宗太が脅迫状を書いて、劇を潰そうとしたと？」紫帆さんはゆっくりといった。

「ああ、ぼくはそう考えているよ」

「宗太、さっきの勇氣の話は本当か？」

宗太君は一度、顎をさすってからいった。「さあ、覚えてませんね」

「よく思い返して、正直に答えるんだ」紫帆さんは力強い眼光を、相手に向けた。

宗太君は十秒ほど沈黙を守っていたが、ため息を一つ吐いていった。「確かに、そういうことがあるかもしれないね」そして、こう付け加えた。「不満があるのは事実ですし」

「そうか……」紫帆さんは、それでも静かな口調だった。

「だけど」宗太君は、急に風船の様にはじけた。「それでも、おれは脅迫状なんて書いてませんからね！ 劇で出番が少ないことが理由で、脅迫状なんて書くと思いますか？」

あたりはまた静まり返った。しかし、今度の静寂は『無』ではなかった。耳では聞こえない、不安、疑心、不明が混ざったマイナス

感情のざわめきが、自由にあたりを漂っていた。

「みんな！」そんな雰囲気を感じてか、紫帆さんが声を張っていった。「誰が書いたかわからないような脅迫状に惑わされるな！脅迫状のことばかり考えすぎて、気が滅入っているんだ。姿を明かさな^い卑怯者のことなんて気にするんじゃない。一旦落ち着くために、今日はこれで解散にしよう。家に帰って頭を冷やすんだ。劇のことだけに集中しろ。脅迫状のことは忘れるんだ」

なんとも頼もしい演説だ。これも彼女のカリスマ性の成せる業か。しかし、それでも、ここにいる人たちの不安を完全に取り除くことはできなかったようだ。

「でも」恵美梨さんが、おずおずといった。「脅迫状だけじゃなくて、嫌がらせまでしてきたらどうするの？」

紫帆さんは、一瞬言葉に詰まったが、すぐにわたしたちを見て、こういった。

「心配ない！」紫帆の声の輝きは、失われていなかった。「これ以上、問題を大きくさせないために、わたしは助っ人を用意した。それが、彼らだ！」

そういつて、紫帆さんは、天に向かって指をさし、振り上げた腕を、わたしたちの方に向かって、思い切り振り下ろした。いまや、指先はわたしたちを指し示している。

彼女の指先にしたがって、すべての演劇部員の目が、わたしたちを捉えた。

「彼らは推理小説同好会のメンバーだ。彼らの頭脳には推理小説から得た、膨大な犯罪知識が備わっている。知識だけでは頼りないと思っ^てている奴もいるかもしれない。しかし、彼らは、このわたしがひとりひとりに全幅の信頼を置く、優秀な人間だ。その三人がチームワークを発揮するとき、彼らの前に立ちふさがる謎は、すべてその頭を垂れ、地に伏すことになる。そして彼らの歩んだ後に残るのは、純然たる真実のみだ」

なんだかものすごい紹介をされているんですけど、わたしたちは

そんなにすごくありませんよ。部員たちを落ち着けるためとは言え、さすがに誇張が過ぎますよ、紫帆さん。

わたしは、横目でイルイと英知の表情を見た。

イルイは引きつった笑顔を浮かべて、居心地悪そうに、その場に立っている。あまり注目を浴びたがらない、影の秀才のようにも、見えなくはない。

英知は、やれやれといった様子で、半笑いを浮かべていた。不適な笑みを浮かべているようにも、見えなくはない。

「わたしと、彼らを信じてくれないか？ 脅迫状の問題は必ず、解決する。だから、不安と疑いはここに置いて行ってくれ。明日は、また九時半から練習をする。今日は早いが、これで解散だ」

大方の演劇部員たちは彼女の号令に従って、のろのろと部屋から出て行った。

しかし、責任重大になったなあ。

3・4・すごい弁当

紫帆さんの解散宣言を受けて、小ホールに残っている人はほとんどいなくなつた。

「ちよつと、あんたたち」

そんななか、わたしたちを呼ぶ声が聞こえた。わたしは後ろを振り向いた。

池田恵美梨さんがそこに立っていた。

「紫帆は、あんたたちのことを高く評価しているみたいだけど、本当に犯人を見つけれれると思つているの？」どこか高圧的なしゃべり方だ。

「努力はしますよ」わたしは無難に答えた。

「結果を伴わない努力なんて無駄よ」辛辣な言葉だ。「あと、わたしたちの周りを調べまわるのはあなたたちの勝手だけど、稽古の邪魔だけはしないでね」

わたしは強気な女は嫌いではなかったが、嫌味をたっぷり含んだ彼女の言葉には、むっとした。それでも自制して、普段どりの口調でいった。

「ええ、邪魔はしませんよ。九月の公演は三年生にとって、大切な公演だと聞いていますからね。わたしは、その手助けができればいいと思つていただけですよ」

「ふうん」彼女は高慢な態度のままだった。

「それでお聞きしたいことがあるんですが」

「何よ？」

「脅迫状を見つけたのは、あなたと百合さんでしたよね」

「そうよ。さっきの話を聞いてたでしょ」わかりきったことを聞くな、と言わんばかりの口調だった。

「脅迫状があつた場所まで案内してもらえませんか？」

「なんでわたしがそんなことを……」

「百聞は一見にしかず。お願いします」そう言って、わたしは頭を下げた。

恵美梨さんは、はあっ、とため息を一つついていった。「わかったわよ」

こうしてわたしたちは、給湯室に案内された。給湯室は、真ん中に木製の長いテーブルが置かれており、そのテーブルの周りを六脚の椅子が囲っていた。テーブルの上には電気ポットと、インスタントコーヒーの瓶や、ティーパック、紙コップが入ったバスケットがあった。向かって左側の壁には、ガスコンロと流し台が取り付けられており、流し台の奥には食器棚らしきものが見える。

恵美梨さんはテーブルの向こう側に行き、床を足でとんとんと叩いた。

「脅迫状はここに落ちていたのよ」

恵美梨さんが足で示した部分は、南側の壁とテーブルの間で、やや壁よりのところだった。その上には窓があった。入り口付近では彼女の足先を見ることができなかった。テーブルが邪魔をしているのだ。これなら、あの宗太君が、脅迫状に気がつかなかったのもわかる。

英知がいきなり。わたしの意表をつくことをいった。

「ちよっと、おれ抜けるわ」

「えっ、なんで？ 用事でもあるのか？」

「ここは二人に任せるよ。おれは紫帆に聞きたいことがあるんだ」
「そうか、じゃあ行つていいぞ」わたしは腑に落ちない部分があったが、どうしても英知をここに留めておく理由もなかったので、彼を退出させた。

わたしとイルイは改めて部屋を見た。それから、わたしの頭にある考えが浮かんだ。

「恵美梨さん、百合さんと二人でここに来たとき、その窓は開いていましたか？」

そう言って、脅迫状が転がっていた床のすぐ上にある窓を指差し

た。

「開いて、いたな」恵美梨さんは考えながら答えた。「冬以外はだいたい、ここも、小ホールも、わたしたちが使っているときは、窓を開けている」

「それじゃあ、犯人は窓から脅迫状を入れたのかもしれませんがね」

「わたしは、どうやって脅迫状を置いていったか、じゃなくて、誰が置いていったか、を知りたいんだがな」もつともな答えだった。

「犯人の行動パターンさえわかれば、おのずと犯人自身もわかるものですよ」わたしはいかにも、聞こえがよく、説得力のありそうなことをいった。

「ここにいたか」後ろからの声にわたしは振り返った。

勇氣さんが、戸口に立っていた。

「恵美梨、そろそろ帰ろうぜ」

この言葉で、いや、勇氣さんが現れたときから、彼女の表情は柔らかになり、目には喜びの色が浮かんでいた。

「うん、わかった。荷物まとめるから、ちょっと待ってねえ」彼女は甘い声を発した。

なんだ、彼女の豹変ぶりは？ わたしはさっきまで、ジャガーのような女と対峙していたというのに、いまや彼女は子猫になっていた。

恵美梨さんは、わたしとイルイの間を通り抜けて、勇氣さんと一緒に退場した。

「なんというか、忙しい人だね」とイルイ。

「彼女は、乙女だ」わたしは評定を下した。

「驚いただろう」誰もいなくなった戸口から、平尾がぬうつと、姿を現した。「恵美梨さんはいつも強気で人と接するけど、彼氏の勇氣さんにだけは、見ているこつちが恥ずかしくなるほど、デレデレになるんだよ。あまりの違いに、ぼくは恵美梨さんに『トウーフエイス』という二つ名をつけたなあ」

「急に現れたと思ったらくだらないことを言いやがって。お前は先

輩にもそんな横文字のあだ名をつけているのか？」

平尾は誇らしげにうなずいた。

「部長には『クイーン』、勇氣さんには『ブレイブ』という呼び名がある」

ひどい呼び名だ、とわたしは思った。

「そして百合さんのことは……」

「どうせ『リリイ』（ユリは英語でこう言われる）とかだろ」とわたしはいった。

「エスパーだ！」平尾は驚愕した。

「単純思考めが」

平尾の馬鹿にはもう付き合いきれないので、わたしとイルイは給湯室から出て行き、英知と紫帆さんを探した。

小ホールには二人の姿はなかった。それではどこに行つたのだろうか？ 二人は、わたしが何気なく覗いた談話室にいた。

談話室は、流し台とガスコンロがないことを除けば、給湯室と似たような内装をしていた。二人は椅子に座って向かい合っていた。

紫帆さんは紙に何かを書いていた。

「何してるんだ？」わたしは訊ねた。

「紫帆さんに、九月の公演についてこれまでに決定したことや、公演が絡んだ出来事の一覧を、日にち順に書き並べてもらっているんだ」

「なんでそんなことを？」

「犯人は九月の公演を中止にさせたいわけだ。だからおれは、焦点を脅迫状ではなくて、九月の公演に当てる物事を考えようと思っているんだ。そのために、紫帆さんに協力してもらって、公演に関する出来事を可能な限り思い出してもらっているんだ」

「これくらいは、協力のうちには入らないよ。いうならば、わたしの義務だ。みんなの前であんな大口を叩いたのだからね。君たちには迷惑をかけた。これで君たちが、犯人を見つけられなかったら、うちの部員たちから、白い目で見られるかもしれない」

「それは紫帆さんも同じですよ」わたしはいった。

「紫帆さんは、わたしたちに全幅の信頼をおいていると宣言しましたからね。わたしたちが失敗したときは、紫帆さんの信頼も地に落ちることになります。なんでそう言ったのですか？ 他にもいろいろ言い方があったでしょ」

「君たちばかりに苦しい思いをさせたくないんでね。自分の手を汚さずに、すべて他人に任せるのは、性に合わないんだよ。だから、わたしたちを運命共同体にすることにした」

そういつて、紫帆さんは机から顔を上げた。

「できたぞ」彼女は、紙を英知に渡した。

わたしとイルイは、英知の後ろにまつて、その紙に書かれている内容を読んだ。

一月十五日、九月公演の第一回ミーティングを行う。例年通り、オリジナルの劇を行うことが決定。

一月二十七日、三年組みで劇の方向性を話し合う。ジャンルは『ファンタジー』に決定。脚本作り開始する。

四月八日、劇の脚本が完成。タイトル『霧の中の魔女』。

四月十三日、第二回ミーティングを行う。演目内容を部員に伝える。公演日時が決定。

四月十八日、台本が配られる。配役を決定する。

四月二十日、第一回目の稽古を行う。

四月二十二日、OBの水川から連絡がくる。可能なら、福山さん、小塚さんと共に九月の公演に来場。わたしの心が燃え上がった。

四月二十六日、第二回目の稽古を行う。恵美梨が遅刻してきやがった。

四月二十八日、公演場所が決定。

四月三十日、サークル室に脅迫状が届く。サークル室に怪しい三人組が現れ、脅迫状のことについてあれこれ訊いて帰った。

五月二日、多目的ホールに脅迫状が届く。第三回目の稽古を行う。

またあの三人組が現れた。脅迫状が届いた後には、こいつらが必ず現れる。犯人はこの三人組だろう。

「後半は、おふざけが入っているじゃないですか」わたしはあきれていった。

「ずっと真剣に考え事をしていると、途中で息抜きみたいなものをしたくなるのよ」

「ありがとうございます」英知は文句の一つも言わずに

「どう、役に立ちそう？」

「今はまだ何とも言えませんね」英知は静かに微笑んだ。

次の日、わたしたちは、英知の提案で演劇部の稽古に張り付くことになった。そのせいで、せつかくの休日だというのに、わたしは朝の八時四十五分に起床して、身支度をするはめになった。

わたしたちは九時には小ホールに集まり、九時半には部屋の隅でその様子を観察した。もっとも、わたしは早い段階で退屈になったので、家から持ってきた小説を取り出して読んだ。

稽古そのものは、スムーズに進んだ。稽古といっても、まだこの段階では、台本に書かれた自分の台詞を音読していくだけだった。

午前中は、何事もなく終わった。

昼食の時間になった。各々が持参した弁当を取り出し、思い思いの場所に陣取った。部員たちは数人ずつの、あるいはもう少し多いグループに分かれて、食事をした。この様子を見れば、誰と誰の仲がいいのかが、すぐにわかる。平尾は一人で弁当を食べていた。

わたしたち三人は、三年グループのところに邪魔した。

「今日は平和ですね」わたしは、みなさんに挨拶をした。

「そう毎日毎日、あんなことがあってたまるか」と紫帆さんが答える。

「ところで」わたしは四人が囲っている物体を見た。「それは何ですか？」

「見ればわかるだろう。弁当だ」紫帆さんの口調には、当然だろう、という響きがあつたが、これは当然とは言えない。

四人の真ん中には、見事なまでの黒光りをしている、巨大な三段の重箱が置かれていた。紫帆さんが、一段一段重箱を外していく。

中はまさに、日本料理の宝庫だった。鮭の塩焼き、さわらの照り焼き、搔き揚げ、焼きえび、きんぴらごぼう、かばご、味噌漬、つくね、赤貝の煮付け、ほうれん草の胡麻和え、なんか焼いた肉のようなもの、だし巻き卵、甘露煮まである！

「こ、これはどなたが、お作りになったものなのでしょうか？」イルイは驚嘆した。

「ああ、わたしの実家が料亭やっているんだよ。これは前の日に出されたものあまりだ。たいしたことはないよ」紫帆さんは涼しい顔でいった。

「いやいやいや、たいしたものですよこれは。わたしは若干ひいた。紫帆さんは割り箸を、勇氣さん、恵美梨さん、百合さんに配った。君たちも食べるかい？」と紫帆さんが訊ねた。

「えっ、いいんですか？」わたしは取り出しかけたカレーパンを、ポケットの奥に沈めていった。

というわけで、わたしたち三人はご相伴に預らせていただいた。『どうだい、おいしいかい？』

イルイが赤貝を口に含んだまま、すかさず答えた。

「はい、魂が震えるおいしさです」

「はっはっは、それはよかった」

食事は和気藹々（わきあいあい）とした雰囲気に進んだ。

「四人でどこかに遊びに行くことって、あるんですか？」イルイはごく普通の質問をした。

「行かないかな。行ったところで、二人だけの世界をつくるやつらがいるし」ちらりと勇氣、恵美梨ペアを見た。

「勇氣は手が早かったな。入部して二週間後には、もう恵美梨とできてただろう」

これを聞いて、勇氣さんはむせた。

「ここでそんな話するなよ」

「なぜわたしを選ばなかったのかが、不思議だなあ」紫帆さんはしみじみとした感じでいった。

「紫帆さんは発するオーラがすごいですから、普通の人は、話しかけることさえできませんよ」料理をご馳走になったからだろうか、自然と彼女を称える言葉がわたしの口から出てきた。

「いや、違うよ」勇氣さんは否定した。「一年の頃は、紫帆もこんな感じじゃなかった。もつと大人しかったよ」

「へえ、そうなんですか」わたしは意外に思った。「じゃあ、何で恵美梨さんを選んだんですか？」

こんな話をしているからだろう、恵美梨さんは、勇氣さんの隣で顔を真っ赤にして、にやけた顔になるのを抑えていた。

「紫帆と百合は、入部したときから、いつも二人でくっついておしやべりしてたんだよ。それで、当時のぼくも、女子同士の会話に割って入るのに抵抗があつてね。それで自然と恵美梨の方に流れていったわけさ」

「なるほど、紫帆さんたちのほうが、先にデキていたわけですね」イルイのやつはとんでもない発言を平気でするな。わたしがその台詞を言ったら、紫帆さんに腕をへし折られるだろう。

「まあ、わたしと百合は、同じ高校出身で、そのときから仲がよかったのさ」イルイの発言はなかったことにされた。

「下地したじがあつたわけですね」わたしはいった。

「ああ、わたしが一番の親友さ」紫帆さんは自慢げにいった。それを聞いた百合さんは、うれしいような、困ったような顔をした。

ここで、勇氣さんが不思議なことを言い出した。

「なあ、紫帆。今日のおやつは何にする？」

「さあ、何でもいいんじゃないの？」

わたしはこの会話がよくわからなかった。なぜいきなりおやつが

出てくるのだ？

「おやつって、どういうことですか？」わたしは訊ねた。

「休日を使って一日中練習するときは、午後の休憩時間にみんなでおやつを食べることにしているのよ」

「ここで？」

「そうよ。脚本、照明、音響、大道具といった裏方の人たちで、人数分のお菓子とか、スイーツを買ってくるのよ」

「どこからそんな資金が湧いて出てくるんですか？」わたしは不思議に思った。

「みんなから徴収した部費を使っているのよ」

「そうか、うちはそういう会費とかは徴収してないからな」

「あの……」百合さんが控えめな声を出した。「今日は、アイスクリームにしない？」

「アイス？ ええ、いいわよ」紫帆さんはあつさり了承した。まあ、おやつくらい常識的範疇にあれば何でもいいのだろう。

午後の稽古は十三時から再開された、稽古の途中、裏方組み、あとイルイは三時のおやつを買出しに行った。

わたしは英知を連れて外に出た。彼に訊きたいことがあったのだ。稽古場でごにごによ言って、邪魔になるようなことはしたくなかった。

「脅迫状を出した犯人探しは、どこまで進んでいるんだ？」わたしは単刀直入に訊ねた。「俺たちは重大な責任を負っているんだ。このまま何週間も進展がなかったら、演劇部の部員たちから、役立たずと思われるぞ」

「確かにブーイングを受けるな」

「それはもういい」わたしは、いらだしげに手を振った。「それに紫帆さんの演劇部での立場が危くなる。まあ、彼女が自分で選んだ道だけだな」

わたしは彼女の演説を思い出した。よくあんな大見得を切れるも

のだ。あの場を治めるためだったとは言え、さすがに行き当たりばつたりの行為だ。

「とにかく、何かわかったことはあったか？　ちなみにわたしは何もない」

「そうだなあ……脅迫状を書いた人の見当はついた」

わたしは口をあぐりと開け、目の前にいる恐るべき男を見た。

「ほ、本当か？」わたしは動揺していた。まさか英知が、こんなに早く目星をつけているとは思わなかった。「誰なんだ？　教えてくれ」

「待ってくれよ。まだその人がやったと決まったわけではない。というか、いまいち自信がないんだよ」

「何でだよ、目星がついているなら、それなりの理由があるんだろ」「その人には動機がないんだよ。脅迫状を書く動機が」英知は、難解な宿題を出された高校生のように困っていた。

その後、わたしが英知にあれこれ質問しても、彼は、『ああ』とか、『うん』とか、『いや』といった、曖昧で適当な返事しかしてくれなかった。

仕方がないので、わたしは多目的ホールに引き返した。途中で一度振り返り、英知を見たが、彼はその場に立ち尽くし、空をじっと睨んでいた。

3 - 5 ・ 砕かれた瓶

十四時五十分、買出し部隊が戻ってきた。

「よし、これから三十分休憩だ」紫帆さんが、号令を出した。

小ホールに六つの洋菓子箱が並べられた。箱の中には、カップアイスが四個ずつ入っていた。選べる味は、チョコミント、ココア、ストロベリー、バニラの四種類だ。なんとうれしいことに、わたしたち三人の分も入っているというのだ。

「わたしのおごりだ」と紫帆さんはいった。

部員たちは自分の好みの味を選んでいった。わたしはチョコミント、イルイはストロベリー、英知はバニラ味を選んだ。空になった洋菓子箱は次々と片付けられていった。

「ああ、すまない」紫帆さんは、わたしに声をかけてきた。「悪いが、飲み物を運ぶのを手伝ってくれないか？　今、給湯室で百合が入れていると思うから」

「ええ、いいですよ」そう言ってわたしは、イルイと英知を連れて給湯室に向かった。

給湯室では、百合さんが、インスタントコーヒーの中身を紙コップに移していた。瓶の中のコーヒーは、底の方にちよつとあるだけで、もうほとんどなくなっていた。

テーブルの上にはもので溢れていた。演劇部のバスケットに、二つのお盆の上に乗せられた、紙コップの中のコーヒーと紅茶、脇にはアイスクリームの入っていた洋菓子箱が並べられていた。

「飲み物を運ぶように頼まれてきました」

百合さんは、ぱつと顔を上げていった。

「残りを淹れ終わるまで待つてくれないかしら。すぐ済むから」

しばらくして、二つの大きなお盆の上に計二十四個の紙コップが乗せられた。わたしと英知がお盆を持って、小ホールへと運んだ。

アイスクリームのときと同じく、運ばれた飲み物は、各々が選ん

で取っていった。わたしたちは昼食のときと同じく、三年生グループと一緒に賞味しようとした。だが、アイスはあれども姿は見えず、どうやら四人ともどこかに行っているらしい。わざわざ律儀に待つ必要もないと思ったので、わたしたちだけで食べたべ始めた。やがて、紫帆さんが現れ、恵美梨さんが現れ、百合さんもやってきた。そして、最後に勇氣さんも来て、三年生メンバー全員集合となった。これからまた、たわいもない話が始まるうとしたときだった。

この場の雰囲気は鋭く切り裂く、何かが砕け散る音が聞こえた。楽しい空気は一瞬にして塵と化した。

硬直状態からいち早く抜け出したのが英知だった。彼はすばやく立ち上がり、小ホールの入り口目指して駆け出した。わたしとイルイも、英知につられて立ち上がり、彼の後を追った。

「お前たちはここで待っている。動くなよ！」そう言っただけで紫帆さんも、わたしたちと一緒に行動した。

通路に出た英知は左右を見渡した。そして、右に曲がった。わたしでもそうするだろう。左側にはトイレしかない。英知は給湯室のドアノブをひねったが、ドアが開くことはなかった。むなしくガチャガチャという音が聞こえるだけだ。

「どうなってるんだ、こりゃあ」わたしは間抜けな声を出した。

「内側から鍵が掛かっているんだ」英知が冷静に答えた。

「ということは、誰かが鍵をかけたわけね」とイルイ。

動くなと言われたのに、給湯室の前まで来た部員たちが何人かいたどの顔にも、不安の色が濃く表れていた。

「表に出て、窓から入る」英知はそう言っただけで玄関に向かった。

「ああ、おい。わたしも行くよ」わたしは英知の背中を追いつつ、外には怪しい人影は見受けられなかった。わたしと英知は、給湯室の窓の前まで来た。

窓は閉まっていたが、鍵は掛かっていなかった。

窓を開けて中を覗くと、わたしはうめき声を上げた。給湯室の床

は混沌に支配されていた。ガラス片とインスタントコーヒーの中身が、部屋のあちこちに散らばっていた。さらにアイスクリームが入っていた洋菓子箱は床に落とされ、無残に踏みにじられていた。

土足厳禁だが、この状態を見て靴を脱ごうと思う奴はいないだろう。わたしと英知は窓を乗り越え、給湯室に上がり込んだ。靴底からガラス片の感触が伝わってくる。このガラス片はインスタントコーヒーの瓶の成れの果てであることは間違いない。わたしはテーブルの横に転がっている瓶を見た。下半分が割れて、二分の一ほどなくなっていた。わたしはドアの前まで行き、鍵を外し、ドアを開けた。外にいる人たちは、大半の人は中の様子を見てざわめくだけだったが、紫帆さんと、勇氣さんと、百合さん、それにイルイはのろのと給湯室に入ってきた。

紫帆さんはこの惨状を見て絶句した。部屋の中に入って、辺りを見回したが、さすがに言葉が出ないようだ。

百合さんは割られたインスタントコーヒーの瓶を拾い上げ、それが未知の物質であるかのようにまじまじとそれを眺めた。

「何か盗られたものはないか？」紫帆さんはようやく声を出した。

勇氣さんがバスケットの中を入念に調べた。

「サークル室の鍵も、他の備品も全部揃っているよ。盗まれたものは何もない」それから緊迫した表情でこう付け加えた。「ただ、これが入っていた」勇氣さんはバスケットの中から茶封筒を取り出した。

紫帆さんはひったくるようにしてそれを取り、茶封筒の中から一枚の紙を取り出した。わたしとイルイ、あと勇氣さんは彼女の後ろに回って、紙に書かれてある内容を確認した。その手紙には次のことが印字されていた。

わたしが口先だけの者ではないとわかっていただけたかな。いつまでも意地を張っていないで、早く九月の公演を中止にしろ。今回は物を壊しただけだが、次は部員の誰かが、けがをすることになる

かもしれないな。

紛れもない脅迫状だった。紫帆さんは肩をわなわなと震わせた。「くそお！」紫帆さんは怒号を発し、手にしていた脅迫状を、ものすごい勢いで真つ二つに破り裂いた。「くそつ、くそつ、くそお！」彼女は一声あげること、脅迫状を一破りしていったので、脅迫状はあつというまに、細かい紙くずになった。

しばらくの間、彼女は荒い息をしていたが、大きく息を吐いてこ
う言った。

「すまない、取り乱した」紫帆さんの声は震えていた。「とりあえず、ここを片付けよう、まず、それからだ」

わたしはあることに気がついた。瓶は、部員たち全員が、小ホルでアイスクリームを食べていたときに割れたではないか！ となると部員たちにはアリバイがある。では、給湯室に忍び込んで、部屋を荒らし、脅迫状を残した人物は外部の人間ということになる。これで今まで考えてきた、演劇部員の犯行説が崩れ去った。わたしたちは最初から間違った道を歩いていたのだ。わたしは大きく落胆した。これで振り出しに戻ったのだ。

一年生と二年生たちが、掃除用具入れからほうきと、ちりとりを持ってきて床を掃いた。

勇氣さんと恵美梨さんは、小さな声で何かをしゃべっていた。二人とも不安そうな顔をしている。

百合さんは、割れたインスタントコーヒーの瓶を、右手に持ったまま呆然とした様子で、立っていた。

そして、紫帆さんは壁にもたれかかり、視線を床に落としていた。だれもが不安と恐怖を抑えられずにいた。しかし、この大勢の中で、ただ一人だけマイナスオーラに包まれていない人間がいた。英知だ。

彼は、同一線上を五歩あるいては踵かかとを返す動作を繰り返していた。その場を右へ左へとうろつくと、実に落ち着きがない。しかし、彼

の瞳の奥には興奮の炎が燃えていた。

英知は急に立ち止まり、紫帆さんに近づいていった。

「ちよつと一緒に来てもらえますか？」英知は紫帆さんにいった。

二人は給湯室から出て行った。わたしはその様子が気になったので、二人について行くことにした。わたしたちは玄関まで来た。

そして、英知は紫帆さんに、ある質問をした。

「実は九月の公演に来られるOBの方で」

英知の質問に、紫帆さんは、『そうだ』と答えた。それを聞いた英知は深くうなずいた。

わたしは隣で英知の質問を聞いていたが、わたしは実に頓珍漢な質問だと思った。わたしはあきれてその場を去った。英知が頼りないときは、わたし自らが調べまわるまでだ。

わたしは小ホールに戻り、カップアイスを見て回った。手付かずのアイスがあれば、部員の誰かが、こっそり部屋を抜け出したという可能性がある。しかし、どのアイスクリームも半分くらい減っていた。これで全員にアリバイがあることになる。

片づけがすべて終わると、紫帆さんが部員全員を小ホールに集めて、三年を除いた部員たちを解散させた。

「三年生は残ってくれないか。今後のことで話し合いたいことがある。談話室に集まってくれ」どうやら今回のことが、かなりシヨックだったらしい。いつもの声の輝きを感じられなかった。

一年、二年部員たちは逃げるようにして帰っていった。

これで残ったのは、わたし、イルイ、英知、紫帆さん、百合さん、勇氣さん、恵美梨さんの七人だけになった。

「先に談話室で待ってて、わたし、ゴミ捨て場に、これを捨ててから行くよ」百合さんは右手に割れた瓶を入れた袋を持って、小ホールから出て行った。

「君たちはどうするんだ？」紫帆さんがわたしたちに訊ねた。

「もう少しここに残って、犯人につながる手がかりがないか調べて

見ますよ」わたしは精一杯の虚勢を張った。犯人が都合よく手がかりを残すのは小説の中でだけだ。

紫帆さんたちは、小ホールから消えた。小ホールは静まり変えた。つい三十分ほど前の和やかな雰囲気、遙か昔のことのように思える。

わたしはイルイと英知にいった。

「これから給湯室を調べよう。すっかり片付いてしまったが、みんなが見落としたものが何かあるかもしれない」

「すまない。おれはちよつと別のところを調べたいんだ」英知は急いでいった。

「え？ まあいいけど」

わたしがそういうと、英知はさつさと小ホールから出て行ってしまった。どこを調べるといふのだ？

わたしとイルイは給湯室に入り、徹底的に調べまわった。開けられるところはすべて開け放ち、床に這いつくばり、細心の注意を払った。だが、得られたものは食器棚の下にあった十円玉だけだった。わたしとイルイは肩を落とし、小ホールに戻った。

「何も見つからなかったね」イルイはしょんぼりしていった。

「まあ、あまり期待はしていなかったが、それでもがっかりするな」
「これからどうするの？」

「わたしたちは今まで、演劇部の誰かが脅迫状を出していたと考えていた。ところが今回は、演劇部全員が揃っているところに、犯人がやってきたわけだ。つまり、犯人は外部の人間だということがわかった。今回はこれが唯一の収穫だな。とりあえず、あとで紫帆さんに、最近、演劇部を退部した生徒がいなか聞いてみるよ」

わたしたちはしばらく黙っていたが、イルイが心配そうに話し出した。

「今回の脅迫状に、次はけが人がでるかもしれないって書かれていたよね」

「ああ」わたしはうなずいた。

「本当に、犯人は部員の誰かを襲うのかな？」

「そうは、なつてほしくない。だから、わたしたちが踏ん張る必要があるんだ」

しみみりした雰囲気の中、英知が小ホールへと戻ってきた。手には白いビニール袋をぶら下げていた。

「さっきの給湯室の、紫帆さんと勇氣さんの会話でピンときたよ」

英知は唐突に言い放った。「この脅迫状の事件には盗みが関係していたんだ」

わたしとイルイはぽかんとした。いったいこいつは何を言っているのだ？

「どういうことなんだよ？」

英知は自分の推理をわたしたちに話してくれた。犯人はだれかなぜ脅迫状を出したのか？

「いや、そんな……」わたしはしばらくの間、言葉が出なかった。

「でも、どうやってみんなと一緒にいるときに瓶を割ったの？」イルイは、真剣な表情で訊ねた。

「どうもあの人の行動には、引つかかるものがあつた。だからさつき調べに行ったら、おれの思ったとおりだったよ」

そして、英知はビニール袋の中身を見せてくれた。わたしとイルイは真相を知った。

わたしたちは談話室の前に来ていた。中では三年生の話し声が聞こえる。わたしはノックをした。話し声がやみ、「どうぞ」という声が聞こえてきた。

わたしたちは談話室へと足を踏み入れた。入り口から一番近い席には恵美梨さんが座っていた。その隣には勇氣さん、恵美梨さんの向かい側には百合さんがいて、百合さんの隣には、紫帆さんが座っていた。

「ああ、君たちか、ちょうどよかった」紫帆さんは覇気のない調子で言った。「君たちに話しておかなければならないことがあるんだ」

「何ですか？」

「今回の件を学校側に報告することにしたのよ。もう、わたしたちの手に負えることじゃなくなってきたわ」

もっともな話だ。しかし、英知の話を聞いたあとでは、その考えには賛成しかねた。

「その判断には同意できませんね」英知がはつきりいった。

三年生メンバーの間に動揺が走った。

「どうして？」紫帆さんは顔をしかめていった。「今回のことは、悪ふざけじゃ済まされないことよ。それに次は部員からけが人がでるかもしれない。それなのに、このまま黙っていると云うの？」

英知は首を振った。そして毅然とした態度でいった。

「今回の一連の出来事を、上の組織に話してはいけません。この場で決着をつけるべきです。これからどうするかは、おれの話聞いてからにしてください」

3 - 6 ・氷解

わたしは勇氣さんの隣の席に座り、イルイは紫帆さんの隣に座った。英知はわたしたち六人全員の顔が見えるように、入り口からずっと奥に進み、テーブルの横に立った。談話室には異様な緊張感が漂っていた。それは、ここにいる誰もが、今回の一連の騒動のクライマックスに近いことを、本能的に感じ取っている表れのように思えた。

「君の話し方だと、脅迫状を書いた犯人が、わかったかのように聞こえるんだが」勇氣さんは挑むようにいった。

「ええ、すべてお話しますよ。おれの推理を」

英知は静かに語りだした。

「おれは一通目の脅迫状が舞い込んだ時点では、これはただのいたずらだと考えていました。しかし、僅か二日後にまた新しい脅迫状が届けられたことで、犯人が本気、それもかなり必死になっていることを感じ取りました。二通目の脅迫状が届いたときになって、おれはようやくこの問題に真剣に取り組みだしたのです。」

まずおれは犯人の絞込みから始めました。ほんの数日前に決まったばかりの公演会場の名前が脅迫状に書かれていたり、給湯室という、使わない限り目の届かない場所に脅迫状が残こされていたことから、脅迫状を書いた人物は、演劇部員の中にと考えていました。そして、今もそう思っています」

「ちょっと待て」紫帆さんが鋭い口調で言った。「今日の出来事を忘れたのか？ 瓶が割れる音を聞いたとき、うちの部員たちは全員、小ホールでアイスクリームを食べていたじゃないか？」

「待つてください」英知は手をかざして、紫帆さんを制止した。「その説明も後で必ずします。お願いですから、おれの話は今を聞いてください」

紫帆さんは黙ったが、不満げな表情だった。英知は話を続けた。

「今回の出来事が演劇部員の仕業なら、その人物が、劇を中止にさせたい理由は、劇に何か不満を抱えているとは思えませんでしたが、しかし不満があるだけでわざわざ脅迫状を書く人間が、演劇部にいるでしょうか？ おれはいないと思っています。劇そのものにどうしても納得できない不満があるのなら練習をボイコットするか、サークル自体をやめればいい話です。だというのに、その人物は脅迫状を書くという行為に出た。おれは理由を考えましたよ。それでこういう答えを出したんです。脅迫状を送った人物は、サークルをやめることができない」英知はここで一瞬間をおいた。「もしくは、サークルをやめることが、その人の抱える問題の解決にならないということです」

英知はここで黙り、ある人物に視線を送った。わたしも英知の視線を追った。その人物は小さく縮こまり、かすかに身体を震わせ、うつむいた顔でテーブルの一点を黙って見ていた。

「俳優はサークルをやめることで、公演と縁を切ることができます。しかし、脚本家が今からサークルをやめても、書きあがった脚本はそのまま残って、劇で使われます」

音のないざわめきが、部屋の中を駆け巡った。

「水野百合さん。脅迫状を書いたのは、あなたですね」

百合さんの顔は、死刑宣告を受けたかのように、血の気が引いていた。

「なんで、わたしになるんですか？」百合さんは震える声でいった。「瓶が割れたとき、わたしは皆さんと一緒にいたじゃないですか」「そうだ！」獅子のように吼え、立ち上がった。「瓶が割れる音がしたとき、百合は私の隣にいたのだ。百合にできるはずがない。わたしの親友を貶めるような発言は許さんぞ！」

「あの瓶は！」英知は、紫帆さんの言葉の弾丸に負けないようにいった。「あの瓶は人の手で割られたものではありません。誰かが思い切り床に叩きつけても、瓶の破片が、部屋中に散らばるような割れ方にはなりません。勝手に割れるようになっていたんですよ！」

紫帆さんは口を開けたまま、己の時間を停止させた。この沈黙は、心にずっしりとのしかかるほど重かった。

「ドライアイスです。百合さんはドライアイスをインスタントコーヒーの瓶に入れて密封状態にしたのですよ。もう中のコーヒーはほとんどなかったので、何の問題もなく入れられたでしょう。ドライアイスが昇華を起こせば、気体の二酸化炭素になります。固体が気体になると、ご存知の通り、体積が膨張しますよね。だから時間が経ち、二酸化炭素が発生するにつれて、瓶の中の気圧もどんどん高まります。そして行き場をなくした二酸化炭素たちは、ついに瓶を粉々に突き破ったわけです。これが瓶を砕いた正体です」

英知は急転直下のたたみかけを放った。

「おそらくこういう流れだったでしょう。百合さんはおれたちが去ったあと、ドアを閉めて鍵を掛け、隠し持っていた脅迫状をバスケットの中に入れました。次に、ドライアイスを瓶の中に入れ、容器を密閉したのですよ。そして、百合さんは瓶を床に置いたら窓から外へ出て、玄関まで回って小ホールに戻ってきた。

ドアに鍵を掛けた理由は、おそらく、一連の作業をしている間に誰かが入ってきては困るから、それと、すべての準備が終わって百合さん自身が給湯室を去った後で、誰かが給湯室に入るのを防ぐためだったでしょう。誰かが給湯室にいるときに、瓶が破裂してすれば、その人がけがをする可能性がありますからね」

英知のこの推理を、紫帆さんは全否定した。

「ドライアイスだと、何を馬鹿なことを！ 百合は、朝からわたしたちと一緒にだったんだぞ。その間どこにドライアイスを保存していたというのだ？ ここには冷凍庫もないし、常温で保存しておけば、昼までには無くなってしまふ。どう考えても、朝からあの時間までにドライアイスを持たせる方法なんて……あつ！」

紫帆さんは気づいた。気が、ついてしまった。

「アイスクリーム……」

英知は重々しくうなずいた。

「そうです。アイスクリームを持ち帰るときは、保存のため、ドライアイスが入られます。アイスクリームを入れた箱は六つありました。つまり、六つのドライアイスの欠片が手に入ったわけです。そして、今日のおやつにアイスクリームをリクエストしたのは百合さんなんですよ」

百合さんは何も言わなかった。ただ顔を真っ白にして、ただ机の上に視線を落としているだけだった。

「アイスクリームが入っていた箱が床に落とされて、ぐちゃぐちゃにされていたのは、ドライアイスが床に転がっていても、不自然に見えないようにするためだったのでしょうか」

「でもね」今度は恵美梨さんが口を挟んだ。「それは全部推論ですよ。それを披露してくれたところで、外から侵入した人間が、部屋を荒らした可能性はなくならないよ。瓶の破片の飛び散り具合だけじゃあ、わたしは納得しないね。力の強い人間が、思い切り床に向かってぶん投げたかもしれないよ」

「では」英知の目が静かに光った。「これから、わたしが先ほど述べた方法が実際に使われたという証拠を見せましょう」

そう言って、英知は持ってきた白いビニール袋の中から、あの割れたインスタントコーヒーの瓶を取り出した。

それを見た百合さんの目には涙が溢れていた。この時点で決着はすでについていた。

「これは百合さんが、捨てに行つたインスタントコーヒーの瓶です。おれがごみ捨て場から、こっそりと回収しておきました」

瓶は下半分が割れていたが、上半分はもとのままだった。蓋もついたままになっていた。英知は勇氣さんに砕けた瓶を渡した。

「勇氣さん、その瓶の蓋を開けてみてください」

勇氣さんは、なぜそんなことをしなければならないのか、と首をひねったが、瓶の蓋をひねることはできなかった。

「どうなっているんだこれは？ ぜんぜん回らないぞ。びくともしない」

「おそらく、瓶の気密性を高めるために瞬間接着剤で固定したのでしょう。しかし逆に、それが命取りでした。これが決定的な証拠になってしまったのですから」

「どうしてわかったんだ？　蓋がこうなっていることが」勇氣さんは訊ねた。

「真理の問題ですよ。おれと武は、給湯室に上がりこんでドアを開けました。そのとき中に入ってきたのは、イルイ、紫帆さん、勇氣さん、百合さんの四人だけでした。」

そのときの百合さんの行動は彼女の心理状態をよく表していました。百合さんは部屋に入ってから、最初に砕けた瓶を拾い上げて、ずっと自分で持っていました。一見すると自然な行為にも見えますが、紫帆さんが脅迫状を取り出したときも、瓶を大事そうに持っていて、その場に立っていたんですよ。武、イルイ、勇氣さんの三人は、すぐに紫帆さんのところに駆け寄ったというのにね。それを書いた本人とはいえ、普通は脅迫状に興味を持つくらいはするはずですよ。その素振りすら見せないほど、百合さんの意識は瓶に向けられていたんですよ。

だからおれは思ったのですよ、百合さんは割れた瓶を他人に触らせたくないのではないかと、瓶には何か細工が仕掛けてあるのではないかとね。

さらに、百合さんは片づけが終わったあと、三年生の集まりよりも、瓶をごみ捨て場に持っていくことを優先しました。ごみ捨てなんて、話し合いの後で十分だというのに、あのときの彼女の優先順位は明らかにおかしかった。これも、細工を施した瓶をなるべく遠ざけたい、という心理が働いた結果ですよ」

おやつにリクエストしたアイスクリーム、接着された瓶の蓋、この二つの事実の欠片が、ぴつたりと組み合わせられて破壊不可能な理論の壁を構成していた。百合さんにはもう逃げ場がなかった。推理の扉は今閉じられた。

テーブルの端からすすり泣く声が聞こえてきた。百合さんは顔を

赤らめ、涙と鼻水で顔をぐしょぐしょに汚していた。

紫帆さんは絶望的な表情で、泣きじゃくる百合さんを見つめていた。

「どうして、なんでこんなことを」紫帆さんのかすれた声が響いて消えた。

「百合さん、わたしは、あなたがこのような行動に及んだ理由を、説明できると思います。わたしが代わりに説明しましょうか？ それとも自分の口から皆さんに話しますか？」

百合さんは、涙を流し、乱れた呼吸でいった。

「きや、脚本……盗作したの」

百合さんの告白に、他の三年生たちはショックを受けた。特に、紫帆さんの受けた衝撃は大きかったらしく、彼女は目を見開いてから、顔をしかめ、歯をかみ締めてうつむいた。

「こ、小塚さんがあ……昔い、しゅ趣味で、かか、書いた、脚本があ、あったの。部の、ほ、他の人たちにはあ、見せて、なくて、わたしにだけ、見せて、くれた。ここ、小塚さ、さんは、部、去るときに、そ、その脚本、きき、記念んにい、とい、言って……わ、わたしに、く、くれた、の。その脚、本の、こ、後半を、ぜ、ぜんぶ、づがった……」

「なんで、だよ」勇氣さんは苦しげに声を上げた。

「わ、わたし、み、みんなにい、すすす、すごいと思われる……は、話をか、かきたかった。そ、それで、い、いっしょう懸命、か、考えただけ、けど、う、うまく、か、かけ、なかった。そ、それで、悩んでいる、うちに、ぜんぜん、も、物語が、な、なにも書けなくなつて……し、締め切りもお、近づいて、わたし、く、苦しくて、それで、こ、小塚さんの、脚本を、使ったの……」

さ、最初は、わ、悪いとは、お、思ってた、かった。みんなも、褒めて、ぐれでうれし、かった。でも、でもお……し、紫帆から、こ、小塚さんが、公演、に来るかも、しれない、ってきき、聞かされた、とき、は、はじめで、こわく、なった。小塚、さんが、げ、

劇をみたら、じ、自分の、話が、こ、後半だけ使われて、いるって気づく。わたし、こ、小塚さんに、失望されるのが、こ、怖かった。あれだけ、いろいろ、やさしく、教えてもらって、こんな、ぱ、ぱくりの話しか作れない、わ、わたしは、き、き、きつと、軽蔑、される。こ、小塚さ、さんに、そう、思われたく、なかった。だからあ、公演を、中止にい……」

紫帆さんが、椅子を倒すほど激しい勢いで立ち上がった。そして、紫帆さんは、百合さんの頬を平手で打った。

あまりの突然のことに、わたし、イルイ、英知と、勇氣さん、恵美梨さん、そして、叩かれた百合さんでさえ、啞然として紫帆さんを見た。

怒るのも無理はない、とわたしは思った。百合さんのせいでこの数日間、演劇部は不安と混乱の中をさまようことになったのだからだから、彼女の頬をつたう涙を見たときは、本当に驚いた。

「なぜだ」紫帆さんの声は震えていた。そこに怒りはなかった。聞くものの胸を締め上げるような悲しみが、彼女の声に溢れていた。「なぜ、なぜお前は、一人で何でもかんでも背負い込もうとするんだ？ どうして一人で悩むんだ？ どうしてわたしに相談してくれなかったんだ？ 百合にとって、わたしはそれほど頼りない親友なのか？」

話が書けなければ、わたしに相談してくれればよかったんだ。そうすれば、一緒に悩んで、アイデアも出したよ。勇氣だって、恵美梨だって、いるじゃないか。先輩たちの背中に追いつく必要はなかったんだ。百合は、百合の話を書いてくれれば、それでよかったんだ。小塚さんが来るかもしれないと、わかったときも、どうして誰にも相談しなかったんだ。一人で、一人で苦しいときは、た、頼って、くれよ……わたしたち、友達だろ」

紫帆さんは、母親のように百合さんをぎゅっと抱きしめた。彼女の瞳からは、次々と涙があふれ出た。

勇氣さんと恵美梨さんも、互いに手をつなぎ、二人の傍に近寄っ

た。

「う、ごめんな、ざい……ごめんっ、な、さいい！」

百合さんは泣いた。子供のように、声を上げて泣いた。

わたしたちは静かに立ち上がり、言葉を交わすことなく、談話室から出て行った。

わたしたち、つまり七人全員が多目的ホールを出たのは、日が西に沈みかけていたときだった、空は赤く燃え、太陽はまわりの風景を橙色に染めていた。

紫帆さんはわたしたちにお礼を言っ、頭を下げた。百合さんは謝罪の言葉と共に、頭を深々と下げた。

そんな彼女を見て、わたしは頭を上げてくださいと頼んだ。この件に首を突っ込んだのは、こちら側だし、わたしたちがこうむった迷惑は特にないので、彼女に謝罪される道理はなかった。

四人はあのあと話し合っ、結局、脚本のことは白紙に戻して、これから新しい脚本を書くという結論に至った。

わたしが、時間は大丈夫なのかと言ったら、紫帆さんは「時間は気合で補う」と自信満々に答えた。

演劇部の皆さんと別れる際に、英知が百合さんの耳元で何かをささやいた。わたしは、特に英知が何を言ったのかを気にすることはなかったが、その答えは、帰り道に自然とわかった。

三人で並んで帰っているときに、わたしは二人にいった。

「今回の話はわたしたちの胸の中にしまっておこう。彼女の苦悩を、我々の低俗小説のネタには使えないよ」

「うん、そうだね。このことを広めちゃ悪いもんね」イルイは、うんうんとうなずいた。

イルイの言葉を聞いて、英知は静かな笑みを浮かべながらいった。「わたしたちが黙っていても、このことは広がるかもしれないよ。フィクションとして」

「どういうことだ？」わたしは不思議に思っ、て訊いた。

「おれはさつき、百合さんにこう言ったんだよ」英知はゆっくりと語りだした。「これから言うことは真剣に受け止めなくてもいい。どう思ふかは、あなた次第です。」

いい話の作り手は、すべてのことを自分の頭の中で考えることは少ない。楽しかったことであれ、つまらなかったことであれ、自分の経験をさらけ出して、物語りに投影させるものだ、とね」

それから三週間後、演劇部の新しい台本が完成した。脅迫状事件で演劇部と縁ができたわたしたちの元に、紫帆さんと百合さんがその台本をわざわざ持って来てくれた。

そのタイトルは『脚本家の苦悩』となっていた。

わたしたちは彼女たちの前で、それを読ませてもらった。

そして、これを読んだ英知は、こう言って頭を下げた。

「お見事です」

百合さんはわたしたちに初めて、その笑顔を見せた。

4 - 1 ・着信無視

ゴールデンウィークが明けてから二日後の昼、わたしは学食の前に来ていた。

学食のメニュー板の前に、懐かしい後ろ姿があった。

「広道じゃないか」わたしは、目の前の背中に声をかけた。

男は振り返った。男の名は藤堂広道^{とうどうひろみち}、わたしと同じ高校の出身者だ。彼は非常に大柄で、身長は百八十二センチもある。それに、体の一つ一つのパーツが、がっしりとしているため、岩のような安定感を、見るものに感じさせるのだ。

わたしは、大学に入学したての頃に、広道を推理小説同好会、通称《すいどう会》に誘ったことがあったのだが、柔道部に入るからといって、わたしの申し出を断っていた。わたしは、そのことを残念には思ったが、広道に悪感情を抱くことはなかった。

「武か。久しぶりだな」広道はにいつ、と不敵な笑顔を作り、野太い声で答えた。

わたしたちは一緒に昼食を食べることにした。

昼休みということもあって、食堂内は人ごみでごった返していた。人の壁にさえぎられて、わたしはカウンターの前まで進み出ることが難しかった。しかし、広道は南極の氷をかち割りながら進む、砕氷船のごとく人ごみを掻き分け、ずんずんと進んで行った。わたしは『これはしめた』と思い、彼の後ろに続いた。

広道はカツカレーの特盛、わたしはたぬきそばの大盛を注文した。お代を払った後、わたしたちはトレイを持って、うろうろしながら空いている席を探した。窓際のほうに二つの席が空いているテーブルを見つけた。残りの四席は見知らぬ女性たちが占領していた。そのなかで、ボブカットの女性が、誰かに向かって軽く手を振っているようだった。

その誰かとは、広道だった。わたしたちのそのテーブルに近づく

と、広道とその女性は互いに「よう」と挨拶を交わし、広道はその女性の隣の席に座った。

「お前の知り合いか？」わたしは席につきながら訊ねた。

「ねえちゃんだよ」広道はそっけなく答えた。

わたしは、箸をどんぶりに突っ込んだまま固まった。そして、広道と、彼の隣の女性をじつくりと見比べた。

広道の姉だと？ わたしは初めて聞いた。彼に姉がいることは知らなかったし、今こうして聞かされた後でも信じられない。

この姉弟きょうだい外見的特徴の共通点が一つもない。広道の姉さんは、小柄で、丸顔で、繊細な体の線をしている。水と炎というか、陰と陽というか、この二人はまったく真逆の存在だ。いい例えを思いついた。ウサギとゾウガメみたいだ。

「異母姉弟か？」わたしはのろのろと訊ねた。

「親は同じだ」広道が、おまえは何を言っているのだ、という顔をしながらいった。

わたしは人類の不思議を目の当たりにした。

「ヒロ、この人だれ？」藤堂姉は、ぱっちり二重の瞳をわたしに向けてながらいった。

「高校のときからの友人だよ」

「ふうん。沙姫さきよ」

「はい？」わたしは、そばを口に含みながら顔を上げた。サキ？

いったい彼女は何をいったのか、と一瞬考えて、彼女は自己紹介をしたのだと気がついた。

「永久武です」わたしは自己紹介を返した。

「あんた目つき悪いわね」これは初対面に向かって言うことではないだろ。

「よく言われますよ」わたしは反撃の機会を待ちつつ、そばをすすった。

そのとき、わたしの隣の女性から、くすくすと笑う声が聞こえてきた。

「ごめんね。沙姫はちょっと無神経なところがあるから」

そうわたしに話しかけてきた女性は、髪をブロンドに染め、ウェーブをかけている。メイクも手が込んでいるようで、たれ目の上にもつさりするほどのマスカラをつけているし、服装も男を誘うような、肌の露出が高い格好をしている。いわゆるギャルだ。

「どちらさんですか？」

「小林杏香よ」「こばやしきょうか」 彼女は誘うような視線をわたしに投げかけながらいった。

「それでこっちが」彼女は自分の隣の席の女性を指差した。「深瀬玲」れいそして、彼女は次に、斜め前に座っている女性の顔見ながらいった。「そっちにいるのが、澤田裕子よ」さわだゆうこ

わたしがわざわざ頼んでもいないのに、杏香さんはほかの二人の紹介をしてくれた。

深瀬さんは、髪の毛を頭のでつぺんで団子状にまとめていた。まるでウィリアム・テルに団子そしを射抜いてくれといわんばかりの髪型だ。

澤田さんは、髪を短くしているためボーイッシュな雰囲気があり、なんとなく冷めた表情の持ち主だ。

「皆さんは同じ学科なんですか？」

「いえ、違うわ。同じサークルの集まりなのよ」

「へえ、どこのサークルですか」

「ノベルス同好会」

ノベルス同好会。そこは、わたしにとってはあまり思い出のないサークルだ。わたしは大学に入学したての頃に、一度だけノベルス同好会を訪れたことがある。その時、わたしが受けた印象は、推理小説のすの字も知らない、読み手のレベルの低いサークルとあきれたものだ。

「武君はどこのサークル？」杏香さんは下の名前でわたしを呼んだ。

「推理小説同好会です」

「ああ、あの新しくできたサークルね」

「お気に入りの推理小説はありますか？」

「うーん、米澤穂信さんは結構読んでるかな」

期待を大きく超える回答が帰ってきたので、わたしはうれしくなった。どうやらノベルス研究会にも、そこそのレベルに達している部員もいるようだ。

「携帯がない！」

突然の驚愕を含む声に、わたしは反射的に声の主に視線を送った。そこには鞆の中を、必死煮の形相であさる沙姫さんの姿があった。

「くそっ、どういうことだよ」沙姫さんは悪態をついた。

「なかなか上品な言葉遣いですね」わたしは杏香さんの耳元でいった。

「彼女、最近機嫌が悪くてね。もともと悪い言葉遣いに拍車がかかっているのよ」

「何かあったのですか？」

「彼氏と喧嘩したらしいのよ。大喧嘩」

「なんだ、ただの痴話喧嘩ですか」

沙姫さんの鋭い声が飛んできた。

「そこ、聞こえてるわよ」

わたしは首をすくめた。

「それとあなた」そういつて沙姫さんはわたしを指差す。「ただの痴話喧嘩とか言っているけど、そんな軽いものじゃないのよ」

彼女はぴりぴりした口調で続けた。

「彼、浮気をしたのかもしれないのよ」

「浮気ですか。それは大変だ」わたしはここまで言葉を出したが、ふと、彼女の言い方が胸に引っかった。「したのかもしれない？ どうして推量形なんですか？ 現場を目撃したのではないのですか？」

「わたしが見るわけないでしょ。そのとき、彼は兵庫県にいたんだから」

彼女がこういったことで、わたしはますます話をつかめなくなっ

た。

「どういうことか、初めから説明してもらえませんか？ 断片的に聞いても、どうも話がわからない」

沙姫さんはやや前のめりになって話し始めた。

「細木君、つまりわたしの彼ね。彼はサッカー部に所属しているのよ」

わたしはうんうんとうなずいた。

「それで、サッカー部がゴールデンウィークの一日目と二日目に、兵庫県のチームと試合をしに行ったのよ。細木君は兵庫県が地元だから、試合以降の日は、実家に帰省したの。だから彼はゴールデンウィーク中、ずっと兵庫県にいたわけなのね」ここで彼女の語気が強まった。「問題が起こったのは、ゴールデンウィーク前夜からよ」「前夜から？」

「わたしがメールを送っても無視、電話をかけても無視。ゴールデンウィーク中も、ずっとそうだったの」

「そいつはひどい」わたしは同情をこめていった。「それで彼のほうからも連絡はまったくなかったわけなんですか？」

「彼は普段からわたしに連絡することはないわ。いつもわたしから送って彼が返す、というやり取りをしているのよ。付き合い始めてから、彼がわたしのメールや電話を無視することは一度もなかったのに……」

「それが、兵庫に行く前夜から急に無視し始めた、か」

「信じられないでしょ」

「ところで、彼の無視だけで、どうして浮気だと推測したんですか？」

「わからないの？ 彼の地元なのよ。高校時代の友達も何人かはいるでしょうね」

「なるほど、彼が高校時代の付き合い合っていた娘と、兵庫で夜のゴールを決めてきたと思っっているわけだ」

わたしはほんの軽いジョークのつもりでこういったのだが、次の

瞬間、沙姫さんの小さな体が思い切り伸びて、彼女の右手がテーブルの上にあつたわたしの左手の小指を、がしつと掴んだ。

わたしは、自分の背中につめたい生物が這っているような感覚に襲われた。圧倒的な恐怖がわたしの中に湧いてきた。

「折るわよ」沙姫さんは静かに言った。

「すいませんでした」わたしは瞬時に謝った。

沙姫さんの手がわたしの小指からゆっくりと離れた。わたしは自分の左手を目の前にかざし、まじまじと小指を眺めた。

「それで、帰ってきた彼はなんといったのですか？」わたしは両手を机の下に引っ込めて訊ねた。

「昨日、直接会って訊いてみたわ。そうしたら彼、『そんなことは知らない。メールも電話も受け取っていない』っていったのよ」沙姫さんは憤然としながら答えた。

「わたしが問い詰めても、知らないの一点張りよ。絶対何か隠しているんじゃないわ」

「何かの手違いがあつて、メールも電話も通じなかったということではないのですか？」

「見てもらえればわかるけど、メールも電話もちゃんと履歴が残っているのよ。ちゃんと彼の携帯に届いているわ」

彼女は鞆の中に手をつっ込んだが、すぐに舌打ちをした。どうやら携帯をなくしていることを失念して、携帯を探していたようだ。

「とにかくメールも送れているし、電話も通じていたはずよ」沙姫さんはきっぱりといった。

「……ということが昼間にあつたんだ」

わたしはいつものサークル室で、食堂であつた出来事を簡潔にまとめてイルイと英知に話した。

「間違いなく浮気ね」イルイは自信満々にいった。「メールを無視するなんて、怪しいにもほどがあるわ。きっと夜のゴールを決めてきたのね」

イルイの知能は、わたしと同程度だということが判明した。

「わたしは腑に落ちないな」この話には理論的に説明できない部分があった。「仮に、細木さんが兵庫で昔の彼女と会っていたとしても、どうして細木さんは沙姫さんからの連絡をすべて無視したんだ？ わざわざ自分の立場を悪くするようなものじゃないか。メールなんて女性と会っていない時間に返せばいいだろ。四六時中、ほかの女と一緒にいたら話は別だけど」

わたしはここである事実を考慮していないことに気がついた。

「いや、違うな。細木さんは、ほかの女と四六時中いなかった。彼からの返信が途絶えたのはゴールデンウィーク前夜からだ。ゴールデンウィークの一日目と二日目はサッカーの試合で女性と遊んでいる暇はなかったはずだ。だから、沙姫さんからの連絡を無視する理由がない」

「じゃあ、ほかの理由があつてメールを返信できなかったってこと？ 携帯電話を下宿先に忘れて兵庫に行ったとか」

「細木さんは、沙姫さんにメールや電話を返さなかったことについて、『知らない』と言っているんだ。携帯を忘れて、メールが返信できなかったら、沙姫さんに事情を説明するだろ。間違つても、『知らない』というはずがない」

「うーん……じゃあ、別のやましい理由があつたとか」

「例えば？」わたしは、どうせイルイは答えられないだろうと思いつながら訊いた。

「何か通信障害のようなものが起きたとか」

「それはやましい理由じゃなくて技術的な理由だろ」わたしはあきれた。「英知はどうおもうよ？」

英知はしばらく考え込んでから、よどみなくいった。

「その話だけではなんともいえないね。ただこの話は別の視点から見ることができる」

「別の視点？」イルイは首をかしげた。

「藤堂沙姫さんが嘘をついているということさ。つまり彼女は、細

木さんにメールや電話を一切送らなかった。それでいて、メールや電話を送りまくったのに、どうして返信してくれなかったんだと、細木さんに詰め寄った。こういう見方もある」

「ええー？」わたしとイルイは二人そろって同じように驚いた。

「おいおい、それはいくらなんでもありそうにないぞ。その仮定は空振りだよ」わたしは英知の意見を真っ向から否定した。「だいたい、沙姫さんがなんでそんな嘘をつくんだよ？」

「それは今の手持ちの情報じゃわからない。しかも、沙姫さんの話が正しいことなのか、間違っていることなのかさえわからないんだ。メールと電話のやりとりは、沙姫さんと細木さんの二人の間だけの出来事なんだ。単純だからこそ、難しいといったほうがいいのか。一＋一がなぜ二になるのかを説明するようにね。」

どちらかが嘘をついていても、それを証明するのは極めて難しいことだよ。最終的にはただの水掛け論になってしまう」

サークル室の中はしばらくの間、沈黙が保たれたが、一人だけあきらかにうずうずしている人物がいる。

「イルイ、何を考えているんだ？」わたしはいった。

「え？ 何って、それは、気になるなあって思っているだけだよ」イルイはぎくしゃくしたしゃべりで答えた。

「そんな綿菓子のように軽い考えじゃないだろ。細木さんの着信無視の真相を知りたくて知りたくて、両手がぶるぶる震えるほどなんだろ」

「そんな禁断症状が出るほどじゃないけど、興味をそえられる話だよな。あと、これ小説のネタに使えないかな？ 着信無視の謎ってタイトルで」イルイのおなじみの知りたい病が再発したようだ。

「まあ、少しくらい深入りしてもかまわないか」わたしはそう言いながら立ち上がった。

「あれ？ 今回は積極的だね」

「友人の姉がわけのわからんことに巻き込まれているんだ。手助けくらいしてもいいかなと思ってな」わたしはドアに向かって歩を進

めた。「とりあえず沙姫さんから、もう一度話を訊こう。ノベルス研究会にいいのだから」

4 - 2 ・履歴あり

ノベルス研究会のサークル室は一年前と変わらなかった。サークル室には畳が敷かれて、部屋の真ん中あたりにはちゃぶ台が置かれていた。部員たちは靴を脱いで畳の上に座り込んでいる。奥の壁際には、本棚が二つ並べられており、その中にはさまざまなライトノベルが詰まっていた。

部室にはちょうど都合のいいことに、沙姫さんと、団子頭の深瀬さんだけだった。沙姫さんはちゃぶ台の前に座り、長つたらしいタイトルの小説を読んでいた。深瀬さんは赤色の携帯電話を取り出して、おそらく、誰かに向けてメールを打っているところであった。わたしたちがドアをノックして、部屋に入ると二人は驚いた猫のような表情を見せた。

「お邪魔しますよ」わたしはいった。

「昼間の、藤堂の友達か。杏香はまだ来てないよ」沙姫さんの言っていることは支離滅裂に近かった。

「ちよつと待つてくださいよ」わたしは慌てていった。「用件も何も言っていないというのに、どうしていきなり小林さんの名前が出てくるんですか？」

沙姫さんは意外だ、という顔をした。

「杏香に会いに来たんじゃないの？ 昼間に君と杏香が親しく話していたので、デートのお誘いに来たのかと思ったわ」

「どうやらこの人は話を飛躍させて考える癖があるようだ。」

「違いますよ。だいたいデートに誘いに来たのなら、この二人はなんですか？」わたしはイルイと英知を指差した。

「一人じゃ不安だから、ついて来てもらったのでしょ？」

「ガキか！ デート誘いくらい一人でできますよ」

深瀬さんがくすくすと、口に手を当てて笑った。

「そりゃ失礼、それで実際のところ、何の用事でここに来たの？」

「もう一度、昼間の話を聞かせてほしいのですよ。もつと言えば、さらに詳細に説明してほしいのです」

沙姫さんは臆面もなく嫌な顔をした。

「なんで」沙姫さんはねつとりとした口調でいった。「なんでそんなことしなきゃいけないの？」

「細木さんが、連絡を無視し続けた理由がわかるかもしれないからですよ」

「それは昼間に、浮気のせいだっていったでしょ」

「そう深く考えもせずに決め付けるのは、良くありませんよ」英知が諭すようにいった。

沙姫さんは初めて英知の顔を見た。

「ところでほかの二人はだれ？」一分前に訊いているべき質問だ。「推理小説研究会の鳥井瑠依です」

「同じく、長浜英知」

沙姫さんは呆れ顔で言った。

「同じサークルの面々が三人そろって、人の不幸に首を突っ込みたがっているわけ？」

「不幸かどうかは置いておいて、沙姫さんと細木さんの関係に興味があるのは確かです」英知はすらすらと答えた。

「とんだ厚顔無恥ね」沙姫さんは鼻をふん、と鳴らした。

「しかし、沙姫さん。もし細木さんが、休みの間にあなたの連絡をすべて無視していた理由が、浮気以外にあったかもしれないんですよ？」罵声を浴びせられても、英知の振る舞いは紳士的だった。

「何よ、浮気以外の理由って？」

「それを今から調べるのです」

沙姫さんはたっぷり三分ほど考えたが、最後は仕方なく認めるような声で言った。

「わかったわよ。でもあんまりわたしを不愉快にさせないようにしてよね」

「最大限の努力はしますよ」

これが始まりの合図だった。英知はまず、細木さんが最初に連絡を無視したときの話から訊き始めた。

「細木さんが沙姫さんの連絡を無視し始めたのは、いつからですか？」

「ゴールデンウィークの前の晩よ。つまり四月三十日の夜」

「そのときは、メールを送ったのですか？ 電話をかけたのですか？ あとできれば、詳しい時間も教えていただけます？」

「メールを送ったのよ。それで時間は……」沙姫さんは鞆から、携帯ストラップがじゃらじゃらついた、薄いピンクの携帯電話を取り出した。そして履歴を調べた。「時間は……二十時二十八分」

「その前のメールはいつ送りました？」

「四月二十九日の、二十二時三十七分」

「そのメールにはちゃんと返信が来たのですか？」

「ううん、この前にいろいろメールでやり取りしてたの。わたしが送ったのは、やり取りの最後のメールよ。だからそれでメールはおしまい」

「まあ、結局のところ、前の晩はちゃんと返信があったわけだ」

「ええ、そうよ」

「三十日の昼間は、細木さんにメールも電話もしなかったわけですね」

「平日の昼は電話もメールもしない。休日なら、昼間でもメールを送ることがあるけど」

「ふむ、わかりました。それで、三十日の夜は一通しかメールを送らなかったのですか？」

「いえ、そのあともう一通だけ送ったわ。それでも反応がなかったから、メールに気づいてないんだろ？ と思って寝たわ。次の朝に返信があると思ってたけど、結局なかった」

「ゴールデンウィーク中は、どのくらい細木さんにメールを送ったり、電話をかけたりました？」

沙姫さんは履歴を調べながらいった。

「五月一日は、メール五通、電話一回、五月二日はメール八通、電話五回、五月三日はメール一通、五月四日もメール一通だけ、五月五日は、もう怒り心頭で送らなかつたわ」

「ゴールデンウィークが明けてから、一度でも細木さんにメールや電話を入れようと思いましたか？」

「ずつと無視されてきたのよ。それなのに、送るわけないじゃん。昨日直接会って問い詰めたけど、五月四日を最後に、メールも電話もしてないわ」

英知は大きく一回うなずいた。

「わかりました。今日はこれで十分です」

「もういいの？」沙姫さんは拍子抜けした顔でいった。どうやら、もつと枝葉の部分まで詳しく訊かれると思ったのだろう。

「あと二つだけ、これは質問じゃなくて、お願いになるんですが」「何かしら？」

「細木さんに、今メール送ってもらえませんか？」

英知のなんとも意味不明なお願いに、沙姫さんは戸惑った？

「なんでよ」

「わけは後で説明します」

沙姫さんはため息をついて、携帯を目の前にかざした。

「なんて内容を送ればいいのよ？」

「できれば、謝罪を要求するような内容にしてくれればいいですね」「なんで？」

「これまでの経緯に沿った自然なメールのほうで、相手に余計な邪推をされなくていいと思ったからです」

「じゃあ、『土下座して謝れば許してやる』は？」

「オーケーです」

沙姫さんは、その内容のメールを打って、細木さんに送信した。

わたしは、英知の考えがわからなかった。沙姫さんがこのメールを細木さんに送ったことで、二人の仲はますます険悪なものになるだろうと感じた。

「送ったわよ。それでもう一つのお願いは？」

「メールの送信履歴と、電話の発信履歴を見せてください」

「なんでよ？」沙姫さんの声には、不信の響きがこもっていた。

「沙姫さんが本当に、細木さんに連絡を入れていたのかを確かめたいのですよ」

「あら？ わたしの話を疑っているわけ？ はっきり言ってそれは余計な疑いね」

そう言って、沙姫さんは自分の携帯を英知に差し出した。

わたしたちは彼女の携帯のメール送信履歴を見た。そこには、細木健太という文字がたくさん並んでいた。日付もチェックしたが、確かに、彼女はゴールデンウィーク中に、細木さんに連絡を入れまくったようだ。

これで沙姫さんが嘘をついている可能性は消えた。

「ありがとうございました」英知はそういつて、携帯を沙姫さんに返した。

「わかってもらえたかしら？」沙姫さんは勝ち誇った顔でいった。

「ええ、失礼しました」

沙姫さんは満面の笑みを浮かべていた。

「送信履歴か。昨日、彼にもこれを見せておけばよかったんだ。怒り心頭でそこまで考えが回らなかったわ。次にあったときには、動かぬ証拠として突きつけてやる」

もうここで確かめることはなかった。

最後にわたしは、サークル室から出る前に自主的に発言した。

「携帯電話、見つかったんですね」

沙姫さんは、携帯電話を鞆の中にしまいながら言った。

「うん。大学の遺失物保管係から、杏香の携帯に電話があったのよ。『今こちらからかけている携帯電話が落し物として届けられたんですけど、持ち主の方とお知り合いですか？』という具合にね。はっきりと覚えてはいないけど、どこかに置き忘れてたのよ」

わたしと、イルイと、英知はノベルス同好会のサークル室から退

出した。

「さっきのメールに何か意味はあるの？」イルイが英知に訊いた。

「意味があるかどうかはこれから確かめにいく」

「確かめに行くって、どういうこと？」

「これからサッカー部に行つて、細木さんに会つんだよ」

サッカー部は大学の運動場で片づけをしていた。どうやら今日の練習は終わりらしい。あと三十分遅かったら、今日中に細木さんと会うことはできなかっただろう。

わたしたちは近くのサッカー部員に、細木さんが今日来ているかと訊ねた。その部員の人は、細木さんと呼んでしてくれた。

細木さんは小麦色に焼けた肌で、スポーツマンらしい短く刈り上げた髪をしていた。そして、ユニホームから伸びる手足にはたくましい筋肉がついていた。

「おれに何か用？」

わたしたちはまず初めに自己紹介をした。

「ちよつと訊きたいことがあるだけです」英知はいった。「立ち話もなんですし、着替えが終わったら、うちのサークル室まで行きませんか？」

「何の話が訊きたいんだ？」

「それはサークル室で伺いますよ」

細木さんは眉をひそめたが、「わかった」といって、更衣室に消えていった。十分後、私服に着替えた細木さんを連れて、わたしたちはサークル室に向かった。

「それで何が訊きたいんだ？ 長い話じゃないよな？」細木さんはサークル室に到着して、椅子に座るなりこういった。

英知は単刀直入に訊いた。

「ゴールデンウィーク中に、藤堂沙姫さんからメールを受け取りましたか？」

細木さんはすぐにいやな顔をした。

「なんでその話を知っている？」

「本人が愚痴をこぼしていましたよ」わたしはいった。

「愚痴だと？ ふざけるな。愚痴を言いたいのはおれの方だ」細木さんは荒々しい口調でいった。

「それはなぜですか？」英知はすかさず訊ねた。

「昨日、あいつが……つまり沙姫がおれのところにやってきて、何でメールとか無視するのかといきなりなじり始めたんだ。すごい剣幕だったし、最初は、あいつの言っていることがさっぱりわからなかった。おれは、お前からのメールも電話ももらっていないとはつきり言ってやったよ。そしたら、『うそつき』だの、『浮気者』だの、ひどい悪口を言われたよ。おれは本当に何も受け取っていないことを我慢強く訴えたさ。でも、あいつはまったく聞く耳を持たなかった。だんだんとおれも腹が立ってきて、最後には『知らないものは知らん』と言い捨てて、あいつの前からいなくなったよ」

そのときの怒りが、再び細木さんの腹の底から湧いてきたのだろう。彼の口調はどんどん強くなっていった。

「つまり、沙姫さんから、身に覚えのないことを責められたわけですか」

「ああ、まったく、あいつの頭はどうかしちまったとしか思えないな」細木さんが鼻息を荒げた。その勢いで右の鼻穴から鼻くそが飛びだした。

わたしは冷ややかな視線を送りながら、細木さんに訊ねた。

「沙姫さんは、兵庫に行ったとき、あなたが昔の彼女とべったりしていたせいで、メールも電話も返さなかったといっていましたよ」

「ああ、おれもそう聞かされたが、そんなわけはない」細木さんは落着きを取り戻してきた。「ゴールドンウィークは、サッカーの試合と、あとは実家に帰って家でごろごろしていただけだ。地元の友達にすら会っていない」

「その間、藤堂沙姫さんからのメールはありましたか？」

細木さんは首を振った。

「一通もない。電話もなかった」

「沙姫さんから、連絡がないことにおかしいとは思いませんでした？」

細木さんは顎に手を当てて、じつくりと考えた。

「そのときは、それほどおかしいとは思わなかった。確かにあいつは頻繁にメールをするけど、おれはメールが来なくても気にしない人間なんぞでな。ゴールデンウィークの最終日になっても、おれは『そつえば、あいつ、一度も連絡してこなかったな』というくらいのことしか思い浮かばなかったな」

この告白はなんとなく怪しい感じがした。わたしの第六感がそう告げている。

わたしはここで切り札を切ることにした。

「嘘ですね」堂々とした口調で言った。「沙姫さんから連絡がまったくなかったなんて、嘘ですよ」

細木さんは目を大きく見開いて、わたしの顔をじつと見ていたが、立ち上がって怒りを含んだ声で反撃した。

「嘘とは何だ？ おれは本当のことを言っているんだぞ！」

「沙姫さんの携帯電話には、あなたに当てたメールの送信履歴がちゃんと残っていました。わたしたちが確認しました。間違いありません」

細木さんは心底驚いた顔をして、椅子に力なく座り込んだ。

「そんな嘘だろ。おれは本当にメール一通、電話一本もらっていないだ。本当だよ。信じてくれ」細木さんは懇願するようにいった。これが演技なら、彼はアカデミー賞主演男優部門にノミネートされてもおかしくない。

細木さんは、最後に口の中で何かもごもごとつぶやいたきり、黙ってしまった。

「おれは信じますよ」英知が沈黙を破った。

「本当か？」細木さんの目に希望の光が宿った。

「ええ、沙姫さんが、何か携帯電話に細工をした可能性もあります

から」

わたしはそうは思わなかった。何をどう細工すれば、送ってもいいメールの送信履歴をつくれるというのだ？

「ところで、ゴールデンウィークが終わったあとで、沙姫さんからメールをもらいましたか？」英知は静かに訊ねた。

「ああ、もらったよ。ついさっきな。土下座しろとか、そんなふざけた内容だった」

「大変ですね。身の覚えのない罪に問われるのは」

「ああ、まったく」細木さんは万感の想いをこめていった。

それから英知が「これで十分です」といったので、細木さんは帰っていった。

彼の背中には不安が乗っかっているように見えた。

「沙姫さんと細木さんの話を聞いたけど、聞けば聞くほど奇妙だね」イルイは素直な感想を述べた。

そうだ。二人の間の話には矛盾しかない。沙姫さんは、ゴールデンウィーク中に、メールを送り、電話もかけたと言う。しかし、細木さんはメールも電話も受け取っていないと言っている。今日の確認で、沙姫さんが嘘をついている可能性は消えた。だとしたら、嘘をついているのは細木さんだ。沙姫さんの携帯電話には送信履歴が残っているというのに、細木さんがここまで意地になって、嘘をつく理由はなんだろうか？ わたしはじつくりと考えたが答えは出てこなかった。

「二人は今回の件をどう考えているんだ？」

「うーん、やっぱり細木さんが嘘をついていると思うなあ」これがイルイの意見だ。

「ああ、やっぱりそうだろうな」わたしも同意した。「しかし、嘘をつく理由がわからない。まるで見当がつかない」

「そうかなあ？」イルイは懐疑的な口調だった。「やっぱり女性関係じゃないの？」

この意見には賛成しかねた。わたしは英知に顔を向けた。「英知

はどう思う？」

「はつきりしたことが一つある」英知はわたしたちを見た。「細木さんは、さっき、沙姫さんからメールが届いたといった。つまり、二人の携帯は正常に動いていることがわかったわけだ。だから、携帯の不具合で、細木さんに連絡がいかなかった可能性は完全になくなったよ」

わたしは英知の回答にがっかりした。

「小さな進展だな」

「小さな進展で結構だ。おれは靴の中の小石を取り除いたに過ぎない。だが、小石がずっと靴の中にあるというのも、気になって歩きづらいだろ」英知はにやりと笑った。「これで本題に取り組むための準備ができたよ」

どうやら、英知は明日と明後日の休日で、この問題をじっくりと考えるらしい。

しかし、今回は推理のしようがないと、わたしは思った。この騒動は一つの嘘から発生したのだ。細木さんはなぜいまだに、メールを受け取ったことを否定しているのだろうか？ 沙姫さんの携帯電話話にはちゃんと送信履歴が残っているのに、だ。なにか余程の理由があるのだろうか？

それとも、細木さんの言っていることはすべて本当で、彼は、沙姫さんから一通のメールも受け取っていないのだろうか？

もやもやした疑念が残ったまま、今日は解散となった。

4 - 3 ・沙姫の一日

土日の連休が終わり、みんなが嫌いな月曜日がやってきた。

一限目の講義を終えたわたしは、重い身体を引きずりサークル室に直行した。サークル室にはイルイも英知もいなかった。わたしは椅子に腰を下ろし、土日に考えたことをゆっくりと反芻^{はんすう}した。

メールを送ったという沙姫さん。受け取ってないという細木さん。送信履歴を見せてくれた沙姫さん。履歴の話を聞いて、演技とは思えない表情を見せた細木さん。二人に会って話したときの光景が、わたしの頭の中でぐるぐると回った。

どちらかが嘘をついているのだ。送信履歴という証拠がある沙姫さんの方を信じるべきなのだろうが、そう思うたびに、細木さんのあの心底驚いている顔が浮かんでくるのだ。

わたしは大事なところを見落としている気がした。例えば……動機だ。嘘をつく理由、二人の関係はもともとから良好だったであろうか？ 二人のうちのどちらかが、別れの決意を胸に秘めていたとしたら？ 面と向かって別れ話を切り出すのがいやで、わざと喧嘩になるように仕向けたのか？

わたしは携帯電話を取り出し、メール作成画面を開き、アドレス帳から英知を選択した。あいつは土日の間に真相を掴んだのだろうか？ わたしは本文に『答えは出たか？』とだけ入力して、送信した。

十一時半になるとわたしは学食に向かった。今日はカレーでも食べようかと思いつながら、とろとろ歩いていると、後ろからわたしを呼ぶ声がした。

「やあ、武君」

わたしは足を止めて振り返った。なんとそこには杏香さんがいた。「ああ、小林さんじゃないですか」わたしは笑顔で歓迎した。

今日の杏香さんは、男性の目に優しいホットパンツ姿だ。太もも

がまぶしい。

「これから昼ごはん？」杏香さんは白い歯を覗かせた。

「ええ、学食に行くところですよ」

「ふーん、よかつたら一緒にどう？」

なんと、ギャルから食事に誘われた。これはうれしいお誘いだ。

「ええ、いいですよ」わたしは、にやけそうな顔をなんとか押し戻した。

十分後、わたしと杏香さんは向かい合って食事をしていた。わたしたちは、たわいもない話をしながら料理を口に運んでいたが、ふと、彼女に訊きたい事が思い浮かんだ。

「そういえば、沙姫さんと細木さんのことで訊きたい事があるんですけど」

「うん？ なーに？」

「細木さんが沙姫さんの連絡を無視する前までの、二人の関係はどんな感じでしたか？」

「よかつたと思うよ」即答であつた。「沙姫が彼氏の話をするときの表情や、話し方で、順調ってことはわかつたわ」

「細木さんは沙姫さんのことをどう思っていたんでしょうか？」

「わたしが知るわけじゃないじゃん。個人的な面識もないのに」

「すいません。そうですね」わたしはばつが悪るそうに笑つた。

「まあでも、細木君はサッカー部のモテモテ四天王だから……」

「モテモテ四天王う？ なんですかそれ？」なんと珍妙な名前だ。

この呼び方を考えた奴はイルイ並みにネーミングセンスがないな。

「そのまんまよ。女の子から大人気のサッカー部の中でも、特にモテる四人のことよ。」

『超美形キャプテン・大地』だいち

『フィールドの薔薇貴公子・鳥越』はなづか

『ワイルドフェロモン・藤原』ふじわら

『キャッチ・マイ・ハート・トゥー！ ゴールキーパー・細木』ほそき

この四人がサッカー部のイケメンの中のイケメンなの。秘密のフ

アंकクラブもあるという噂も聞いたことがあるわね。とにかくモテるのよ」

人知を超える未知からの情報が、わたしの脳内ニューロンにガラス片のごとく降り注ぎ、思考回路をズタズタに切り裂いた。

わたしはヤカンから蒸気が吹き出すような勢いでいった。

「名前からしてイロモノ集団じゃないですか！ あとサッカーも強そうだな前じゃないし。キャプテンと貴公子は百歩譲って認めてもフェロモンとキャッチ・マイ・ハートって……おふざけでしょう？」

「『ワイルドフェロモン』を侮^{あなご}つてはいけないわ。彼の汗は、女の子たちをとりこにする強力なフェロモンが含まれているのよ」

「あと強烈なオス臭もね」わたしはそつなく付け加えた。

「『キャッチ・マイ・ハート・トゥ』のスラングも、ゴールキーパー・細木君が生み出す数々のスーパーセーブにかけて、『ボールだけじゃなくて、わたしのハートもしっかり掴んでね』という意味合いが込められているのよ」

「意味は理解できますが、ダサすぎますよ」わたしは真心を込めていった。

「まあとにかく、話を戻すと、細木君はかなりモテるから、言い寄ってきた女の子に、つい気移りすることもあるんじゃないのかな？」

「気移りか……そういわれると、別れる理由がありそうなのは細木さんの方だな。」

杏香さんとの和やかな食事（一時、そうでないときもあったが）を終えて食堂を出た後、わたしは自分の携帯を見た。英知から返信があった。彼が送ってきてくれたメールには次のような返事があった。

『一筋の光明を見つけた。サークル室で会おう』

午後の講義を終えたわたしは急いでサークル室に向かった。サークル室にはイルイがいて、コンビニで買ってきたと思われるフライドポテトを、口の中でもぐもぐしていた。

「ちょっとちようだいや」わたしはテーブルの上にあるフライドポテトを見ていった。

「やだ」イルイの答えは実にはつきりとしていた。

「一本でいいんだ」

「やだやだやだ」彼女はとうあってもポテトを渡したくないらしい。「そうかー、残念だなあ」

わたしはイルイの肩越しに部屋の隅を見た。そして、そこを指差して、唐突にいった。

「あつ、ゴキブリ！」

「ええっ？」イルイはわたしが指差している方向を見た。

イルイがわたしに背中を向けた隙を見て、わたしはポテトを一本口の中にほおり込んだ。

「どこどこ？ どこにいるの？」イルイは縮み上がった声を出して、まだ部屋の隅をきよきよと見ている。

わたしはポテトを二本まとめてつまみ、口の中に収めた。

「ねえ、どこにいるの？」イルイは振り返った。

「ごめん、見間違いだったかもしれない」わたしは自然な発音になるように努めた。

「もう、脅かさないでよ」

イルイの手は再びポテトに伸びたが、すんでのところで止まった。

「さつきより少ない」

「え？ なにが？」わたしは白を切った。

イルイは目をぴかりと光らせた。

「わたしのポテト食べたでしょう！」

「証拠はあるのか？」

イルイの右手が、わたしの右手をむんずと掴んで、テーブルの上に引っ張り出した。

「親指と人差し指がてらてら光ってる！ ポテトをつまんだ証拠よ！」勝ち誇った口調だった。

「さつき鼻の頭を擦ったからだよ」

イルイがわたしの腹にパンチを食らわした。

「鼻の脂だけで、そんな光沢でないよ。しらはつくれないで白状しなさい」

わたしとイルイは掴み合いを始めたが、そのとき英知がやってきた。

「おいおい、プロレスごっこなら夜中にやってくれよ」この光景にあきれたようだ。

「英知、待ってたぜ」わたしはイルイをぱつと離して、英知に面と向かった。「あのメールの内容だと、期待していいようだな」

「それはまだわからない。おれが考えたのはあくまで可能性だからな」英知は相変わらず静かな口調でいった。「これから確かめたいことがあって、沙姫さんから話を訊こうと思うんだが、二人も来るか？」

当然わたしたちはうなずいた。

ノベルス研究会は、相変わらず平和をむさぼる羊たちしかいなかった。深瀬さんは白色の携帯を取り出してメールを打っていたし、澤田さんは女性向けファッション雑誌のページをめくっていた。そして、まだ名前を知らない男性部員二人があぐらをかいて、談笑していた。肝心の沙姫さんはいなかった。沙姫さんの鞆だけがちゃぶ台の横に置かれていた。

わたしたちはサークル室にお邪魔して、沙姫さんは来ていないのかと訊ねた。すると「沙姫さんは生協に行っている」という返事が返ってきた。

わたしたちはサークル室の外で彼女を待つことにした。

その間、わたしは英知の顔を見たのだが、そのときの英知はどこか緊張を押さえ込んでいる感じがした。わたしは妙だなと思った。さつきまでは普通どおりの表情だったのに。

わたしは暇つぶしに、今日、食堂で杏香さんと一緒にご飯を食べたときのことを、二人に話した。モテモテ四天王のことも二人に話した。イルイは大爆笑したが、英知は硬い表情を崩さなかった。

沙姫さんは五分ほど経ってから現れた。手には生協のビニール袋をぶら下げている。

「やあ、こんにちは」英知はにこやかにいった。

「またあなたたち？」それとは対照的に、沙姫さんはげんなりした顔でいった。「今度は何の用？」

「携帯電話を見せていただけませんか？」

「またあ？」

『またあ？』という言葉を聞くと、わたしは小学生の夏休みとき、母が昼ごはんにソーメンばかり出していたことを思い出す。ソーメンが出てくるたびに、わたしは『またあ？』と嘆いたものだ。今は関係ない話だが。

「今度はすぐ済みますから」

「しゃーないなあ」

沙姫さんはそう言うのと、サークル室に入り、鞆の中から携帯電話を取り出した。その携帯を英知に差し出した。

「はい、どうぞ」不服そうに言った。

英知は携帯を受け取りもせず、こう言った。

「はい、ありがとうございます。もう結構ですよ」

沙姫さんから殺意のオーラがあふれ出す。

「人をおちよくってんのか？」

彼女は携帯を握ったまま、英知に殴りかかった。

英知はしゃがんで避けたが、彼女の拳は、英知の後ろにいたわたしの顔に当たった。

「うぎゃあ！」何でわたしがこんな目に……

他の部員たちは、失笑しながらこの悲劇を見守っていた。見ている人にとっては喜劇に見えるかもしれないが、わたしにとっては悲劇なのだ！

「あら、ごめんなさい」沙姫さんは、しまったという顔をした。

「大丈夫か？ 武」英知も心配そうに訊いた。

わたしという大きな犠牲を払って、修羅場は一瞬で去ったようだ。

「ああ、なんとかな」わたしはゆつくりと顔を上げた。

「あんたのせいだからね」沙姫さんは強い口調で英知にいった。

「すいません。でも、おれはふざけていたわけじゃないんですよ。

今回は、携帯の内容は対して重要ではなかったのです」

「はあ？ そうなの？」沙姫さんはわけがわからないようだった。

その気持ちはもっともだ。わたしでさえ英知が携帯を一目見ただけで、十分だと言った理由が理解できないのだから。おふざけ以外だとすると、英知はいったい何を確かめたかったのだろうか？

「沙姫さん。次のいくつかの質問で、訊きたいことは終わりになると思います」英知は重々しくいった。「ただ、根掘り葉掘り詳しく訊くことになると思うので、おれたちのサークル室に来てくれませんか？」

「ここじゃだめなの？」

「はい。すいどう会のサークル室のほうが、いいと思います」

「次が最後のね」沙姫さんは念を押した。

「はい。最後であると、この世界の神様に誓いますよ」

「……わかったわ」沙姫さんは了承した。

こうして、すいどう会のサークル室では、わたし、イルイ、英知、沙姫さんの四人がテーブルを囲った。

「何が訊きたいの？」沙姫さんは急かした。

「そうですね」英知は考えながら答えているようだった。「まずは、ノベルス研究会の会員で、沙姫さんと同じ学科の人はいますか？」

「誰もいないわよ」

「そうですか」

わたしの見間違いかもしいないが、英知の顔が僅かにほころんだ気がする。

「次に、ゴールデンウィーク前、つまり四月三十日に、あなたが一日をどうやって過ごしたのかを教えていただけますか？」

そう言って英知はペンとメモ帳を取り出した。

「四月三十日にやったこと？ 何でそんなことを訊くの？」沙姫さんは当然のごとく混乱した。

「お願いしますよ。わけは後で話します」

沙姫さんはあきらめたらしく、ため息を一つもらした。

「四月三十日でしょ。朝起きて、一限目と、二限目の講義に出たわ。その後は、生協でお弁当を買って、サークル室に行って食べた……こういう説明の仕方でもいいの？」

「ええ、大丈夫ですよ。もっと詳しく知りたいことがあったら、こちらから質問しますので……ところで、そのときサークル室には、すでに誰かがいましたか？」

「ああ、まつつんがいたわね」

「まつつん……あのできれば、おれたちにもわかるように、サークルメンバーの名前はフルネームで言ってくれませんか？」

「松本幸治、ノベルス同好会の会長よ」

英知はメモ取りながら質問を続けている。

「松本さんはいつまでサークル室にいましたか？」

「松本幸治は三限目の講義があるから、十三時になる前には出て行ったよ」

「沙姫さんはいつまでサークル室にいましたか？」

「午後に講義がなかったのよ。だからそのまま、十七時半までのんびりしてたかな」

英知は小さく二回うなずいた。

「午後の間、だれが、いつサークル室に来たか教えてくれませんか？」

あと沙姫さんが、何かの用事とかで、サークル室から一時的に出て行ったときがあれば、そのことも話してください」

「つまり、だれが、いつサークル室にきて、わたしがいつサークル室を抜けたかを話せばいいの？」

「まあ、そういうことです」

沙姫さんはじつくりと考え込んだ。

「そうねえ。松本幸治がいなくなっただ後は、わたし、ちょ、ちょっ

とした用事でサークル室からいなくなってたわ」

ちよつとした用事というのは、たぶんお手洗いのことだろう。

「それで何分かったかわからないけど、サークル室に戻ったときには、小林杏香がいたわね。それで、二人でしようもないおしゃべりをしたわね。」

それから、十四時過ぎぐらいだったかな。深瀬玲が来たわね。

十四時半ごろに、わたしと杏香は生協におやつを買いに行ったわ。そのとき、生協で同じサークルの澤田裕子に会って、一緒にサークル室に戻ったの。

杏香と玲は十五時半ごろに帰って行ったかな。あとは……十六時になるかならないかのところで、親から電話がかかってきたのよ。それで、サークル棟の外まで行って、しばらく話していたの。

十六時半くらいになると、松本幸治、川上宏明、持田春樹、村田薫、鈴木京太、このメンツが次々にやって来たつけ。まあ、人数も集まってきたし、みんなで馬鹿話して盛り上がったわ。

そこから最初にサークル室を抜けたのはわたしね。わたしは七時半くらいに帰ったわ。家に帰った後は、ご飯作って、食べて、テレビ見て、お風呂に入って、ネットサーフィンしたり、小説読んで最後に寝た。これが四月三十日の過ごし方よ」

「はい、ありがとうございます」

英知はメモを取るためにせつせと動かしていた手を止めた。

「次が最後の質問になります。先週の金曜日の午前中だけでいいです。何をされて過ごしました？」

「先週の金曜日というと、あんたたちがやってきた日よね。その日の午前のことだけを話せばいいの？」

「ええ、そうです。できるだけ詳しく」

「朝起きて、一限目の講義に出席したわ。その日は二限目の講義が休講だったの。だから、一限目の講義が終わったらサークル室に行つて、昼までのんびりしようと思ったのよ。サークル室には深瀬玲がいたわ。それで、玲が『生協で飲み物買ってこない？』って言い

出してね。わたしもOKしたのよ。それからサークル室から出たときに、玲の携帯が鳴ったのよ。電話だったわ。それで、玲は『ごめん。先に行つて』というから、わたしはゆつくりと、先に行ったのよ。玲は途中で追いついてきたわね。生協で、わたしはコーヒー牛乳を買ったわね。玲が何を買ったのかは覚えてないけど。

サークル室に戻ると、澤田裕子が来てた。寝転がって携帯をいじってたけど、わたしたちが戻ると、すぐに起き上がったわ。それから三人で今度発売の小説の話をしたわね。そろそろお昼ごはんでも食べに行こうかってときに、杏香が来たのよ。で、四人で食堂に行つてご飯を食べているときに、その目つきが悪いのが、うちの弟と一緒に来た、というわけよ。これで十分かしら？」

「完璧ですよ。長々としやべつてもらつて、すいませんね」

「でも、この話で何がわかるの？ わたしにはさっぱりなんだけど、わたしも同意見だった。沙姫さんの一日の行動を調べることで、いったい何がわかるというのだ？」

「これでいろいろはつきりましたよ。沙姫さん、すいせんが、明日の十六時ごろにもう一度だけここに来てくれませんか。おれからは是非とも聞かせたい話があるんですよ」

沙姫さんは面倒そうにいった。

「どうしても来なきゃだめ？」

「ええ、どうしてもです」英知はまっすぐ彼女の目を見ていった。英知と沙姫さんは、しばらくの間、面と向かったままだったが、とうとう沙姫さんが折れた。

「わかったわよ。十六時に来るわ」

そういうと、沙姫さんはさっさとサークル室から出て行つてしまった。

「ねえ、英君。さっきの話で何がわかったの？」イルイは興味津々という感じだった。

「それは明日話すよ」英知は珍しく、不敵な笑みを浮かべていた。わたしは直感的に、最後の舞台が整いつつあることを感じた。

4 - 4 ・虚構の信頼

日付けは変わり、十六時。英知が指定した時間になった。

十六時現在、わたしはようやく大学の正門をくぐった。まずい遅刻だ。今日発売の『フィデルマシリーズ』の新作を買いに書店に行ったのがまずかった。ついつい時間を忘れて立ち読みをしていたら、いつの間にかこんな時間だよ。

他の連中には、カラスに襲われていた子猫を助けていたら遅くなった、とでも言うておこう。冷めた視線を消せるどころか、わたしの好感度も上がるだろう。ふふふ……

邪悪な期待を胸に抱き、わたしはサークル室のドアを開けた。

「すまん。遅れた」その後の子猫のくだりは出てこなかった。「おい、お前だけか？」

サークル室には英知しかいなかった。イルイと沙姫さんの荷物はあるが、二人の姿は見えなかった。

「二人にはちよつと外してもらった」英知は椅子にもたれかかったまま、落ち着き払っていった。

「なんでそんなことするんだ？」わたしは空いている椅子に座った。「すぐにわかるさ……」ところでお前はなんで遅れたんだ？」

「書店で立ち読みしてたら、時間が経ってた」野郎からの好感度なんて、空き缶ほどの価値もない。

わたしの背後でドアが開く音がした。どうやらイルイたちが帰ってきたらしい。

「お邪魔しますよ」

その声を聞いてわたしは振り返った。入り口に立っていたのは細木さんだ。

「なんで細木さんが……」わたしはこの不意打ちに驚いた。

「おれが呼んだんだ」英知はいった。「彼にも、これから話すことを聞いてほしかったんだ」

細木さんはテーブルの近くまで足を進めたが、顔をしかめた。

「あいつも来てるのか」沙姫さんの荷物を見ながらの言葉だった。

細木さんと沙姫さんは、先週の言い争い以降は、一度も顔を合わせていないのだろう。細木さんの態度からそんな感じがした。この二人を一緒にするのはまずいのではないかと、わたしが思っていたとき、またしても背後のドアが開いた。

今度こそ、イルイと沙姫さんだった。沙姫さんはサークル室に細木さんの姿を認めるや否や、すぐにわめいた。

「ちよつと、なんでこいつがここにいるのよ？」

「おれも呼ばれたんだよ」細木さんは自制しながら言葉を発している様子だった。

険悪な空気がこのサークル室で爆発する前に、英知が割って入った。

「すいません。二人とも落ち着いてくれませんか？ 少なくとも今だけは。喧嘩をするならおれの話聞いた後にしてください。もっとも、それまでにその気が残っていたらの話ですが」

「どういうこと」沙姫さんはイライラしながらいった。

「そのままの意味ですよ。まあ、とりあえず座ってください。話はそれからです」

こうして、議論の場は整った。イルイは、細木さんと沙姫さんを見比べて、やや緊張していた。沙姫さんは細木さんの姿をなるべく視界から消すことに努めていた。逆に、細木さんは腕を組んで、沙姫さんに険しい視線を送っていた。

英知は立ち上がった。話が始まる。

「さて、挨拶抜きでさっそく本題に入りましょう。早くしないとここが修羅場になりそうだ」英知の態度はやわらかかった。「まずは今回の騒動のおさらいでもしましょうか。といっても語ることは多くありません。ゴールデンウィーク中、沙姫さんは細木さんにメールを送ったり、電話をかけたりした。ところが、細木さんから沙姫さんへの返信はまったくなかった。沙姫さんはこのことに腹を立て

て、休み明けに細木さんに詰め寄ったが、細木さん本人は、休みの間、沙姫さんからのメールも電話も受け取っていないと主張した。これが原因で二人は大喧嘩をして今に至るというわけです。ここまではいいですね」

英知は二人を見たが、二人は微動だにしなかった。

「さて、これは聞いただけでは単純な話だと思えるでしょう。メールを送ったという彼女。メールを受け取っていないという彼氏。どちらかが嘘をついているそう思える話です。

しかし、わからないことがあります。それは動機です。なぜ相手に嘘をつく必要があるのか？ その理由がはつきりしないのです。武から、正確には杏香さんの話を聞いた武から、二人の関係は順調という話を聞きました。なのになぜ、二人のうちのどちらかは、こないざこざを起こすまねをしたのでしょうか？ この問題は考えても、考えても答えが出ませんでした。だから、おれはまったく別の視点からこの騒動を見ることにしたのですよ」

英知はここで言葉を切り、沙姫さんを見ていった。

「沙姫さん。すいませんが、今、この場で、細木さんの携帯に電話をかけてくれませんか？」

沙姫さんは口をあんぐりと開けて、英知を見た。

「なんでそんなことを？ あんたにはさんざんわけのわからない質問やらお願いをされてきたけど、今度のこれは、意味不明を通り越して、バカとしか受け取れないんだけど」

「かけてください」英知は沙姫さんの言葉を無視していった。

沙姫さんは舌打ちをして、鞆の中から携帯電話を取り出した。ボタンを操作して、形態を耳に当てた。

そのときであった。

クラシックなメロディーが流れ出した。携帯の呼び出し音だ。

わたしはそのメロディーを聴いたとき、うなじの毛が逆立つ感じに襲われた。イルイは顔をしかめて固まり、細木さんは不可解と混乱が入り混じった表情をしていた。

あいつはポケットから携帯電話を取り出し、電話に出た。

「もしもし、長浜です」

電話に出たのは、細木さんではなかった。英知だ。英知の携帯に電話がかかってきたのだ！

沙姫さんは呆然とした表情で、受話器から聞こえてくる声と同じ人物を、ただただ見つめることしかできなかった。

「だめじゃないですか。ちゃんと細木さんに電話しないと」

沙姫さんは、携帯を握り締めたまま、勢いよく立ち上がった。

「どうということ！ わたしは、わたしは、確かに、細木君に電話をかけたのよ？」その声には混乱と興奮に満ちていた。

英知はそんな沙姫さんを前にしても冷静だった。

「沙姫さん、細木さんの電話番号を何も見ないで言えますか？ あとメールアドレスも同様に、何も見ないで言えますか？」

「え？」と発しただけで、沙姫さんは黙り込んだ。

英知は大きくうなずいた。

「そう、こういうことなんです。沙姫さんは携帯電話を信頼しきっていた。いえ、沙姫さんだけではありません。おれも携帯電話の番号なんて、自分のやつしか覚えてませんし、他の大半の人も同じでしょう。おれたちは『アドレス帳』という機能に頼りすぎて、他人の電話番号、メールアドレスを記憶していない。これが二人の仲をここまで悪くした原因です。細木さんも沙姫さんも、だれも嘘なんて言っていなかったのです。二人とも本当のことを言っていたのです」

「どうということなんだ？ なんで沙姫がかけた電話が、おれに来ないで、おまえに行ったんだ？」細木さんは乾いた声でいった。

「つい先ほど、イルイに沙姫さんを連れて、そこらへんをぶらぶらしてきてくれと頼んだんですよ。そして、二人がいない間に、沙姫さんの携帯に細工をさせてもらいました。沙姫さんがいつも鞆の中に携帯電話を入れて、さらに、ちよっと席を外すときには、鞆を部屋に置いたままにする癖があるので、彼女の携帯を他人がいじるの

は簡単なことなのです。

それで、肝心の細工ですが、非常に簡単なものです。携帯電話のアドレス帳から細木さんを選択します。あとは編集作業で、細木さんの電話番号をおれの電話番号に変えただけです。これが細木さんにかけた電話が、おれの携帯にかかってきた仕掛けですよ」

「英知、もしかしておまえが言いたいことは……」わたしは気がついていた。

「ええ、ゴールデンウィーク前に、だれかが沙姫さんの携帯に、同じ細工をしたんでしょうね。この人物をありきたりにXと呼びましょうか。Xは、沙姫さんの鞆が無防備におかれているところを狙って、沙姫さんの携帯電話を取り出して、アドレス帳に載っている細木さんの電話番号と、メールアドレスを控えてから、細木さんの連絡先の情報を、自分の連絡先の情報に上書きした。こうするともう、アドレス帳から細木さんを選んで、電話もメールも細木さんのものには届きません。すべての連絡は、Xの携帯電話に届きます。」

ゴールデンウィークが明けたとき、Xは第二の行動を起こします。それは、改ざんした細木さんの連絡先の情報を元に戻す作業です。いつまでも偽の連絡先の情報のままにしておくと、改ざんがばれる可能性も出てきますからね。Xは再び、沙姫さんが鞆をほおり出してどこかに行っている隙を見つけて、控えておいた細木さんの連絡先の情報を使って、アドレス帳を元に戻したわけです。

これで先週の金曜日におれが、沙姫さんに頼んで、細木さん宛てに送ってもらったメールがちゃんと、細木さんに届いた説明にもなります。つまり、Xは四月三十日と沙姫さんが携帯電話をなくした五月七日に、沙姫さんと接触できて、なおかつ、沙姫さんの姿がない間に、沙姫さんの鞆をいじるチャンスがあつた人間です」

「なんで五月七日なんだ？ 六日の可能性はないのか？」わたしは疑問を口に出した。

「六日の可能性もあるが、七日にはとても重要なことが起きているんだよ。その日、沙姫さんは携帯をどこかでなくしたと言っていた

けど、本当はXが改ざん部分を直すために、沙姫さんの鞆から盗ったと考えたほうが自然じゃないかな？　それで昨日、沙姫さんに話を聞いたら、おれの予想通り、Xは七日に行動を起こしていたよ」「誰なの？　こんなふざけたまねをした奴は？」沙姫さんは英知を急かした。

英知は懷から一枚の紙切れを取り出し、テーブルの上に置いた。そこには人物の名前が羅列されていた。

かわかみひろあき
川上宏明
こばやしきょうか
小林杏香
さわだゆづこ
澤田裕子
すすきようた
鈴木京太
ふかせれい
深瀬玲
まつもとこうじ
松本幸治
むらたかある
村田薫
もちだはるき
持田春樹

ノベルス同好会のメンバーの名前だった。どういうわけだか五十音順に並んでいる。おそらく英知の趣味なのだろう。

「ここには昨日、沙姫さんの話の中で出てきたノベルス同好会のメンバーの名前が書かれています。Xはこの中にいます」英知は断言した。

「うちのサークルメンバーの中に犯人がいるの？」沙姫さんは驚いて、椅子に脚をぶつけた。

「ええ、そうです。話を聞いたとき、沙姫さんがサークル室にいたときに、携帯電話をいじるチャンスがいくらかありました。講義の前に、携帯をいじられたとは考えられません。講義室という人目が多い空間で他人の荷物をあさる人は、まずいないでしょう。だからノベルス同好会のメンバーの中にXがいるのですよ」
「早く教えてくれ」細木さんもうずうずしてきたらしい。

「まあ、落ち着いてください。順を追って話します。えー、まず、この用紙には、いち、にい、さん……八人の名前が載っています。そのうちの五人が第一のふるいにかけて、落とすことができます。四月三十日と五月七日の午前中に、沙姫さんと会ったのは三人しかいません」

そういつて、英知はペンを取り出して、該当しない者の名前に縦線を引いた。英知が手を止めたとき、次の三人の名前が残った。

小林杏香

澤田裕子

深瀬玲

「この三人は、四月三十日と五月七日にサークル室で、沙姫さんと会っています。

最低条件を満たした三人を残したところで、つぎのステップにいきましょう。この三人に、沙姫さんの携帯から、細木さんの連絡先の情報を改ざんする機会があったか？ 沙姫さんがサークル室に鞆を置いていたとき、一人でサークル室にいた時間があれば、携帯の操作は可能です。

ここで、一人の名前を消すことができます。小林杏香さんですよ。彼女は四月三十日にサークル室で一人きりになれる時間がありました。しかし、五月七日にはその機会がありません。彼女は、沙姫さん、深瀬さん、澤田さんが食堂に行こうとしたときに、サークル室にやってきました。だから、杏香さんには、沙姫さんの携帯電話を抜き取る機会はありませんでした。

これでXの正体は二人に絞られます。深瀬玲か。澤田裕子か。この二人には、四月三十日と五月七日の両方に、サークル室で一人きりになれた時間がありました。

ですが、サークル室に一人でいたにもかかわらず、沙姫さんの携帯電話を改ざんできない人がいました。それが澤田さんです。四月

三十日、沙姫さんが澤田さんと二人きりでいたとき、沙姫さんの親御さんから電話がかかってきました。沙姫さんはサークル棟の外に出て、話をしたといいました。このとき、澤田さんはサークル室に一人でいましたが、沙姫さんの携帯電話は、沙姫さん自身が持っていたのですよ。当然、改ざんは不可能です。

さて、これで一人の人物が残りました。深瀬玲さん。彼女には機会がありました。

四月三十日、沙姫さんと杏香さんが生協に行っている間、彼女は一人でした。

五月七日、沙姫さんを生協に誘ったものの、自分の携帯電話の呼び出し音が鳴って、沙姫さんを先に行かせました。ここでも彼女は一人きりになれました。深瀬さんは、沙姫さんの携帯電話の電源を切り、自分の鞆の中に忍ばせた。おそらく、あまり遅くなると、沙姫さんが余計な詮索を入れてくとも思ったのでしょう。そして、深瀬さんは、先に行かせた沙姫さんとに追いついたわけです。

「深瀬さんにしてはラッキーだったな」わたしはいった。「携帯電話が鳴ってくれなかったら、その日のうちに、改ざんした細木さんの連絡先を、元に戻すことができなかったんだから」

「ラッキー？ 何を言っているんだい？」英知は諭すような視線でわたしを見た。

「え？」わたしは固まった。何かおかしいことでも言ったのか？

「おれたちがノベルス同好会に行ったとき、先週の金曜日と、昨日、両方とも深瀬さんがいただろ」

「ああ、確かにいたな。ちゃんと見たぜ」

「見た……か。しかし、観察はしていなかったようだな」わたしはだんだんイラついてきた。

「だからなんだって言うんだよ？ それが、深瀬さんに機会を与えたラッキーな電話とどう関係するんだ？」

「まだラッキーというか。いいか？ そのとき深瀬さんにかかってきた電話は、深瀬自身さんがかけたんだよ」

わたしはこの言葉を理解するのに少し手間取った。

「深瀬さんが、深瀬さんに電話をかけた？」

わたしの様子を見かねた英知がずばりいった。

「いいかい。深瀬さんは携帯電話を『二台』持っているんだ。赤色の携帯と、白色の携帯だ。先週の金曜日にノベルス同好会を覗いたとき、彼女は赤色の携帯をいじってた。ところが昨日、行ったときには彼女は白色の携帯を取り出していたんだよ」

「買い換えたのかも」わたしは小さな可能性をいった。

「バカ言え、買い換えたばかりの携帯が、一世代前の機種なものか」「そうか」もはや納得するしかなかった。「生協に行こうと言いだしたのも深瀬さんだったし……深瀬さんは自分で機会を作ったわけか」

この部屋にいる全員が納得する答えだった。

ここで、この完全燃焼した雰囲気さらに燃え上がらせる行動に出た人物がいた。

沙姫さんは椅子を倒すほど激しい勢いで立ち上がり、サークル室の外へと駆け出した。

「まずいな」その様子を見た英知が言った。「追いかけよう」

彼女が行く場所はひとつしか思い当たらなかった。ノベルス同好会だ。今や憎き深瀬玲に、私刑を加えにいったに決まっている。

4 - 5 ・決別、そして……

ノベルス同好会のサークル室では、沙姫^{さき}さんが沙鬼^{さき}さんになっていた。深瀬さんはふてぶてしい態度で、沙鬼さんと向かい合い、他の部員たちは不安や好奇の視線を二人に向けていた。

「ふざけるなよ、てめえ。わたしの携帯いじって、健君にメールと電話が届かないようにしただろう！ こっちはすべてお見通しなんだよ！」

実際に真相を突き止めたというのは、英知だというのに、この言い方だ。

「なんの話か、さっぱりね」深瀬さんは肩をすくめた。

「あんたにしかできなかったことはわかってるのよ！」沙鬼さんはものすごい形相で深瀬さんをにらみつけた。

「ふっ」その様子を見ても深瀬さんは鼻で笑うだけだった。

この態度が最後の一撃になったのだろう。沙鬼さんは懷からボールペンを取り出し、深瀬さんの頭の上で団子状に束ねた髪に突き刺した。まさにウィリアム・テルに射抜かれたりんごのようだ。深瀬さんは呆然とした。

これ以上はまずいと思い、わたしは沙鬼さんをなだめようと彼女の後ろについた。

ところが、そのとき、正気を取り戻した深瀬さんが襲い掛かった。

「なにすんじやー！」

渾身の右ストレートが沙鬼さんに襲い掛かる。だが、沙鬼さんの方が速かった。彼女は反射的に右に横っ飛びした。深瀬さんの拳は、わたしの鳩尾^{みぞおち}に命中した。

「ごっ……！」なんでわたしがこんな目に……というか似たようなことが昨日あった気がするな。

わたしはその場に崩れ落ち、仰向けに倒れた。女性とはいえ、体重のかかったストレートを受けたのだ。わたしは目をぎゅっと閉じ、

歯を食いしばってうめいた。

わたしは痛みを耐えてゆつくりと目を開けた。苦しみを乗り越えた先には、パラダイスが待っていた。

わたしの視界の隅に映るのは、深瀬さんのミニスカートの中からのぞく、純白パンツ！ これは役得だ。殴られた甲斐があった。感動で、わたしの心は打ち震えた。

深瀬さんは沙鬼さんに夢中でわたしに注意を払っていない。このまま薄目を開けて、一分……いや二分……やっぱり三分くらい転がってしよう。

「大丈夫か？ 武」英知がわたしを抱き起こそうとする。

「邪魔するな！」わたしは鬼気迫る声を出した。

「はあ？ 殴られておかしくなったか？」英知は頭をかいいた。

わたしは未練たらたらで立ち上がった。女二人の言い争いはまだ続いている。

「だいたいなんで、わたしの携帯をいじったのよ？」

「ふん！」深瀬さんは、首を逸らしてつつばねた。

深瀬さんがこのような暴挙に走った理由が、わたしは予想がついた。

「深瀬さん、あんた、モテモテ……」うつ、いざ自分の口で言うところ、恥ずかしさ極まりないな。「モテモテ四天王のファンクラブに入っているだろ」

「あら、あんたみたいな男が、ファンクラブの存在を知っているなんて以外ね。ばれているならしょうがないわ」深瀬さんはあっさり認めた。

わたしはカマをかけたただけなのだが、うまくいったようだ。

「あんたは細木さんと沙姫さんが付き合っていることに嫉妬して、二人を分かれさせる方法をずっと考えていたんだろ。それで思っていたのが、細木さんの連絡先の改ざんだ。沙姫さんと同じサークルにいるから、彼女が鞆に携帯電話を入れたままどこかに出かけることもわかっていた。あとはタイミングを見計らえば、改ざんは簡単

にできる」

「ふふふふ……」深瀬さんは不気味な笑いを浮かべていた。「細木さんに付きまとう人は、たとえ男であつても消し炭にしてやるのよ！」

「一番付きまといっているのはあんたらだから」

この妄信女を黙らせるには、細木さんの力が必要だった。

「細木さんから何かいってくださいよ」とわたしは促した。

急にバトンを渡させた細木さんは、やや焦ったようだが、言葉を選びながら深瀬さんを説得した。

「深瀬さん、おれのことを応援してくれるのはありがたい。だけど、沙姫には手を出さないでくれないか。はっきり言って、沙姫もおれも不愉快な思いをした。おれのことを想ってくれているなら、そつとしいてくれないか？」

深瀬さんはこの言葉に動揺したようだが、闘志はまだ尽きていないようだ。

彼女は口を開いて何かを言おうとしたが、沙鬼さんがそれを打ち消した。

「健君、もういいよ。何を言っても無駄だよ」

沙鬼さんは、沙姫さんに戻った。彼女は踵を返すと、ノベルス研究会から出て行ってしまった。彼女は、去り際に、入り口のところから頭だけ覗かせてこういった。

「わたしノベルス同好会、退会するから。まっつんにそう伝えといて」

この劇的退出に、わたしたちはただ啞然とするしかなかった。

細木さんはすぐに彼女の跡を追ったが、他のものは彼女が残して行った、不穏な雰囲気をかみ締めるだけであつた。

「愛憎が混じった昼ドラ的事件だったね」イルイはこう漏らした。
わたしたちはすいどう会のサークル室に戻り、今回の騒動を振り返っていた。

「しかし、携帯電話のアドレス帳を改ざんするとは、考えたな」わたしは独り言のようにつぶやいた。

「ああ、あれは人の盲点をついた方法だと思うよ。おれたちは機械の『機能』に頼りすぎている節があるからな」

英知はシェイクスピアの『マクベス』の有名な一節をアレンジして言った。

「便利は不便、不便は便利」(元の文は「きれいはきたない、きたないはきれい」)

「うまいこと言うじゃないか」わたしは微笑んだ。「で？ 沙姫さんはどこに行ったんだろうな？」わたしは椅子の横にある彼女の鞆を見ながら言った。このサークル室を飛び出してから、ここに置きっぱなしにしているのだ。取りに来ると思うのだが、ノベルス研究会から出て行って、かれこれ一時間近く経っていた。荷物をここに残したまま家に帰るとは考えづらいのだが、いったい彼女は今どうしているのだろうか？

わたしがそんなことを考えていたとき、サークル室のドアが勢いよく開いた。入り口には沙姫さんが、さっきとは打って変わってにこやかな表情で立っていた。片手には、なにやらA四判の紙をもっていた。

「会長さんは誰かしら？」彼女のソプラノ声が元気よく跳ねた。

「わたしが会長ですけど」

沙姫さんはわたしの前に来て、手に持っていた紙を差し出した。

わたしはそれを受け取って、飛び上がりばかりに驚いた。

「ここに入部を希望します」沙姫さんが持ってきたのは入部届けだった。

「なんでいきなり？」わたしはうろたえた。

「弟から聞いたわ。あなたたち、推理小説を書いてるんでしょ？」

「ええ、まあ」のろのろとした進行ですが……

沙姫さんとはんでもないことを言い出した。

「わたしも小説を書きたいのよ。今回のことをモデルにしてね」

「ええっ？」これは意外な申し出だった。「何で、そんなことを……」

「何で？ そうねえ……簡単に言うと、わたしのささやかな仕返しよ。玲はわたしに対してとんでもない仕打ちをしたわ。あやうく彼と別れることになりそうだったのよ。だったらわたしも一つ、玲に何か痛烈な一撃をお見舞いしたいわけなの。それで今回の話を小説にして、玲の極悪非道っぷりを世間に流布しようと思いついたの」

沙姫さんはにこにこ笑いながら己の野望を語った。

「わたしは三年だから、サークルにいるのは文化祭が終わるまでだと思うけど……まあ、よろしくね」

三年生の新人部員か。歓迎するべきなのか、迷惑なことなのか……あまりに突然の出来事で、わたしたちは苦笑いを浮かべるしかなかった。

まあ、何はともあれ、すいどう会に、藤堂沙姫という新たなメンバーが加わることになったのだ。今度、彼女の歓迎パーティーでも開いておこう。

5 - 1 ・消えたUSBメモリ

「まずい……まずいぞ」

男はうつむいて、落ち着きなく部屋の中をうろろろしていた。彼の顔には焦燥と絶望の色が入り混じっている。男の様子は、あたかも世界終焉という受け入れがたい事実を必死に拒絶しているかのようだった。

「まずい」

この呪文を唱え続ければ、すべての罪が許されるかのように、男はまた同じ言葉を繰り返しつづやいた。

男はベッドにどっかりと腰をかけ、両手で頭を抱えた。男は追い詰められていた。

どうしてこうなったのだろうか？ 男は何度も自問し、神を呪った。

男は頭を落ち着けて考えることに集中しようとした。不安と一緒に踊っている場合ではない。何か解決策を考えなければならぬ。あのデータが彼女の目に触れれば、おれは間違いなく破滅する。彼女の目に触れる前に、何とかしてアレを、こちらの手におさめなければならぬ。

問題はどうかやってそれをするか、だ。

今日は休日だ。時間ならいくらでもつくれる。なんとか適当な嘘をでっち上げて、彼女から直接渡してもらおうか？ いや、彼女は嘘に敏感だ。間違ったデータを渡していた、なんて嘘はあまりにも稚拙過ぎる。彼女は不審に思うに決まっている。だが、ほかになんと言えればいいのだ？ 本当のことを言うのは論外だ。ほかにいい嘘も思い浮かばない。

そんなとき、ある考えが男の頭を掠めた。最初のうちは、その外道の考えを振り払っていたが、その考えは男の中で次第に大きくなり、ほかにいい方法がないと悟ると、男はついに邪法に手を染める

ことにした。彼女に気づかれずにこっそりと盗むのだ。

男は立ち上がり、時計を見た。十一時二十二分、彼女がここを去って、三十八分が過ぎていた。彼女はアレをトートバッグの中にしまっていた。だとしたら、まだチャンスは残っている。彼女はこの後、料理研究会の用事で、中町公民館なかまちに行くと言っていたな。彼女が家に戻るのはおそらく夕方頃になるだろう。期限はそれまでだ。

次の瞬間、眩いばかりのひらめきが男の脳内を駆け巡った。料理研究会が絡んでくるなら、一人だけ頼れる人間がいる。神はまだ、おれを見捨てていないようだ。男は机の上にある携帯電話に飛びつき、ある人物に電話をかけた。

「おれだ。じつはお前に頼みたいことがあるんだ。はっきり言って褒められるようなまねではないんだが、礼ははずむ。

……いいか？ よく聞いていてくれよ。今日、料理研究会で集まりがあるだろ？ 料理教室のまねごとみたいなあれだよ。お前も当然参加するだろ？

……ああ、そこで、だ。雪美ゆみの鞆の中にUSBメモリが入っているはずだ。色は白。そのときに、それを雪美に気づかれないように回収してくれ。

……わけはいえない。その分、礼はずむといたただろ。

……そうだな。一万円、いや一万二千円出そう。

……なに少ない？ 実家生でも金に困ることはあるんだよ。

……ちょ、ちよつと待て！ わかったよ。二万円出す。これでどうだ？

……よし、頼んだぞ。

……なに？ 回収したUSBメモリはどうすればいいか、だって？ できればおれに渡してくれ。

……途中で雪美が気づいたら？ そうだな。そのときは盗ったやつがお前だとばれるまずい。というか、おれが指示したことがばれるとまずい。しかたないが、メモリは雪美に気づかれないように捨ててくれ」

こうして男と、電話の向こう側の相手との間に、秘密の取引が交わされた。

十二時十九分。大田雪美^{おおたゆみ}と彼女の友人たちは、買い物袋を片手に中町公民館の入り口をくぐった。雪美はそのまま窓口の前に立ち、爽やかな挨拶をした。

「すいません。本日、ここの調理室を予約しておいた、大田です」眼鏡をかけた、品のよいおばさんがやってきて、丁寧な対応をした。

「ああ、はい。お待ちしてましたよ。調理室の利用には九百円いただきます」

雪美は千円出して、お釣りの百円をもらった。

「領収書いただけますか？」雪美はよどみなくいった。

おばさんは下の棚から領収書を取り出した。

「お名前はどちら様にしましょうか？」

「料理研究会でお願いします」

彼女たちは気ままにおしゃべりしながら二階上がった。調理室の入り口の横に鎮座しているソファに自前の荷物だけを置き、中からエプロンを取り出した。そして、買い物袋とエプロンを持って、調理室へと入っていった。入り口から一番近くの調理台の上に、それぞれの買い物袋を置いて中身を取り出した。

「さて」雪美はみんなに向かつていった。「それじゃあ始める前に、もう一度確認するわ。今日は和食を作るのよ。メニューは、天丼、豚汁、酢味噌和え、きんぴらごぼう、卵焼き。さあて、ご飯は最初にみんなで仕込むとして、他は、誰が何を作りたいか、希望はあるかしら？」

「あたし、酢味噌和えがやりたいなあ」眼鏡をかけた明るい髪色の女性がいった。

「じゃあついでに卵焼きも作ってくれる？ 酢味噌和えだけじゃすぐ終わるでしょ」雪美はお願いした。

「うん、いいよ」酢味噌和え担当は、元気よくうなずいた。

「うちはなんでもええよ」短髪で小柄の女性はいった。

「じゃあ、マヨマヨはてんぷらでも作ってもらおうかしら」

「ええでえ、うちが世界一うまいてんぷら作つたるけん」

雪美は内心苦笑いした。マヨマヨこと竹間吉江ちくまよしえは料理研究会のなかでは一番料理が下手だ。彼女なら世界一どころか、てんぷらの作り方を知らない南アフリカ人に混じっても、一番うまいてんぷらを作るのは難しいだろう。

「美紗は豚汁ときんぴら、どっちをつくる？」

ふくよかな女性は、少し考えてから、きんぴらにする、といった。というわけで、雪美は残った豚汁を担当することになった。

四人はエプロンをつけ、手を洗い、それぞれの料理に取り掛かった。

調理室には、ちょうど四台の調理台があつた。だから、一人が一つの台を使つて、自分が担当する料理を作ることにした。雪美は入り口から一番近い調理台を使った。酢味噌和えと卵焼きを担当する北川楓華は、雪美の台の後ろにある調理台を使った。きんぴらごぼう担当の岡本美紗は、雪美から隣の台を使い、てんぷら担当の竹間吉江は入り口から一番奥の台を使った。

雪美は、まな板の上で、大根、にんじん、じゃがいもを一口大に切つていき、最後に豚ばら肉を取り出して細切れにした。食材との格闘が終わると、彼女は大きななべに水を注ぎ、粉末だしを入れて火にかけた。水が沸騰してきたところで、まずじゃがいもを入れる、次に、にんじん、大根。そして最後に豚肉を投入。煮ているうちに灰汁あくが出てくるが取り過ぎないように注意が必要だ。灰汁あくは、見た目もいまいちで、名前からして『悪』という感じだ。しかし、灰汁には食材のうまみ成分が含まれているので、灰汁を必死になつて取り続けると、せっかくの食材のうまみを捨ててしまうことになるのだ。だから、最初のほうの灰汁を少しおたまですくつてやると、あとはなべに蓋をかぶせてほおっておく。時がきたら、蓋を取り、味

噌を加える。このとき重要なのが、火を止めるということだ。理由は明白、味噌は九十度以上で芳醇な香りほっじゅんを発する。だが、逆に、長時間加熱すると味噌特有の香りが消えてしまうのだ。だから、煮立っている鍋を一旦沈めてから味噌を加えたほうが、味噌の香りが強く残るのだ。雪美はみそこしを使って丹念に味噌を溶き、鍋のふたを閉じた。これで豚汁の完成だ。

雪美は料理をつくっている間、他の三人が一回ずつ調理室から出て行くのを見た。雪美はお手洗いか何かだろうと思って、まったく注意を払っていなかった。

豚汁が完成したとき、雪美はその場で他の三人の様子を見た。三人とも自分の料理をまだ作っていた。

そのとき、外から自分の携帯の着信音が聞こえた。誰かがメールしてきたのだろう。雪美はエプロンで手を拭いて、調理室から出入り口の横にあるソファに置いてあった自分のトートバックを開けたときだった。雪美は違和感を感じた。鞆の中のものが移動している気がしたのだ。

この時点で雪美は携帯をそっちのけで鞆の中をシャーロック・ホームズよろしくじっくりと探った。そして気がついた。自分のUSBメモリが無くなっているではないか！ 彼の家を出る時は、確かにあったはずなのに。

どういうことだ、と雪美は考えたが、すぐに我に返った。USBメモリが脚を生やして一人でどこかに逃げ出すことなどない。だれかが盗ったに違いない。問題はだれが盗ったかだ。

雪美はすぐに調理室に戻り、みんなに訊ねた。

「だれかわたしのUSBメモリ知らない？」

三人が一斉に雪美の顔を見た。だれもかれもが、事態を飲みこめていない小鳥のような目つきをしていたが、そのうちの一つは偽者だった。

「いったいなんの話？」まず口を開いたのは楓華だった。

「そのまんまの話よ。わたしのバッグの中に入っていたUSBメモ

リが無くなっているのよ」雪美は一本調子で話し続けた。

「どっかで落としたんやろ？」と吉江。

雪美は悲しげに首を振った。

「そんなわけないわよ。ちゃんとバッグの中に入っていたことはわかっているのよ。底のほうに穴が開いてたり、バッグの中身を豪快にぶちまけるようなことがない限り、無くしたなんてありえないわ」「じゃあ、ゆみちゃんはどっすってわけ？」ふくよかな美紗が、おっかなびつくりという感じで、雪美に訊ねた。

雪美は答えに迷った。考えられることは一つだけだが、はっきり言っていないものか？ 考えた挙句、雪美は答えにワンクッション置くことにした。

「誰かが盗ったのよ。この中のだれか」雪美は次の言葉を気持ち大きく言った。「もしくは、外から入ってきただれかがね」

後者の可能性はほとんどなかった。あまりに非現実的すぎる。泥棒が金の臭いのない公民館にこっそり侵入して、たまたま見つけたバッグの中から金目のものではなく、USBメモリ一つ盗って逃げるなどありえないことだ。

だから盗ったのは、この中のだれかだ。

理由はさっぱりわからなかったが、間違いない。これからどうするか、と雪美は考えた。まずは可能性の低いものを消すべきだ。そのあと、堂々と彼女たちを疑おう。

「わたし、ちょっと下に降りて、窓口の人にだれか外から入って来なかったかって訊いてみるよ」不自然なほど気持ちを込めてこう言ったあと、雪美は調理室から出て行った。

岡本美紗、北川楓華、竹間吉江、この三人のうち二人は、友人に訪れた突然のハプニングに不安になった。しかし、残りの一人は、自分の頭の中の温度が急激に下がっていくのを感じていた。

やばい、こんなに早くばれるとは思ってもみなかった。彼女のUSBメモリは今、自分が持っている。その人物は窓のそばに駆け寄り、思い切り窓を開けて、今持っているUSBメモリを外に投げ飛

ばしたい衝動に襲われた。

しかし、それはできなかった。他の二人がいるところで、そんな不自然な行為をしたら、明らかに疑われてしまう。今必要なのは冷静な判断だ。

何とかこの場を切り抜けるために必死で頭を絞るのだ！

雪美は一階の窓口のおばさんにだれが入ってこなかったか、と訊ねた。答えはもちろんノーだった。その話を深く掘り下げようとするおばさんをうまくあしらって、雪美は調理室に戻ってきた。三人は気まずい空気が漂う調理室で黙り込んでいた。テーブルに両手をついて不安にどっぴりつかる者もいれば、不安を振り払うように自分の担当の料理に集中している者もいた。

「わたしたち以外、今日はだれも来てないそうよ」雪美はきっぱりといった。

「窓口の人に気づかれずにこっそり入ってきたのかも……」楓華は自信なくいった。

この三人を疑うのはかなり抵抗があったが、雪美は心を鬼にした。しかたがない、ほかに可能性がないのだ！

「何のために人目を避けて公民館に入ってくるわけ？ 泥棒なら普通、もつとお金がありそうなところに行くでしょ。しかも、盗られたのはお金じゃなくてUSBメモリよ。」

はつきり言うわ。これはいたずらよ。恨まれる覚えはないけど、だれが盗ったの？」

「なんでうちらが疑われるん？」吉江はてんぷらを揚げながら、不機嫌そうにいった。

「ここにいる全員に機会があったわ。三人とも料理の途中でここから抜けたでしょ」ここまできたらもはや後には引けない。徹底抗戦あるのみだ。「荷物を置いていたソファは調理室にいる限り見ることはできないわ。一旦ここから出れば、何をやってもみんなに知られることはないのよ。例えば人の荷物を漁っていようとね」

「そんな、ねちねち言われると胸糞わるいわ」吉江は大きな声を上げた。

「落ち着こうよ、マヨマヨ」楓華が泣きそうな声でいった。

「でも……」

「調べればいい」ふくよかな美紗が唐突にいった。「ゆみちゃんがわたしたちを疑うのはわかる。だったら、わたしたちの荷物を調べればいい」

三人の視線が美紗に集中した。

「他の二人はなんて言うのかは知らないけど。わたしの荷物は調べていいよ。何も出てこないんだから」その口調は自信たっぷりだった。

この言葉を聞いて、残りの二人も、手荷物検査を許可した。もともと、美紗のように堂々とした態度ではなかったが。

「わかったわ」雪美は心が締め付けられる思いがした。本当は他人の持ち物を漁るまねなどしたくはなかった。それが友人のものならなおさらだ。

しかし、その友人たちの中に盗みをはたらいたものがあるのだ……

手荷物検査は山も谷もなく進み、あっという間に終わった。結局彼女のUSBメモリは見つからなかった。次に雪美は三人のポケットを調べたが、これまた何も出てこなかった。

雪美は焦った。これでUSBメモリが見つかるかと確信していたのだ。彼女は道を誤り、泥のたまった落とし穴の中に落ちた気分がしてきた。三人の視線が矢のように鋭くなっているのは、雪美の気のせいではない。

「わたしが下に行っている間に、だれかここから出て行かなかった？ それか窓を開けなかった？」

雪美の命綱は「いない」の一言で片付けられた。

荷物の中にある。身につけてもいない。さらに、捨てた様子もない。だとしたら残る可能性はあと一つしかない。この調理室の中にあるのだ。

「だれかこの戸棚を開けなかった？」

「だれもないよ」吉江はうんざりした様子で答えた。

調理室には入り口側の壁に、二つの戸棚があり、各調理台には調理器具を収納するための戸棚あった。戸棚を開けていないとなると、搜索範囲はだいぶ狭まる。

雪美は床の上をくまなく探したが、USBメモリは見つからなかった。そもそもこれで見つかったも、だれが盗ったのかわからない。

だいたいなぜ自分がこんな目にあっているのだ？ 雪美は泣きそうになった。大声をあげてみんなを問い詰めたかった。しかし、それをやってしまうと、我慢している感情があふれ出し、自分が制御できなくなりそうで怖かった。

まだほかにUSBメモリが隠されている場所がありそうだったが、その隠し場所を考える前に、雪美の頭の中にある人物の名前が思い浮かんだ。

彼の最近の噂は聞いていた。雪美は、彼ならこの手の問題を何とかしてくれるはずだと強く思った。

「ちよつと待ってて！」

雪美はそういつと調理室、さらには公民館から出て、同じ学科の男友達に電話をかけた。

十三時三十二分、永久武の携帯電話が鳴った。

5・2・どこに隠した？

「えー、それでは、沙姫さんが推理小説同好会に入会することを祝って、乾杯」わたしは乾杯の音頭をとった。

小気味のいい音をたてながら、四つのグラスが触れ合う。

わたしたち推理小説同好会、通称すいどう会のメンバーは、大学の近くにあるファミレスで新しい入会者を歓迎していた。

彼女の名前は藤堂沙姫^{とうどうさぎ}。大学三年生、わたしより一年先輩であり、わたしの友人の姉でもある。彼女はつい五日前まではノベルス同好会に所属していた。しかし、ちよつとしたごたごたがあり、ノベルス同好会を退部。そして、退部したその日のうちに、すいどう会に入会を希望してきたのだ。

歓迎会は十二時四十五分から始まり、みんなが注文したメニューをつまみながら、和やかな雰囲気に進んでいった。

十三時三十二分、料理もなくなり、これからカラオケにでも行くかという話になったときだ。わたしのポケットの中にある携帯電話のコール音が響いた。わたしは携帯を取り出し、液晶画面に表示された名前を見た。

大田雪美。わたしは首を傾げた。彼女とは、携帯の電話番号とアドレスを交換するくらいは親しいが、頻繁に連絡のやり取りをするほどの仲ではない。その彼女が、休日になぜわざわざ電話をしてくるのだ？

わたしは戸惑いながら電話に出た。わたしが言葉を発する前に、相手のほうからぺらぺらと話し始めた。

「あつ、永久君。ちよつといいかな？ 今ものすごく困っていることがあるのよ。実はね、今、中町公民館にいるんだけど……」

「ちよつと待ってくれ。そんなに一方的に話されても困る。とりあえず何の用でかけてきたのか教えてくれ」

それから雪美はこれまでに起こったことをゆっくりと話し始めた。

料理研究会のメンバーで中町公民館に行ったこと。そこで恒例の料理会を開いたこと。途中でUSBメモリがなくなっていたこと。料理研究会のだれかが盗った可能性が高いこと。調理室を探してみたが、USBメモリが見つからなかったこと。

わたしはすべての話を聞き終えてから言った。

「それはとんだ災難だな」

「災難どころじゃないわよ。それで永久君に頼みたいことがあるんだけど……」

わたしはわざと鈍いふりをした。

「頼みたいこと？ いったい何かな？」

「今すぐここに来てUSBメモリを探してほしいわけよ」

ほらきた。予想したとおり、面倒な頼みごとだ。

「なんでわたしがそんなことをしなければならないのだ？」

「永久君、この前言ってたよね。『推理小説同好会は数々の難事件を解決するサークルに変貌した』とか、『事件が起こるたびに、わたしの華麗な推理が炸裂するのだ』とか」

わたしは心の中で舌打ちをした。余計なことを言ったものだ。

「確かにそうは言ったが、わたしにも予定があつてな。今はちょっと忙しい」

「お願い」雪美の声に力がこもった。

「やだ」即答であった。

雪美は何もいわなかったが、しばらくして電話の向こうから悲壮感たつぷりの声が聞こえてきた。

「うううう……うええええええええ」

「ええっ？」わたしは焦った。雪美は泣いているようだ。「ちょ、ちよっと待てよ」わたしはおろおろしながら答えた。

わたしの狼狽ぶりに気がついたのだろう。周りにいるほかのメンバーが、わたしに不審な視線を送ってきた。

「どうかしたの？」イルイが怪訝な表情で訊ねてきた。

「なんでもないんだ！」

わたしは電話の向こう側とこちら側で、板ばさみされてしまった。

「うええええええ」雪美は相変わらず泣き続けた。

「とりあえず、落ち着けよ」

「うええええええええ」

「心配するほどのことじゃないだろ？」

「うええええええええ」

わたしはついに折れた。

「わかったよ、すぐにいくよ！」

これが間違いだった。

「あつ、そうじゃあよろしく。今すぐ来てね。来なかったら厄介事を起こすから」

彼女がそう言うなり電話が切られた。雪美の最後の豹変ぶりに、わたしは呆然として携帯電話を眺めることしかできなかった。わたしは罨にかけられたのだ……あの女狐め！

わたしは憤然として立ち上がった。

「いくぞ」

「どこのカラオケ屋に行くの？」

沙姫さんが訊ねてきたが、わたしは暗澹^{あんたん}たる気持ちで答えた。

「中町公民館というカラオケ屋だ。もう予約しちゃった」

「へえ、そういうカラオケ屋さんがあったんだあ」イルイは、わたしのユーモラスな答えを真に受けた。それともボケ返しているのか？

「ちがう！ カラオケはキャンセルだ。中町公民館に行く」

「ええーっ、なんでさ？」

「中町公民館でちょっとした盗みが起こった。わたしと同じ学科の人がUSBメモリを盗まれて隠されたらしい。さっきの電話で助けを頼まれたんだ」

「それで、『行く』って言ったのかあ。急な頼みを引き受けるなんて、タケ君ってやさしいんだね」イルイは一人で納得して目を輝かせた。

「ああ……うん、わたしは紳士だからね」本当は嘘泣きにだまされ

たなんて、言えないな。

「じゃあ行つてこい。おれたちは先にカラオケ行ってるから」英知は無常にも突き放した。

「ちよつと待てよ！」わたしは焦った。「わたしに一人で行けというのか？」

「ああ、頼まれたのはお前だろ。おれたちは関係ない」

「それもそうね」と沙姫さんも同調した。

このままでは状況がどんどん悪いほうへ流れていってしまふ。女子二人はともかく、英知はうちの主戦力だ。彼がいなくて隠されたUSBメモリを見つけることができるだろうか？ 不安だ。

しかたない。ここは買収だ！

「英知、頼むよ。今度、たま屋のデラックスラーメン（千二百円、税込）おごつてやるから」わたしはこう持ちかけた。

英知はぴたりと動きを止めて、ゆっくりと首をわたしのほうに回した。

「今の言葉、忘れるなよ」

わたしは英知を正しい選択へと導いた。

というわけで、わたしと英知は公民館に行こうとしたのだが、イルイがいつもの「おもしろそう」という理由でわたしたち同行したがつた。これで公民館組が三人、カラオケ組は、組とはいえない沙姫さん一人だけになってしまった。

結局カラオケは後回しになり、全員で公民館に行くことになった。わたしは歩きながら、雪美からの話をみんなに説明した。沙姫さんは不満たらたらの文句を何度もつぶやいたが、イルイと英知は黙って歩いた。

中町公民館の前に来たわたしは、電話でいまましい雪美に到着を告げた。彼女は建物の中から出てきて私たちを迎えた。

「来てくれてありがとう」白々しい笑顔だ。

「USBメモリを盗られて、隠されたんだってな」わたしは無愛想にいった。「USBメモリには、無くなると困るデータでも入って

いるのか？」

「家のパソコンにバックアップがあるから問題ないわ」

ここで英知が割って入った。

「話を聞けば、今日はサークルのメンバーで料理をするために集まったそうですね。USBメモリなんて必要ないイベントだと思いますが、どうして持ってたんです？」

「ここに来る前に、必要だったのよ」雪美は詳しく説明し始めた。

「今度、学校の講義で、グループに分かれてプレゼン発表をしないといけないの。わたしたちのグループは『変形菌の特性と行動パターンの分析』をテーマにしてね。その試作版のプレゼンを、資料作成担当の人からもらいに行つて、そのときにデータを移してもらったのよ。データをもらった後に、こっちに来たからUSBメモリを持ってたのよ」

「そうでしたか」英知は納得した様子でうなずいた。

雪美さんはわたしたちを調理室へと案内した。

「ここが犯行現場か」調理室に到着するなりわたしはいった。「わたしたちが来ている途中で見つかった、なんてことはないだろうな？」

「ぜんぜん見つからないのよ。その三人にも手伝ってもらったんだけど、まったく見当たらないわ」雪美は両手を力なくあげてお手上げのポーズをした。

わたしは雪美のうしろに控える三人を順々に見てから、正体を明かした。

「どうも、料理研究会の方々ですか。わたしたちは推理小説研究会ですよ。今日は、大田さんに頼まれて（もとい騙されて）、彼女の力になるべくやって来ました」

彼女たちも自分の素性を明かしてくれた。

眼鏡をかけて、髪の毛を明るく染めた女性が、北川楓華さん。わたしに対して、おどおどしたしゃべり方をした。見た目はかわいいが、どうやら気が弱そうだ。

次に、ふくよか、というか丸い女性が岡本美紗さん。あまりおしやべりというタイプではなさそうだ。

最後に、小柄で活発そうな女性が、竹間吉江さん。三人の中では一番社交的だろう。しかし、礼儀作法はいまひとつだ。

「いったいどこにあると思う？ わたしのUSBメモリ」

「見つからないんだったら、この部屋にはないんだろ」わたしはきっぱりといった。

「じゃあどこにあるのよ？」

「君は気づいていないかもしれないが、二階にある部屋はここだけじゃないんだよ。あと一階にもいくつか部屋がある」

雪美はふんぞり返った。

「使用されていない部屋には鍵が掛かっているのよ。永久君は知らないと思うけど」

わたしは顔をしかめた。

「鍵が掛かっていない部屋は、ここだけなのか？」

「ええ、調理室は、わたしたちがあらかじめ予約しておいたから、公民館の人が事前に開けておいてくれたのよ。他の部屋は誰も使っていないから、わたしたちじゃ入れないのよ。まあ、入れたら入れたで、そこには知らない人がいることになるけど」

「他の部屋という可能性がないなら……トイレはどうだ？」

「なるほど、探してみる価値はありそうね」この案には雪美も乗り気だった。

「このトイレはいくつある？」わたしは訊ねた。

「一階と二階に男子女子トイレが一つずつ」

「じゃあ行くか」

雪美と、進んで志願したイルイは女子トイレを調べ、わたしは男子トイレを調べたが、わら一本分ほどの得るものすらなかった。完全な空振りだ。

「うーん」調理室に戻ったわたしは、ほかの考えを巡らせた。「ここに来る前にどこかで落としたんじゃないのか？」

「それは絶対にないわ。絶対にね」

雪美が自信たっぷりに否定するのでわたしは、彼女の証言を信じてみた。それから、今度は調理室の中を調べて回ることにした。雪美はそこらじゅうを調べまわったと言っていたが、見落とした場所があるかもしれない。

「本当に戸棚の中にはないんだろうな」わたしは念を押した。

「ええ、壁に並んでいるガラス戸の方はだれも開けていないわ。調理台に取り付けられている戸棚は、最初、料理器具を取り出すときに一回開けただけで、その後は、誰も開けていないわ」

これまた、雪美は自信満々で答えた。だが、わたしはすべての戸棚の中も丁寧に調べた。ボールをひっくり返し、なべの中を覗き、フォークとスプーン入れをかき回した。だが、目的のものは見つからなかった。

「無駄だつて」雪美がいらだった声でわたしを止めた。「わたしがいない間に、戸棚を開けた人はいないよ。三人ともそう言ってるんだから」

三人がグルでなければな、とわたしは思った。

ほかに隠し場所がないかと、部屋をうろついているときに、調理台に置かれた料理が目に入った。見るからにうまそうな豚汁。ごぼうの切り方が雑なきんぴらごぼう。見た目はよいが、わたしが嫌いな食べ物酢味噌和え。一口大の大きさにカットされた卵焼き。具が見えないほど衣がべつとりとついていて、眺めているだけで胸焼けを起こしそうなてんぷら。

どうやら、同じ料理研究会でも、そのなかでの実力差はかなりあるようだ。

そんなことを考えているときだった。あるものがわたしの目に留まった。

それは、美紗さんの姿だった。

この瞬間、わたしの脳内にこの世の理を照らす光が生じ、わたしを真実のもとへと導いてくれた。わたしにはUSBメモリの隠し場

所がわかった。どうやら今回は英知の出番はなさそうだな。わたしのほうが一足早く、この謎を解き明かしたのだから。

「みんな、ちょっといいか？」

すべての視線がわたしに集まった。

「どうした？ USBメモリが見つかったか？」沙姫さんはいつも通りの調子で言った。

「いえ、USBメモリは見つけてませんが、USBメモリを隠している場所はわかりました」わたしは誇らしげにいった。

「ほんと？　すごいじゃん！」雪美はその場で飛び跳ねてはしゃいだ。

「英知、今回はお前の出番はないぜ」わたしは誇らしげにいった。

「そうかい」英知の表情は穏やかだった。しかし、その顔の裏には、先に隠し場所を突き止められて、さぞ悔しい思いを隠しているのだろう。

わたしはみんなを周りに集めて、自分の推理を披露し始めた。

5 - 3 ・因果応報

調理室の空気は、叩けば壊れそうなほど、一気に張りつめたものになった。

わたしの周りにはさまざまな顔があった。期待に満ちた顔、興奮している顔、好奇心があふれ出ている顔、不安そうな顔……そんな顔を一通り見て、わたしは口を開いた。

「今回の事件は非常に不可解なものに見えます。しかし、それはまやかしだったのです。盗まれたUSBメモリは巧妙に隠されたわけではありません。むしろ単純なほど簡単に隠されたのです」

「でも、いろいろ探し回ったのよ。単純な場所に隠されてたなら、だれかが見つけているはずよ」雪美は素人くさい、もったもな意見をいった。

わたしは余裕の笑みでその疑問に答えた。

「ふふふ……その場所は犯人には馴染み深い場所ですが、そのほかの人たちには、目すらやらない場所です」

「いったいどこなのよ」雪美は答えを知りたくてうずうずしている。「ふふふ……まあ、そんなに焦らなくてください。物事の説明には順序というものがありますよ。」

まず、犯人の名前を言いましょう」

わたしはたつぷりともったいぶってから、彼女の名前をいった。

「USBメモリを盗んで隠したのは、あなたです！ 岡本美紗さん」わたしは、どーんと彼女にひとさし指を向けた。

周りにいるほとんどの人物は、ざわめきながら美紗さんを見た。しかし、当の本人はその無表情に近い顔を崩すことはなかった。

なるほど、この状況に追い込まれも平常心を保つとは、なかなか肝が据わっている、とわたしは思った。

「根拠は？」美紗さんは落ち着いていった。「なんでわたしがゆみちゃんのUSBメモリを盗ったと思っているの？」

余裕ぶっているのも今のうちだけだ。すぐにその仮面の奥に潜む、焦燥の素顔を白昼の元にさらけ出してやる！

「大田さんは、皆さんの荷物を調べ、身体を調べ、調理室を調べたが、USBメモリは見つからなかった、と言いました。文字通り、USBメモリは消えました。しかし、USBメモリが勝手に消滅するわけなのです。これにはちゃんとして説明がつきます」

わたしはここで言葉を切り、不敵な笑みを浮かべて美紗さんを見た。さあ、これで終わりだ。

「美紗さん、あなたはUSBメモリを今も持っているでしょう？」

あなたは簡易身体検査を潜り抜ける格好の隠し場所を備えています」

わたしは彼女に近づいて、彼女のポリウム満点の腹を触った。

そして確信をこめていった。

「この肉付き！ あなたはこの三段腹の肉と肉の間に、USBメモリを挟んで今も隠し持っているのだ！ さあ、観念してさっさと……」

美紗さんの身体が一步後ろに下がったかと思うと、次の瞬間には、彼女のゴム手袋をはめたような拳がわたしの顎を打ちぬいた。その巨軀きよくの割にはすばやい動きであった。

推定約九十キロの体重が乗ったパンチはわたしの意識を混沌とさせるには十分だった。わたしはひざから崩れ落ち、前のめりに倒れ地面に顔を打ちつけた。わたしは深い、深い闇の中にゆっくりと吸い込まれていった。

わたしは夢を見ていた。夢の中でわたしは真っ白な、何も無い部屋に閉じ込められていた。わたしはドアを必死になって叩いたが、叩けば叩くほど、ドアは壁と同化していき、ついに壁の中に埋もれてしまった。わたしは茫然として壁を眺めた。あきらめて振り返ると、いつの間にか部屋の真ん中に熊の石像が現れていた。

わたしは石像に近づいてそれを見上げた。その石像は熊から英知の姿に変わった。それから石像はどんどん姿を変えていった。英

知からイルイへ、イルイから沙姫さんへ、そして沙姫さんから雪美の姿になった。雪美の姿をした石像は地下に沈んでいった。石造があつた場所にはぼつかりと四角い穴が開いた。

わたしはその穴をじつと見つめていたが、穴から水が噴出した。わたしは右往左往したが水はどんどんあふれてで、あつという間に天井際まで到達した。わたしは空気を大きく吸い込み床にできた穴に向かって泳ぎだした。不思議と息苦しくはなかった。まるで自分が魚にでもなつたようだった。入り組んだ狭い水路をどんどん進むと開けた場所に出た。出口を探して十分ほどぐるぐるあたりを回って泳いだが、外に通じる道はなかった。

わたしが困っていたときに、だれかがわたしの名前を呼んだ。そのとき目の前がまばゆいばかりに輝き、わたしの体はゆっくりと浮上していった。

「武……武！」

目を開けると英知とイルイと沙姫さん、そして雪美がわたしの顔を覗き込んでいた。

「どうしたんだ、みんな？」わたしは言葉を発したが、頭はまだぼんやりとしていた。

英知はあきれた顔でいった。

「どうしたって、お前は倒れたんだよ。脳震盪を起こして」

「倒れた？ わたしが？」わたしはびっくりして訊ねた。「どのくらい寝てたんだ？ 一時間か？」

「二分くらいだよ」

二分？ もっと長い間意識を失っていた気がしたが、それがたった二分だというのか？

わたしは眼鏡が壊れていないことを確認すると英知とイルイに手を貸してもらって立ち上がった。それから、だんだんと記憶がよみがえるのを感じた。たしか、推理を披露して、それで美紗さんがやったことを暴露した。それから……わたしの意識はここで完全に覚

醒した。

「そうだ！ 思い出した」わたしは大きな声を出した。

美紗さんは調理台に片手をついて、ふてぶてしい表情でわたしを見ていた。

「みんなも見ただろう。彼女は追い詰められた拳句、わたしに手を上げるといふ暴挙に出た！」

わたしは勝利宣言を行ったが、英知がわたしの肩をつかんで黙らせた。

「まだいつか」英知は静かにわたしを諭した。「はつきり行ってお前は赤い鯁を追っているぞ」（赤い鯁、英語でレッド・ヘリング。推理小説の専門用語で偽の手がかりという意味がある）

わたしは信じられないという目で英知を見た。

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。美紗さんが犯人じゃないのか？」

「そうだ。彼女のお腹にUSBメモリはなかった。お前が倒れている間に確認済みだ」

わたしは全身の力が抜けて背中が丸まった。わたしの推理は外れたのだ。

なんとというか、自信満々で披露した推理が外れるとものすごく恥ずかしいな。ロジャー・シェリングムはすごいやつだと、改めて思う。（アントニイ・バークリーが生み出した探偵。主人公だというのに間違った推理をした拳句、ライバルやほかのキャラクターに事件の真相を暴かれる話がいくつかある）

「また振り出しに戻ったわけか」わたしは内心を悟られないように、平常心を意識しながらいった。

「推理小説同好会の会長も大したことはないわね」雪美さんは、失望の色を丸出しにしていた。

「大田さん、あなたは何もわかってませんね」わたしは反論した。

「何よ、そのえらそうない方。ご自慢の推理を豪快に外したくせに威張ってんじゃないわよ」彼女の口から出た言葉にはとげがあっ

た。

わたしは彼女の発言を無視した。

「わたしの手に負えない謎は、いつも彼が解決してくれる」そういつてから、英知を見た。「彼は推理小説同好会のエースだからな」

わたしは英知が早くUSBメモリの隠し場所を見つけてくれることを願った。なぜなら、わたしの推理がはずれたせいで、調理室に先ほども重苦しい停滞ムードが漂っていたからだ。

事実、料理研究会からは、こんな声も聞こえてきた。

「なあ、雪美。うちらいつまでここにおらなあかんの？」

「あたしも、夕方から用事があつて……いつまでもここにいるわけには……」

さらに身内からも裏切り者が出てきた。

「もう十分やったでしょ。そろそろカラオケいかない？」

このバラバラに分解しそうなみんなの意識を再びまとめたのは、やはり英知だった。

「待ってください」英知の声は氷のナイフのように鋭く、すきとおっていた。「最後に一つだけ、料理研究会の皆さんにお訊ねしたいことがあります。皆さんは一人で一つの調理台を使っていたのですよね。皆さんのなかで、手伝いをするためや、様子を見るために、もしくは、その他の理由で、別の人が使用している調理台に、一度でも近づいた方はいませんか？」

この問いには何の反応も返ってこなかった。英知はこの無反応を満足そうに受け止めた。

「わかりました」英知はにっこりと微笑んだ。「これではつきりしましたよ。雪美さんのUSBメモリの在り処が」

料理研究会のメンバーはざわついた。しかし、先ほどのわたしのことがあるので、真剣なざわつきではなかった。

「調理室をいくら探しても、USBメモリが出てこなかった理由は、わたしたちがUSBメモリを探していたからですよ」

英知の言ったことに対して、ここにいる英知以外の人間はぼかん

とするしかなかった。USBメモリが見つからない理由は、USBメモリを探していたから？

「英知、お前、何が言いたいんだ？」英知の意味不明な言葉は、呪^{ゆそ}のようにわたしの頭にこびりついた。

「そのままの意味さ。おれたちはUSBメモリがどんな外見をしているか知っている。というか、その外見が頭に定着している。そんな頭で探しているから見つけることができなかったんだ」

「は、はあ、そうか」わたしはまったくわからなかったが、とりあえず相づちだけは打っておいた。

「それで、どこにあるの？」わたしと同じように、困惑した顔で雪美が訊ねた。

この質問に、英知は行動で答えた。彼は雪美に背を向けて、すたすたと入り口から一番遠い調理台へと向かった。吉江さんがてんぷらを料理していた調理台だ。英知はクッキングペーパーの上に置かれた、油でギトギトのてんぷらたちを、手に取りながら一つ一つ丁寧に見た。

そして、その中から一つのでんぷらを拾い上げた。

「これはうまそうだなあ」英知はにこにこしていた。

あれがうまそう？

わたしは英知の美食感覚を疑った。あんなべつたりと衣がついたてんぷらがうまいわけない。スーパーマーケットのお惣菜売り場においてある、冷め切ったてんぷらのほうがまだ十倍ほどうまいだろう。

というより……英知は何をやっているんだ？

「おい、英知！ USBメモリはどこだ？」

英知はてんぷら片手にわたしの元にやってきた。

「はい」といって、英知はてんぷらを差し出した。

わたしはこの行動にむかつとした。

「何が、はい、だ。わたしはUSBメモリはどこにあるかと訊いているんだ」

わたしにすごまれても英知は余裕を崩さなかった。

「だから、はい」英知はてんぷらをわたしの目の前にかざした。いいかげんいらして、そのてんぷらを払いのけようとしたときだった。後ろのほうで妙なうめき声が聞こえた。わたしは反射的に振り返った。わたしの視界には料理研究会の面々がいる。しかし、その中の一人、吉江さんだけは尋常ではないほど顔が青ざめていた。てんぷらを作ったのは、彼女だったはずだ。

彼女の顔を見たとき、わたしは脳みそを電流で貫かれたような気がした。それから、急いで英知の持っているてんぷらを奪い取り、分厚い衣をぼろぼろと剥ぎ始めた。

剥いているときにわかったのだが、このてんぷらは、油で揚げたあとに、さらに衣をつけて、もう一度、油で揚げていることがわかった。

分厚い衣から中身が出てきた。

わたしの手は自然と震えた。

そのてんぷらの具は、白いUSBメモリだった。

次の瞬間、雪美の手が、吉江さんの手首をがっしりとつかみ、ぎりぎりと締め上げた。

「マヨマヨだったのね」このときの雪美は般若のような顔をしていた。「どういうこと？ 何であんなことしたのか説明して」

「いたたた！」吉江さんは痛みで身をよじった。「か、堪忍して。

うちはただ、頼まれただけや」

「だれに？」抜き身の刀を髭髯ほっぺとさせる声だった。

「あ、あんたの彼氏や！」吉江さんは、子犬がほえるようにいった。

雪美さんはぱつと手を離れた。

「淳じゅんが？」彼女の顔には驚きが広がっていた。

「そ、そうや」吉江さんはつかまれていた手首をさすった。

「淳がわたしのUSBメモリをあんな風にしろって言ったの？」雪美さんは、油で熱されて、しわしわになった、哀れなUSBメモリを指し示した。

「い、いや。油で揚げるとは言われてないんよ。ただ、今日、みんなが集まる前に、淳はんから電話があつてな。雪美の鞆の中に白いUSBメモリがある。二万円出すから、それをばれないように盗めといわれたんよ。もし、雪美がUSBメモリがないことに気がついたら、雪美に気づかれないうちに捨てるといわれてん。でも、あんなにはようにばれるとは思わんかったから、捨てる場所が見つからなかったん。それで、その場のひらめきで、てんぷらにして、わからんようにしたわけよ」

「なんで淳は、そんなことをあなたに頼んだの？」

「理由はいわんかった」吉江さんは半べそをかきはじめた。

「あのー」わたしはおずおずと訊ねた。「その淳って人はいったい何者ですか？」

「さつきも言つたように、わたしの彼氏。あと、最初に言つた『変形菌の特性と行動パターン』のプレゼンを作ってくれたのも彼よ。まったく、なんでこんなことを……」

英知は静かに言った。

「理由は本人に訊けばわかると思いますよ。二万円相当の動機が出てくるはずですよ」

男は時計を見ていた。現在、時刻はきっかり十五時。吉江はうまくやっているだろうか。

連絡先を知っている人がたまたま料理研究会にいたのは助かった。同じサークルのメンバーなら怪しまれることなく、雪美に近づくことができる。あとは吉江が隙を見て、雪美の鞆からUSBメモリを取り出すだけだ。はたして吉江はうまくいっただろうか。

男は成功した後のことを考えた。まず最初に頭に浮かんだことは、吉江に報酬を払わなければならないということだった。男は顔をしかめた。二万円、さすがに予想外の大きな出費だ。しかし、あのデモムービーを雪美に見られることに比べるとかすり傷にもならない。男は事の発端を思い返した。すべては、あのバカな妹のせいだ。

あいつの礼儀が正しければ、事態はここまで複雑にはならなかったのだ。

昨日の夜中の二十三時が始まりだった。

男は試作版のプレゼン資料を作り終え、雪美に明日、データを取りに来てくれるように連絡した。雪美は十時二十分にくると返信してきた。プレゼンのデータは、グループのみんなで検討して、改良を加えてよりよいものにするつもりだった。

すべての作業を終えた男は、インターネットからお気に入りのゲームブランドのホームページを覗いた。そこに新作ゲームのデモムービーがあつたので、男はそれをダウンロードして、ヘッドフォンをつけてそのデモムービーをこっそりと再生した。なぜこっそり再生したかというと、そのゲームというのが、俗に言うアダルトゲームで家族に見られては非常に都合が悪いのだ。

ドアをノックされたのは、男がデモムービーを見てるときだった。男が返事をする前に彼の妹はドアを開けて部屋の中に入ってきた。タイミングとしては間一髪だった。彼の妹がドアを開けて顔の覗かせる前に、男はメディアプレイヤーを閉じていた。

だが、これで危機が去ったわけではなかった。彼の妹は、自分のパソコンの調子が悪いから、男のパソコンを使わせてほしいといい始めたのだ。男が「だめだ」というと、妹は男のそばに寄ってきた。男は、ダウンロードしたファイルがいつもデスクトップに保存されるように設定をしていた。だから、妹が男のパソコンを覗き込んだときに、淫乱な文字が並び、デモムービーのフォルダを見られる可能性があつた。男はそのフォルダをすぐ近くにあつた別のフォルダに移して、妹の目に触れないようにした。デモムービーを隠したフォルダこそ、プレゼンデータが入っているフォルダだった。

男と妹はパソコンを巡って少しだけもめたが、ついに男のほうがあきらめて譲ってやることにした。妹は男のパソコンでネットサーフィンをして、男は一階でテレビをみた。妹が男にパソコンを返したのは、一時間も経ったあとだった。そのときには、男もだいたい眠

くなっていて、これ以上パソコンと向き合う気はなかった。男はパソコンの電源を落としてさっさと寝てしまった。この時点で悲劇の歯車はもうとめられないところまできていた。

翌朝、男は十時に目を覚ました。雪美は十時二十分に来るといつていたので、男は急いで身支度をした。このときには、もう、アダルトゲームのデモムービーのことなど頭になかった。雪美は時間通りにやってきた。男は自分の部屋に彼女を通して、USBメモリにプレゼンのデータを入れてやった。このときパソコンの画面に注目していなかったのは最後の失敗だった。男は、ベッドに腰をかけている彼女と、たわいもない話をすることに集中していて、データがUSBメモリにコピーされている間、パソコンの画面を見ていなかった。もう少し、画面に注意を払っていたら、男はコピーの時間が異常に長いことに気がついたはずだ。途中でコピーをキャンセルして、密かにデモムービーのフォルダを消去できたはずだ。男は最後のチャンスを逃した。

雪美のUSBメモリに、アダルトゲームのデモムービーも一緒にコピーされたことに気がついたのは、雪美が帰った後だった。あのときの絶望感は、生涯忘れることはないだろう。初めて気がついたときのショックで、全身の血が凍りつき、心臓は狂ったような鼓動を打ち、目の前が暗くなった。あのデモムービーが、雪美の目に触れられると思うと、生きた心地がしなかった。軽蔑されるどころではすまない。

しかし、そこからのリカバリーは上出来だった。窃盗という行為に良心が痛んだが、ほかに手がなかったのだ。自分がアダルトゲームに興味を持っていることを雪美に知られたら、彼女の態度は氷のように冷たくなるだろう。背に腹は変えられない。

吉江はまさに神の助けとしかいいようがなかった。本当についていた。人に任せるのは少々不安だが、男自身が中町公民館に行くよりは百倍安全な方法だ。

いろいろなことを考えているときに、男の携帯電話が鳴った。液

晶画面が映し出した名前は竹間吉江だった。

きつと成功の連絡だろう。男は心躍る気持ちで、電話に出た。

「よお、うまくやったか？」

「教えてもらおうかしら、わたしに何か恨みでもあるの？」氷のようにつめたい声が聞こえてきた。

男は固まった。雰囲気はぜんぜん違う。だが、間違いなくこれは雪美の声だった。

「吉江は失敗したわ。あんたのことも全部吐いてもらったわよ。わたしが聞きたいのは、どうしてあなたがわたしのUSBメモリをほしがったか、ということよ。おかげでわたしのUSBメモリ、てんぷらになったんだから」

てんぷら？ いったい何をいつているのだ？

「まあ、理由は直接会って訊こうかしら。あと十五分でそっちにくから」

そう言い残して、電話が切られた。途中でわけのわからない部分はあった。しかし、今一番重要なのは、あと十五分で彼女が来ることだ。

あと十五分で彼女が来る。男は何も考えられなくなった。希望の門は完全に閉じられ、極寒の風が吹いている北極にほおりだされた気分になっていた。携帯電話が男の手からすりりと抜け出し、むなしい響きをたてて床に落ちた。

男はその場に崩れ落ちて両手をぎゅっと握り合わせて何度も何度もつぶやいた。

「神様助けてください……どうかおれにいい知恵を授けてください

……お願いです……神様……」

6 - 1 . 穴 < 前編 >

それはある日の、昼時のことだった。

わたしとイルイは学食で、期間限定メニューのいわしつみれ丼と一緒に食べた。そのどんぶりを一口食べた瞬間、後悔の念がわたしを襲った。かけそばのほうが、安くてうまかった。しかも、腹が立つことに、イルイはうまそうにそれを食べるのだ。

不幸な昼食を終えたわたしとイルイは、サークル棟に続く坂道を下りていた。そのとき、イルイが彼女を見つけた。

「あつ、武君。あそこ見て」彼女は坂の下のほうを指差した。

わたしはイルイの指先延長上にいるその人物をみた。わたしはため息をついた。いや、この言い方は正しくない。ため息がわたしの口から自然と漏れた。

坂の下にいた人物、それは鈴本ほのかだった。

彼女は、容姿端麗、クールビューティー、清らかな水に浮かぶ睡蓮、などの言葉が似合う女性だ。ただし……外見だけ、の話だ。

彼女の頭の中は、暗い宇宙の端のぐにやぐにやしたものに近い。

つまり、霊界！ 宇宙人！ 精霊！ U M A ! 超常現象！ というような、科学的に見ても曖昧なものに、彼女は関心を寄せている。彼女は大学に入学すると、オカルト研究会なる胡散臭いサークルを勝手に立ち上げ、日々独自の研究をしている。そして、彼女がひとたび口を開くと、常人ではとてついていけないような、オカルティックな話をマシンガンのごとく相手にぶちまけるのだ。黙っていれば美人なのにもつたいない。もつたいないなあ。

ちなみに、まことに不本意なことであるが、わたしたちと彼女は知り合いである。彼女とは過去に一度、ある騒動で行動を共にしたことがあった。その期間は長くはなかったが、彼女の言動を聞き続けたわたしの脳みそは危うくとけ出す寸前だった。だから、その騒動のあとでわたしは思った。できることなら二度と彼女に会わない

ほうがいい、と。

それなのに、今まさに悪夢が再来しようとしていた。

「よし、今日は帰るか」わたしは回れ右をして彼女から遠ざかろうと試みた。

しかし、相手のほうが早かった。

「あら、いつかの推理小説研究会の人たちじゃない！」

見つかった！ 彼女はわたしたちのところへ駆け寄ってきた。

「久しぶりねえ、一ヶ月ぶりくらい？」

「ええ、そのくらいだと思いますよ」

「今、ひまかしら？」

わたしは警戒心を募らせた。「今、ひまか？」この問いにイエスと答えると、胃が荒れる時間が訪れるに決まっている。適当な理由をつけてノーの言おう。

「うん、わたしたち、もう今日の講義が終わったから時間あるよ」イルイの突然の裏切りであった。

なんてことを言うのだ、こいつは！ わたしは心の中で叫んだ。

「ちょうどよかった。実は見てもらいたいものがあるのよ」鈴木ほのかはねつとりとした笑顔でいった。

「見てもらいたいもの？」イルイは首を傾げた。

わたしが予想するに、彼女の言う、見てもらいたいものは、まともなものではない。きっと、鬼の頭の角の化石だとか、古代ピグニ―人が使っていた石槍の先だとか、そういう見ても理解できないものだろう。

「それで、何を見せてもらえるんですか？」好奇心旺盛なイルイは、こういったものでも大歓迎だろう。

わたしは鈴木ほのかが、イルイの問いに高らかと答えるだろうと予想した。しかし、鈴木ほのかには、前に会ったときのような自信に満ちたエネルギーは感じられなかった。彼女はのろのろと話し始めた。

「それがねえ、わたしにもよくわからない代物なの。始めてみるパ

ターンの未知的創造物だね。はっきり言って、あれが人為的に作られたものなのか、宇宙人の手によって作られたものなのか、判断に迷っているのよ」

迷う必要はない。後者ではないことは確実だ。

「それで、わたし以外の人間にそれを見てもらって、その正体を予測してもらいたいのよ」

「だから、わたしたちにその創造物を、人間が作ったのか、何か他の知的生命体が作ったのかを判断してほしい、というわけですか」
わたしは鉄の棒みたいに無機質な声で答えた。

鈴木ほのかは微笑んだ。「話が早くて助かるわ」

こんな不毛なことに付き合ってられるか。鈴木ほのかについて行くくらいなら、家に帰って、『のんべえ戦士シュランダー』の再放送を見ているほうが、一億倍は身のある時間が過ごせる。

「悪いが、そういうことでは力に慣れそうにない。ほかを当たってくれないか？」わたしは当たり障りのない返事をした。

彼女はどこか遠くのほうを眺めながら言った。

「ほかに、頼める人がいればいいんだけどなあ」

鈴木ほのかの顔には、悲しげな影ができていた。

わたしは、そんな彼女を見て心が痛んだ。なんて悲しそうな顔をするのだ。このとき、わたしは始めて、今までの自分が、鈴木ほのかの一面しか見ていなかったことに気づいた。わたしの知る鈴木ほのかは、美人だが、オカルトに傾倒している女。それだけだ。容姿は見ればわかるわけだから、実質、わたしが知っていることは、彼女がオカルト好きということだけだ。彼女の人間関係についてはまったく把握していなかった。さっきの反応だと、友人と呼べる存在がいないのだろうか？ もしそうなら、彼女はなんと哀れなのだろう。

わたしは気まずい雰囲気払いのけるように言った。

「まあ、あれだ。ほかに当てがないなら、わたしたちでもかまわないがな」

「本当？」彼女は目を輝かせてわたしを見た。

「ああ」

「じゃあ、一緒に見に行ってもらいましょうか」

「それで、あんたの言う未知的創造物とはいったいなんだ？ わたしたちにもわかるようにシンプルに答えてくれ」

彼女の答えは一言で十分だった。

「穴よ」

鈴木ほのかは、わたしたちを穴のある場所に案内しながら、自分が見つけたものを説明してくれた。

「サークル棟の南側に山があるでしょ。そこに穴があったのよ」

「どんな穴なの？」とイルイ。

「普通の地面に掘られた穴よ。それが六つ、近い場所にまとまって掘られていたのよ」

わたしは帰りたくなかった。ただの穴？ それが六つあるからどうだというのだ？ しかし、協力するといった手前、実物も見ないうちに帰るわけにはいかない。わたしは心の中で、ため息をついた。

問題の山は、緩やかな坂道から登ることができた。道は舗装されていなかったが、人が三人並んで歩けるほど広がった。道の周りにはたくさんの木々が生えて、日の光を遮っていた。地面には茶色の落ち葉が絨毯のように敷き詰められ、土を覆っていた。鳥の鳴き声が聞こえてきたが、鳴き声の主の姿を目にすることはなかった。

「ところで、あんたはどうしてこんなところに来てたんだ？ 新しい心霊スポットの開拓でもしてたのか？」わたしはいった。

「違うわよ。講義のレポートでキノコを探する必要があったのよ」

「キノコ？」

「大学近辺に自生しているキノコを探して、その名前と、キノコの基質となっているもの、まわりの環境とかを、フィールドワークで調べるの。で、調べたことをまとめてレポートにして出す、という課題よ」

「あんだ、ちゃんと講義に出てたんだな」わたしはさらりと失礼なことをいった。

「どういう意味よ？」鈴木ほのかはむっとした。

「そのままの意味だ。あんたは四六時中、オカルト関係のことに没頭していると思っただけだよ」

「失礼しちゃうわね……着いたわ。そこよ」

目的地には意外と近くだった。山道に入ってから、一分経ったか、経たないかくらいの場所が目的地というわけか。緩やかな坂道の右側に、あまり木が生えていない開けた場所があった。広さはおよそ十メートル四方だろうか？　だが、ここでは広さは関係なかった。その広場にも落ち葉があるのだが、奥のほうに落ち葉を掻き分けた後があった。その部分だけは黒い地面が覗いていた。

「わあ、ほんとに穴が開いてる」イルイは声を漏らした。

地肌が丸出しの場所に近づくと、はつきりとその存在がわかった。

穴は確かにあった。しかも鈴木ほのかが言ったとおり、六つの穴が開いている。

わたしは穴に近づいて、一つ一つを丁寧に調べた。大きさはどれも似たり寄ったりだ。穴の直径は四十から五十センチか？　ものさしがないとよくわからないな。まあ、小さいサイズで五十センチ、大きいので八十としておくか。深さは、大体三十センチほどだろうか。まさに穴としか言いようがない穴だ。

「どう？　宇宙からのメッセージかしら？」鈴木ほのかはおもしろそうに訊いてきた。

「ちがう」わたしは彼女のくだらない質問を一蹴した。

「なるほど、それじゃあ、土の精霊（ノーム）がやったと言いたいわけね」

わたしは発狂しそうになったが、寸でのところでブレーキが利いた。

「なぜそうなる！　人間の仕業に決まってるだろう」というか、一

ヶ月前も同じやり取りをしたような気がするぞ。

「はいはい、やっぱりあなたは常識的な考え方しかできないわけね」
「ほかにどんな可能性があるというのだ？ これは誰かが掘った穴だ」

「じゃあ」鈴本ほのかは、口角を上げていった。「だれが何のために穴を掘り起こしたのか、説明してくれない？」

わたしは頭を掻いた。だれが、何のために穴を掘ったかなんて、訊かれるまで考えもしなかったことだ。

「なんでそんなこと説明しなきゃならない？」

「人が掘ったなら、必ず何かしら理由というものが存在するはずよ。それが説明できなきゃあ、この穴は人為的に作られたものじゃないわ」

なんとという屁理屈へりくつ！ この女は口から生まれてきたのか？

「じゃあ、ちよつと待て。今から考える。イルイも手伝ってくれ」

「うん。いいよ」イルイはニコニコしながらうなずいた。

わたしは目の前に広がる光景に集中した。穴が六つ。穴と六つて形が似ているな。

「気づいたことがあるんだけど……」イルイは神妙な面持ちでいった。

「なんだ？」

「穴と六つて、漢字で書くと似てるよね」じつに無邪気な答えだった。

なるほど、他人の振り見て我が振り直せとはこのことが。わたしは「うん、そうだな」と適当な返事をしておいた。

さて、改めて考え直すでしょう。人はどんなときに穴を掘るのか？ ペットの死体を生めるときだ。わたしも昔、飼っていた金魚が死んだときに、土に埋めたものだ。だがこれは違う。何かを埋めるために掘った穴なら、埋められていなければならぬ。このように、掘りっぱなしになることはない。

穴を掘る目的、他にどんなことがある？

「なあ、イルイ。人が穴を掘る理由って何がある？」わたしはイルイに訊いた。

「石油を見つけるため」イルイは至って普通に答えた。

「そんなことじゃないよ！確かに掘ってるけど」

「うーん、そんなに思いつかないよ。だいたい日常生活で穴掘ることなんてないし」もつともな答えであつた。

しばらく停滞した沈黙が続いたが、わたしは一番ありえそうな可能性をいった。

「もしかしたら、これは罨かもしれない」

「罨？何を捕まえるための罨なの？」イルイは眉をひそめた。

「小動物」わたしは漠然とした答えを言った。

「違うんじゃない？」とイルイ。

「わたしもそんな答えじゃ納得しないわね」鈴木ほのかも同じことを言った。

一番ありそうな答えでこの反応か。やれやれだ。

「イルイはどうなんだ？何か考えは浮かんできた？」

イルイは着眼点を変えた答えを出してきた。

「これはたぶん。穴が六つあることに何かしら意味があるんじゃないかな」

わたしはイルイの言ったことがよくわからなかった。

「どういうことだ？」

「うん、つまりね。これは暗号の一種なのよ」

「暗号だつて？どこをどう解釈したら、うどんでカルボナーラを作るような発想が出てくるんだ？」わたしはあきれた。

「賛成してくれないみたいね」

「いったい、六つの穴でどんな暗号ができるといふんだよ？」

「今度地元でやる競馬の第六レース、穴馬に賭ける」

「ほほお、まあ及第点だなあ」予想以上の解答にわたしは感心した。

「ほら、いろいろ考えられるでしょ」

確かにイルイの言うとおりがもしれない。

わたしも何か暗号ができないかと考えることにした。穴が六つ。あなろく。アナログ？　そういえば、デジタルテレビを早く買わないとな、などと結局関係のない着地点に到達してしまった。

わたしはいろいろな組み合わせを考えたが、結局、いいアイディアは思い浮かばなかった。やはりこの穴は、暗号ではないのではないか？

考えれば考えるほど、わけがわからなくなってきた。たかが穴だというのに……

「お手上げかしら？」　鈴木ほのかが退屈そうに訊いてきた。わたしは迷わずいった。

「保留だ。今日一晩考える。それで、明日答えを聞かせてやる」

「まあ、いいわよ。明日用意してきたのが、満足な答えじゃなかったら、わたしが独自の調査を始めるだけだから」　鈴木ほのかはその条件を飲んだ。

「じゃあ、明日の十七時に、あんたたちのサークル室に行くから」　そう言って彼女は去っていった。

「改めて思うと」　わたしは遠い目をした。「くだらないことに頭を悩ませることになったなあ」

「明日までにいい解答が用意できるの？」　イルイの顔は、飲み会で泥酔した酔っ払いの帰路を心配する人の、それに似ていた。

わたしはその質問にはあえて答えなかった。いうべき言葉は何も見つからなかった。

森の中にある広場を去る前に、わたしはもう一度、穴が掘られている一角を見た。そこには、六つの穴と、地肌をさらした地面、そのまわりを囲む落ち葉だけが目についた。

この時点で、わたしは穴が掘られた目的がわからなかった。

しかし、あとの話になるのだが、英知は、穴の周りの光景を見て、たった十秒で答えを導き出した。

6 - 2 . 穴く後編>

わたしとイルイは山から出たあと、サークル室に行き、再び穴の正体を推測しあった。だが、この作業は難関を極めた。フェルマーの最終定理並みに難しい問題だ。

「結局これは」わたしは重々しい口調で言った。「判断材料が少なすぎる。穴ができた理由なんて、考えれば一億通りの可能性があるだろう」

「一億は多すぎるよ」

「じゃあ百万通りだ」

「せめて一万通りくらいでしょ」

「イルイ、わたしたちは人が穴を掘る可能性がいくつあるかを推測しているのではない。少しくらいの誇張をいちいち正さなくてもいいんだ」

「結局何もわからないから、こんなコントみたいなことをしてるんでしょ」

わたしは無銭飲食者のように開き直った。

「わかつているじゃなか。その通りだ。つまるところ大学の敷地内に、たかだか六つの穴ができた理由なんて、アカシックレコードにアクセスしない限りわかりはしないんだ」

「あかしつくれこーど？ なにそれ？」

「グーグル先生に聞け」

改めて思い返して見れば、穴ができた理由など、考えるに値しないことだ。そのことを考えるなど、時間の無駄以外のなにものでもない。賢者は時間をもっと有効に使ってしかるべきなのだ。

「でも、明日の十七時にほのかさんが答えを聞きにやってくるよ。そのとき、何て答えるつもり？ わからなかったっていうの？」イルイがいった。

無論、わたしには、鈴木ほのかに「わからない」と伝える気など、

さらさらなかった。そんなことをするなんて敗北宣言に等しいことだ。

「心配するな。彼女が納得する適当な理由をでっち上げればいい話だ」わたしは静かに笑った。

「ものすごい邪悪な笑顔になってるよ」

「知的要素を含んだ鋭い笑みと呼んでほしいね」

「知的要素なんて微塵も見えないんだけど」

「じゃあ、君には眼鏡かコンタクトレンズを買うことをオススメしよう」

わたしは余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）に振舞った。切羽詰った精神では独創的な発想は生まれない。晴天無風の精神状態になって初めて、人間は己の頭脳を最大限に使用できるのだ。

「さて、改めて訊こう。人間はどんなときに穴を掘る？」

「落とし穴を作るとき」

「ほかに？」

「トリユフを探すとき」

「日本にトリユフはない！ もっと別の考えはないのか？」

「タイムカプセルを埋めるとき」

「ほかは？」

「わかんない」

さきほどイルイが挙げた三つの可能性では、鈴木ほのかを納得させることは不可能だなと思った。わたしはイルイに見切りをつけ、己の知識の泉の中をさらい始めた。もっと説得力のある仮説はないのだろうか。

わたしが思案していると、サークル室のドアが開かれて、沙姫さんが悠然とした様子で入ってきた。

わたしは唐突に訊いた。

「沙姫さんは地面に穴を掘ったことありますか？」

彼女は、わたしの問いかけに眉をひそめた。

「なにそれ？ 新手のあいさつ？」

「純粋な質問ですよ」

「穴を掘ったかだなんて、いったいどういう風の吹き回しかしら？」

「わけは後で話しますから、とりあえず答えてください」

「まあ、穴掘りは小さいことにやってたわね」

「穴掘りの目的は？」

「目的？　たいしたことじゃないわ。カブトムシの幼虫を探していたのよ。昔は馬鹿みたいなことに情熱を注いだものね」

沙姫さんの回答は、わたしの知識の泉に鉄の斧を投げ込むようだった。鉄の斧は瞬く間に金の斧と化した。

「カブトムシの幼虫！　そいつはすばらしい」

「はあ？　あんたさつきからおかしいわよ。とうとう狂ったの？」

「いえ、今日のわたしはふこぶる調子がいいですよ。いつも以上です」

「今日が普通で、いつもが異常なわけか」

「そんな言葉遊びは脇にどけてください」

沙姫さんは席についてたので、わたしは今日あったことを彼女に説明した。

「ふーん、つまりあんたは、鈴木さんを納得させるための仮説を組み立てたかったわけなのね。それでわたしにも、穴を掘りの経験を話させたということか」

「ええ、それでカブトムシの幼虫を探して穴を掘った説を採用しようと考えているんですよ」

「そんな適当な話でいいわけ？　鈴木さんがどういう経緯でその考えに至ったかを訊きたがったらどうする気？」

「さて、偽の目撃者でも用意しましょうか」問題ないという感じでわたしはいった。

「偽の目撃者？　そんな人どこから連れてくるのよ？」

わたしは沙姫さんをじつと見た。

「沙姫さんにお願ひしましょうか」

「はあ？　身内から用意するつもり？」

鈴本ほのかは、沙姫さんが新しくすいどう会に入会したことを知らない。だから、彼女にとって、沙姫さんは第三者でしかありえないのだ。

「鈴本さんと沙姫さんは面識ないでしょう。だったら問題ないですよ」

「あんたやることが姑息ね」沙姫さんはあきれた様子だった。

わたしは沙姫さんの言葉に少しばかり反応した。姑息と言われたまま黙っていれば、永久武の名が廃るというものだ。わたしは脳みそをこねくりまわして、すばらしい反論を考えた。

英知が登場したのはそんなときだった。彼は煙のように音もなくサークル室に入ってきた。わたしが気づいたときには、彼は沙姫さんの隣に立っていた。

「おい英知、いつの間に来たんだ？」

「お前がなにやら深刻な顔でうなっていたときだよ」

「わたしはうなっていたなどいなかったぞ」

「だけど今にも、消化不良を起こした犬みたいにならだしそうな表情だったよ」

わたしは目の前で手を振って、くだらんことを言うなよと身振りで示した。

英知は椅子に腰をかけて、わたしのほうを見た。

「それで、何を考えていたんだ？　また事件性のある問題でも転がり込んできたのか？」

わたしは首を振った。

「そう、毎週、毎週、事件的なことがすいどう会に持ち込まれてくるはずないだろ。今回は想像力の翼を広げるための体操みたいなものだ」

英知は肩をすくめた。

「何を言っているのかさっぱりわからない」

仕方ないので、わたしは最初から説明した。鈴本ほのかに会ったこと、彼女に連れられて、謎の穴を見に行ったこと、彼女になぜ穴

が掘られたかを教えることになったこと、そして、みんなでいろいろな案を出し合ったことを説明した。

英知は黙って耳を傾けてくれていたが、話を聞き終わると開口一番にこう言った。

「カブトムシの幼虫を探すために穴を掘ったなんて考えられないよ」わたしは渋い顔をした。「まあ、そうかもしれないが、ほかにそれらしい可能性がないんだよ。はっきり言って今まで出た仮説の中で、その可能性が一番高い」

「ほかに可能性がない、というより、単に思いつかないだけだよ」まったく簡単に言ってくれる。

「『思いつかないだけ』だなんて、今日一日、脳みそに有給休暇を与えているお前にだけはいわれたくない台詞だよ」

「おれの脳みそは、盆と正月以外は年中無休だ。よし、ここは一つ、おれもその穴ができた経緯とやらを考えてみようじゃなか」

「それはいいね」わたしは言った。「どうだ？ 実際の穴を見てみるか？」

英知は小さく二回うなずいた。

「もちろんそれがいい。百聞は一見にしかず。穴のある場所にまで案内してもらえるかな」

「いいとも」わたしは一も二もなく引き受けた。

イルイと沙姫さんはサークル室に残るといった。イルイは「面倒くさい」という理由で、沙姫さんは「興味ない」という理由でその場に留まった。

女子二人を残して、わたしと英知は問題の山の中に踏み入った。目的地は、わたしたちの労力を消費させるには近すぎた。英知は「もう着いたのか？」と炭酸が抜けたような声で言った。

わたしは天然広場の隅のほうを指差して「あれだ」とだけいった。英知は六つの穴に近づいて、その様子を見た。わたしも改めて見た。

「お前たちが見たときとまったく同じ状態か？」

「ああ、寸分たがわぬ状態さ」わたしはきっぱりと言った。

わたしには絶対的な考えがあった。英知が、穴ができた経緯に対していくら頭を絞ろうとも、結局はあいまいな推測しかできやしない。この場所にできた六つの穴だけを頼りにはつきりとした答えを組み立てるなど、鳥取砂丘の中から一粒の砂金を見つけるようなものだ。まったくもって不可能だ。

英知は穴を見て、あたりを見て、そして体を百八十度方向転換させてわたしを見た。それから彼の言った言葉は単純明快であった。「わかったぞ」

しかし、わたしはこの単純明快な一言を脳みそに浸透させるまでに、十数秒の時間を要した。わたしはあえぐような口調でようやく言葉をひねり出した。

「わ、わかった？ 何がわかったんだ？」

「この穴がどうして掘られたのが、わかったって言ったんだよ」彼の口調には興奮も高揚もなかった。事実を淡々と伝えているだけだった。

「冗談はよせよ。お前はいつからアカシックレコードにアクセスできるようになったんだ？ ん？」

「穴ができた経緯を知るのに、アカシックレコードなんてスピリチュアルなものじゃない。ただ見ればわかることじゃないか」

ただ見ればわかる？ 今、英知は、「ただ見ればわかる」といったのか？ 冗談はほどほどにしてみらいたいものだ。

「見ればわかるとか、あまり適当なことを言うなよ」

「そうか、なら言い換えよう。そこそこの観察眼があれば、すぐにわかるさ」

わたしの胸の中に、そんなバカなという思いが広がった。本当にこの六つの穴を見ただけで、穴が掘られた経緯がわかるというか？

英知を両手を広げて、穴がある広場の一角を強調した。

「ここに穴が掘られた場所がある。さて、何が足りない？」

英知がいきなりなぞなぞめいたものを提供してきた。

「足りないもの？ そんなものがあるのか？」

「わからないか？」

「わからんなあ」

「じゃあ逆の質問をしよう。穴が掘られた場所の周りには何がある？」

「穴がある」

「ほかは？」

「地面……あとは落ち葉だ」

「ほかに？」

「ほか？ ほかに……落ち葉や土の中にいる、何万という目に付きにくい小さな虫の命だ」

「答えは目に見えるものだけにしてくれ」

わたしはよく目を凝らした。

「……もうこれ以上は何もないだろ」わたしは不機嫌気味にいった。
「あるのは、穴と地面と落ち葉だけだ。それ以上は何もない」

英知はため息をついた。

「はあ、木を見て森を見ずとはこのことだな。いいか、そこには穴と地面と落ち葉しかないんだ。この場に、致命的に足りないものがある」

わたしはついにさじを投げた。

「いったい何が足りないって言うんだ？ まさかスコップだとか言い出すんじゃないだろうな？」

英知ははつきりと、毅然とした様子で言った。

「土だよ。掘り返した土」

わたしのささくれ立った心は、麻酔薬を投与されたかのように落ち着いた。

「つち、だと？」

「穴を掘ってそのままにしているなら、当然、地面を掘り返したときに出てきた土が、そこら辺に放置されているはずだろ。それがな」とはどういうことか？ まあ、深く考えるまでもなく、ここを掘

り返した人物が土を運び去ったという答えに至る。

つまりな。この穴を掘った人物は、穴を掘りたかったんじゃない。ここの土がほしかったんだよ」

英知の言葉は、ハンマーのように強烈な一撃をわたしに見舞った。なんという盲点だ。わたしは穴にばかり気をとられて、掘り返された土がないことに気がつかなかったのだ。だというのに、英知はこの場の違和感をすぐに感じとった。まったく、相変わらずナイフのように鋭いやつだな。

しかし、すぐに新しい疑問が、わたしのなかで生まれた。

「だが、英知。だれが土を持っていったんだ？ だいたい土なんてもの、何に使うんだ？」

英知はわたしの疑問を真つ二つに叩き折った。

「こつという周りを木々に囲まれた場所の土はただの土じゃない。植物を育てるための栄養がたっぷり含まれた腐葉土だ。腐葉土の使い道はただひとつ、植物を育てる苗床に使うんだ。

さて、ではだれが腐葉土を必要としたのか？ 穴の数は全部で六つ。どの穴もそれなりの大きさがある。このことから、かなりの量の腐葉土が持ち出されたと推理できる。個人でやる作業としては大掛かり過ぎる気がする。だから、おれは複数の人物が関わっていると思うんだ。つまりどこかの団体がやったということだ。

その団体とはどこだろうか？ 農学部のことかのグループか？

答えはノーだ。大学機関の傘下がわざわざ自分たちで腐葉土を集めるまねはしないだろう。大学側が用意してくれるものを使えばいいことだ。では、ほかにどんな団体が思い浮かぶかというと、一つだけ濃厚な団体がある」

「どこだよ？」

「園芸部だ」英知は六つの穴だけで答えをはじき出した。

英知と同じ学科に園芸部に所属している人がいた。だから、園芸部のメンバーと話をすることはじつに自然な流れで行われた。英知

は、園芸部のサークル室に行くと、三原加奈子みはらかなこという人物を呼び出した。

「やあ、加奈子さん」英知はほがらかな笑顔で挨拶をした。

加奈子さんはウェーブのかかったショートヘアをした女性で、飄々（ひょうひょう）とした雰囲気を持っていた。

「英知君がこんなところに来るなんて、どういう風の吹き回し？」

「園芸部で、最近新しい花壇を作らなかった？」

「花壇？ ええ、作ってたわよ。多目的ホールの近くにね」

「多目的ホールの近くか。あその土はやせていて、植物を育てるのには向いてないだろ。ホームセンターで腐葉土でも購入したのかな？」

加奈子さんは鼻で笑った。

「まさか。そんな無駄遣いはしないわよ。腐葉土くらいそこら辺から、ただで取ってこれるのよ」

「たしかにそうだね。サークル棟の南側の山からも取ってこれるしね。というか、実際にそこから取ってきたんでしょ」

加奈子さんの顔から笑顔が消えて、驚きが広がった。

「あら、英知君が千里眼だとは初めて知ったわ」

「たまたま、そこで土を掘り返した跡を見つけた人がいたんだよ」

加奈子さんは右手を中途半端に振って、信じられないというジェスチャーをした。

「それだけでわかったの？」

「絞り込みは簡単だったよ。この大学に土いじりを好んでする人はそう多くないから。一番可能性があるのが園芸部だったんだよ」

「たいした千里眼ね」

英知は否定した。

「ちよつとした推理だよ」

わたしはここで二人の会話に割って入った。

「ところで、なんであんな掘り方をしたんですか？」

加奈子さんは目をぱちりとさせた。わたしの質問の意味が十分伝

わっていないようだ。

「あんな掘り方って？」

「穴が別々の場所に六つできるように土を掘り返したことですよ」

「ああ、そういうこと。あれはね、サークルメンバー六人で行って一人が一つの穴を開けるように作業したからよ。シャベルを一人ひとつ持ってるね。そのやり方だと、すぐに終わるでしょ。掘り返した土は手押し車に入れて、花壇を作るための耕した場所に混ぜ合わせたわ」

これですべてがはつきりした。わたしたちは穴が何のために掘られたかという、ばかばかしい問題を解こうとした。その途中で、手がかりがないことを嘆いたりもしたが、手がかりはちゃんと存在したのだ。その場にあつてしかるべき掘り返された土のことを考慮したのは、英知だけだった。

すいどう会で、まともな目の持ち主は英知だけのようだ。ほかのメンバーの目はまさしく節穴であった。

7 - 1 ・冷凍×××（前書き）

今回の章には、過去の章の内容に深く触れる部分、ようするにネタバレがございます。少なくとも、第一章「接触！ オカルト研究会」を読了したあとにお読みください。

わたしは今、最寄りの喫茶店でコーヒーを飲んでいる。

休日ではあるが、店の雰囲気は落ち着いていた。別の言葉で言い換えるなら、客入りは悪かった。わたし以外には、カウンター席で雑誌を広げているじいさんが一人。入り口付近のテーブルでおしゃべりをしているおばさんが二人だけだ。マスターも椅子に座ってテレビを見て、バイトのウエイトレスさんも暇そうにして立っている。まあ、細い路地でひっそりとやっている店なので仕方がないといえば、仕方がない。

だが、客が少なくとも、店の雰囲気は悪くなかった。床はぴかぴかに磨かれた白いタイル。南側の壁は上半分がガラス張りになって、そのため、太陽の健康的な光がよく入る。木目のはっきりしたカウンターが客の空間と、従業員の空間を分割しており、客の空間には五つのテーブル席がある。わたしが陣取っているのは、入り口から見て一番奥のテーブル席だ。

わたしは文庫本『永遠の0』を読みながら、たまにコーヒーカップを口に運んでまったりとした時間を過ごしていた。わたしはこの店にはたまにしか来ない。気分転換をしたいときに来るのだが、今回は違う。わたしは人を待っていた。

わたしは今、少々変わった問題というか、謎を抱えているのだ。客観的に見ると大した問題ではない。しかし、目を逸らそうとすると、わたしのうなじ辺りにねっとり絡み付くようにして、わたしを捕まえるのだ。何度も気にしないようにしたが、結局最後はどうしても気になってしまふ。とにかく、この謎を何とかしないと落ちていて夜も眠れない。最初、わたしは自分でこの謎を何とかしようとしたが、自分を納得させるだけの解答を見つけることができなかった。

自分の力ではどうしようもならない。だから、わたしはある人物

に、この謎の答えを見つけてくれるように依頼をしたのだ。奴とは今日、ここで会うことになっている。

噂をすれば影……か。入り口が開き、ドアベルが気味のいい音を立てて鳴った。色白で長身の男が店内に入ってきた。

「いらっしやいませー」ウエイトレスが新しい客を迎えた。「お一人様ですか？」

「いえ」彼は首を振った。「あそこの奥の席にいる人の連れですよ」長浜英知のご登場だ。

英知はわたしと向かい合って座った。すぐさまウエイトレスがお絞りとお冷を運んできた。ウエイトレスが注文を訊くと、彼は、キリマンジャロを頼んだ。

わたしは本を閉じて、上着のポケットのなかにねじ込んだ。

「珍しいな。お前がこうやっておれを呼び出すなんて」

「お前の知恵が必要なんだ。お前は謎解きが得意だろ」

英知は背もたれに体重をかけ、ゆったりとした体制でわたしを見た。

「いったい何があったんだ？ 電話で話したときにはまったく内容を話してくれなかったじゃないか」

英知の言うとおりだった。わたしは昨日の金曜日に、英知に電話をかけて今日会ってくれないかと頼んだのだ。わたしは電話で「少しばかりおかしいものを見た。それがいったい何のためにあるのか一緒に考えてくれ」とだけしか話さなかった。電話だけではもっと詳しい話をする気にはなれなかった。最初から話すと長くなるからだ。

わたしはりょう肘をテーブルにつけて、英知を見た。

「お前からすれば、いや、他の連中から見れば些細なことかもしれないが、当事者のわたしにとっては気になって仕方がないんだ」

「どんな話だろうと気にせず話してくれよ」

わたしはいきなり要点だけをぶつけた。

「お前は、冷凍庫の中に『とんでもないもの』が入っていたらどう

思う？」

英知は目を丸くした。きつと、わたしの言ったことがよくわからないのだろう。

「冷凍庫の中に、『とんでもないもの』が入っていたら？」

彼はぼんやりとわたしの言葉を復唱した。

「よし、話を整理しよう。お前が言う冷凍庫というのは自分の家の冷凍庫か？」

わたしは首を振った。「いや、人の家の冷凍庫だ」

英知は目を細めてわたしを見た。話題の切り出し方が急すぎただろうか。なんとなくだが、英知はこの会話についてきてないように見えた。

「要点をぼやかして、断片的に話されても、おれにはわからない。悪いが、はじめから順を追って話してくれないか？」

「ああ、すまない」わたしはお絞りで顔をこすった。「話の振り方が急だったよ」

わたしは冷めたコーヒーを一口含んで口の中を潤した。

「そうだな。じゃあ最初から話すよ。あれはちょうど一週間前になる。わたしは課題レポートを写させてもらったために、友人の村田のところに行ったんだ。村田は学生寮に住んでいるから、わたしは自転車をこいで、いつもの大学まで行くための道を走った。そのときにふと、手ぶらで行くのも悪いと思ったんだよ。それでわたしはコンビニに寄って、村田のところに何か買って行ってやろうとしたんだ。村田はアイスクリームが好物だったんで、わたしはカップアイスを二つ買った。そして、村田のところに行った。ここまではOKか？」

そのとき、ウェイトレスが英知のキリマンジャロを持ってきてくれた。

「キリマンジャロになります。ご注文はこちらでよろしかったですようか」

「ああ、ありがとう」英知は静かに微笑んだ。

ウェイトレスはカップと、ミルクの入った小壺を静かにテーブルの上に置いて、そっと退散した。

「続きを話してくれないか？」英知はミルクをコーヒーに注ぎながら言った。

わたしはここからが本番だといわんばかりに、声のトーンを落とし、英知を注目させた。

「学生寮についたわたしは、すぐに村田の部屋の前に行って、ドアチャイムを鳴らした。村田はすぐに出てきて、わたしを入れてくれたよ。わたしがカップアイスを買ってきたことを伝えたら、あいつは『昼飯食ったばかりだから、後で食べる』と言ったんだ。次にわたしがしようとしたことは、至極当然のことだった。アイスクリームを冷凍庫の中に入れようとしたんだ。『じゃあ、これ冷凍庫に入れとくわ』わたしはこう言っ、て、玄関のすぐ近くにある冷蔵庫に向かった。

村田の様子がおかしくなったのはこのときだ。あいつはわたしの持っていたビニール袋をすつと奪いとって『おれが入れておくよ』と言ったんだ。わたしは正直驚いたね。村田らしくないことだった。それと、かすかだけど、必死さが感じられた気がする。

あいつは冷凍庫の扉を開けて、アイスクリームをビニール袋ごと中に入れたよ。じつにすばやく、ね。だけど、不審に思ったわたしは、このとき冷凍庫に注目していてね。村田に気づかれないように、何気ない感じで冷凍庫の中に視線を送っていんだよ。そのときに見えたのが半透明のタッパだった。それ以外には製氷機くらいしか見当たらなかったな。だから、わたしはそのタッパが怪しいと思ったんだ。そのときはまだ、タッパの中身がぼんやりとしか見えなくて、緑色のものが入っているということしかわからなかった。

冷凍庫の扉を閉めると、村田はわたしを居間に案内した。それから、わたしは村田のレポートを写させてもらったんだ。けどこの間も、わたしの頭の中では、さっきのできごとがしっかりと残っていたよ。

わたしがレポートの内容を教えてもらっている途中で、村田がトイレに行くために席を外したときが一度あった。わたしはそれをまたとないチャンスだと思ったよ。村田がトイレのドアを閉めたと同時に、わたしは立ち上がって、足音を立てないように冷蔵庫に近づいた。そして、そつと冷凍庫の扉を開けたんだ。中にはわたしが買ってきたカップアイスと、問題のタッパーがあった。わたしはタッパーを取り出して、冷蔵庫の上に置いた。半透明の容器に遮られて中身はぼんやりとしか見えなかった。だけど、緑色の何かが入っていることは確かだったよ。最初わたしは野菜か何かだと思った。だけど、それはすぐに間違いだとわかったよ。

わたしはタッパーの蓋を開けて、中身を確認することにした。そして、開けたとき、わたしは言葉を失ったよ。タッパーの中に入っていたのは、たくさんのバツタだったんだからな！」

7・2・二人のやりとり（前書き）

今回の章には、過去の章の内容に深く触れる部分、ようするにネタバレがございます。少なくとも、第一章「接触！ オカルト研究会」を読了したあとにお読みください。

7・2・二人のやりとり

英知はコーヒーカップを口元につけたまま固まった。コーヒーに注がれていた視線が上がり、わたしの顔に向いた。彼はコーヒーを口に含まず、静かにカップをテーブルの上に置いた。

「なるほど」英知はおもしろそうに言った。「冷凍庫の中にバツタか。確かにそれは『とんでもないもの』だな。実におもしろい話だよ」

当事者のわたしからしたら、ちつともおもしろくない。英知にはわからないだろう。開けたタッパーの中に何匹ものバツタが入っていたら、決しておもしろいなどとは思わないはずだ。

わたしは話の続きを語った。

「入っていたバツタはオンブバツタだよ。あのショウリョウバツタ形をした小さい奴さ。わたしは驚きすぎて声が出なかった。まあ、後から思えばそれで助かったがな。びつくりして叫んでたら、トイレの村田に気づかれていたよ。」

オンブバツタは二十四匹くらいいたよ。まあ、ざっと見ただけだったから、あまり正確な数ではないと思うが」

「それで、お前は どうしたんだ？」英知は再びコーヒーカップを口に運んで、今度はしっかりとコーヒーを飲んだ。「村田に、バツタが冷凍庫の中に入っていたことを訊かなかったのか？」

「そんなことはしなかったよ。勝手に人の家の冷凍庫を開けて、『これはなんだ』って訊けないじゃないか。代わりにタッパーの蓋を閉じて、それを冷凍庫の中に戻して、元いた場所まで戻っただけさ。村田がトイレから帰ってきたときには、わたしは何食わぬ顔で、レポートを写していたよ。だが、内心はかなり動揺していたね。レポートの内容がぜんぜん頭に入ってこなかったよ」

「話はそれで終わりか？」英知が訊ねた。

「ああ、そうだ。その後は、もう何もなかったよ。レポートを写し

て、アイスクリームを食べて村田の部屋から帰った。これで終わりで。だけど、あの冷凍バツタがわたしの脳内にしつかりと焦げ付いているんだ。村田は何であんなにたくさんのバツタを冷凍庫に保存していたんだ？ それが毎日、毎日気になって仕方がない」

「そんなこと、気にするなよ」英知は軽い調子で言った。

「わたしがどんな人間だかわかるだろ。こういう些細なことがどうしても脳内に留まってしまうんだ」

「それで、適切な解答が出せないから、おれに助けを求めた、か」

「そうだ。英知、お前はと思う？ 村田が冷凍室に大量のバツタを入れた理由がわかるか？」

英知は腕を組んでしばらくじっと視線をテーブルの上に落としていた。わたしは黙って英知を見守った。彼は今、頭を働かせているに違いない。表情でわかる。沈黙のなか、時間だけが刻々と流れていった。

一分が過ぎただろうか。英知は腕組みをといて、顔を上げた。

「いくつか質問してもいいか？」

「ああ、好きなだけしてくれ」

「お前が見たバツタというのは、どこにでもいる。普通のオンブバツタだったか？」

「ああ、あれは普通のオンブバツタだ。少ししか見ていないけど間違いないよ。変わった点なんて何もなかった」

「そうか。じゃあ村田はそのバツタを自分で捕まえた可能性が高いな。バツタなんて珍しい種類ではないかぎり、どこかで売り出されることはないだろう。人から買い取ることはない。村田は近くの草むらでバツタを捕まえたんだ」

わたしは訊ねた。

「でも、なんのためにバツタを捕まえたんだ？」

英知はちらりとわたしに視線を送った。

「その答えはもうお前が見つけただろう。冷凍庫の中に入れるために捕まえたんだ。この謎の最大の焦点はなぜ、バツタを冷凍庫の中

に入れる必要があったのか、ということだ」

英知はコーヒーをすすった。そして訊ねた。

「バツタを冷凍庫の中に入れるとどうなる？」

「え、そりゃあ、バツタは死ぬよ」わたしはおずおずと答えた。自分でも思うがバカな答えだ。

しかし、英知は表情を崩さずにうなずいた。

「そうだ。バツタは死ぬ。では、村田は殺すためにバツタを冷凍庫に入れたのか、という問いが出てくる。しかし、バツタを殺すためにわざわざ冷凍庫を使う人間はいるだろうか？ いるとすれば、それは幼稚園児か、あと、生粋の気違いか、変態か、そういう性癖の持ち主だ。村田はこのどれかに当てはまる人間か？」

わたしは村田は真面目な人間だと答えた。

「そうか、では村田は何か理由があつて、バツタを冷凍庫に入れた。それは間違いない。」

さて、ここで考えるべきことは冷凍庫の本来の目的だ。冷凍庫の中に入れるものは、バツタ以外に何がある？」

これはわたしに対する質問だった。

「そうだなあ……冷凍食品と氷くらいかな」

「おれの家では夕食で余ったカレーも入れていた。少しでも長持ちさせるためにな」

「夕食のカレーなら一晩置いて、次の朝食にすればいいじゃないか」英知はいらだたしげに手を振った。

「おれたちは今、カレーについての話をしているのではないぞ。冷凍庫の本来の目的の話をしているんだ。冷凍庫は食品を長く保存するためにある。その中にバツタを入れたということは……」

わたしは英知の後を継いだ。

「バツタを新鮮な状態で保存するためか？」

「そうだ」

「ナンセンスだ！」わたしはあきれた。どこの世の中にバツタの鮮度を保とうとするバカがいるというのだ？「じゃあ、何のためにバ

ツタの鮮度を保つんだ？」

英知は冷静だった。「その質問の答えこそが、お前の求める答えだろう」

英知は椅子に座りなおした。どうやら臨戦態勢に入ったようだ。

「おれは二通りの推理を用意した。今からそれを披露しよう」それからこう付け加えた。「言うておくが、おれが今から言うのは可能性の話だ。おれはお前の話を聞いたただだし、はっきりとした証拠もない。それでも腑に落とせる程度の完成度はあると思う」

そうは言いつつも、英知は自信ありげな雰囲気を出していた。これは期待してもよさそうだ。

わたしは一言一句聞き逃すまいと、耳に神経を集中させた。

英知は第一の解答を披露しはじめた。

「解答その一、村田はバツタを食べるために、冷凍庫で保存しておいた」

わたしは顔をしかめた。長浜英知とあろうものがこんな妄言を吐くとは思ひもよらなかった。

「それはないだろ」わたしはきっぱりと否定した。

「ないことはない」英知ははっきりと言った。「イナゴの佃煮があるようにバツタは決して食べられない昆虫ではない」

「いやいやいや、普通食べないでしょ。スーパーに行ったら普通にお惣菜が手に入る時代だぜ。食で冒険する必要なんてあるか？」

「まあそう、かりかりしなさんな。今の解答が気に入らなくても、まだ第二の解答がある。批評は両方の解答が出揃ってからにしてくれ」

そのときだった。携帯電話の着信音が鳴った。わたしの携帯電話ではなかった。英知は携帯電話を取り出して言った。

「悪い。ちよつと外すわ」

そういうと、英知は席を立ち、店の奥にあるトイレの前で通話相手と話し始めた。

英知は静かに話した。通話相手とのやり取りも簡単なものだった。

事実、英知は「うん」と「そうか」と「わかった」の三パターンの言葉しか使わなかった。

英知は一分ほど相手と話して、最後に「それじゃあ」と言って電話を切った。通話を終えた彼はすぐに元の席に戻ってきた。

「いや、話の途中で悪かったな」

「かまわないよ。お前の話は逃げないからな」それからわたしは興味本位で聞いてみた。「さっきの電話、だれからだったんだ？ 彼女？」

英知は手をひらひらと振って否定した。

「違う、違う。サークルのことでちよつとな。文化祭で発表する原稿で、おれにチェックしてほしい部分があるそうだ」

「そうか」わたしは気のない相槌を打った。今は英知の言う、第二の解答とやらが気になって仕方ないのだ。

「さて」英知は気を取り直して言った。「それでは第二の解答を発表しよう、といたいところだが、そのまえに確認しておきたいことがあるんだ」

「なんだ？」

「村田の部屋に押入れ、それかクローゼットはあるか？」

わたしは思わず「はあ？」と言いそうになった。今までの話の流れを無視した滑稽とも思える質問だ。わたしは頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら言った。

「あるよ。押入れが」

「そうか。お前が村田の部屋のいるときに、押入れを開けるようなことがあったか？」

「ないよ」

「じゃあ、押入れの中に何が入っているのかは、お前はわからないわけだ」

「まあ、そういうことになるな」

「よし、わかった」英知は大きくうなずいた。

「何がわかったんだ？ 一人で納得されても困るんだが」

「今からお前も納得できるように話すよ」
こうして英知は、第二の解答を話しはじめた。

7・3・その正体（前書き）

今回の章には、過去の章の内容に深く触れる部分、ようするにネタバレがございます。少なくとも、第一章「接触！ オカルト研究会」を読了したあとにお読みください。

7・3・その正体

実のことを言うと、わたしの期待はだいぶ薄れていた。英知の言う第一の解答とやらが、まったくありそうにないことで期待はずれだったからだ。わたしは先ほどまで、全身を耳のようにしていたが、もはや、耳の部分は耳だけだ。この調子では、第二の解答とやらも期待できそうにないな。

そんなわたしなど気にも留めず、英知はやはり結論を言った。

「村田はバツタを餌として保存していたんじゃないのかな」

「え、えさ？」英知の答えにわたしは固まった。

「はつきり言うと、村田はバツタ、というか、昆虫を食べるペットを飼っているんじゃないのかな。具体的にいうと、トカゲかなにかの爬虫類だろう。バツタを鮮度を維持したまま保存する理由は、バツタを栄養源として利用するからだ。これは第一の解答にも通じるが、やはり現代の人間が食べる代物とは考えにくい。

しかしだよ。村田がバツタを餌にする動物を飼っていたとするなら、どうだ。バツタはそのペットのために保存してある、というわけさ。バツタは生餌のまま保存しておくのはめんどくさいだろうな。バツタにも餌を与えなきゃいけないし、飼育環境が悪いと、一度に大量死するリスクもある。何しろ最悪なのが、衛生面に悪影響があるということだ。

おれは昔、たくさんのバツタやカマキリを捕まえて、ケージの中で飼っていたことがあるんだよ。ケージの底には土を敷いて、キャベツを餌にしていたよ。自然の環境に近づけてやることで、長生きすると思ったんだよ。けどな、一つ問題があった。小さなハエが湧くんだよ。たぶんキャベツに卵を産みつけたんだろうな。飼育し始めてから、十日もすると、ケージの中にたくさんの小さなハエがぶんぶん飛び回って、気持ち悪かったよ。それでおれは昆虫の飼育をやめたよ。まあ、些細な思い出話だな。

さて、話を戻そう。バッタを生きたまま飼育するということは、それなりに面倒なんだ。だから村田は、バッタを冷凍庫に入れて鮮度を保たせたんじゃないのかな。話をまとめると、村田は昆虫を主食とするペットを飼っている。村田はペットの餌を確保するために、バッタを捕まえてきた。村田は捕ってきたバッタを飼育せずに、冷凍庫で保存した。冷凍庫の中に入れた理由は、鮮度も保てるし、飼育するより格段に手間が少なかったからだ。これが、おれの第二の解答だ」

わたしは、英知の推理を黙って聞いていた。村田はペットを飼っていて、わたしが見つけたバッタはその餌だったというわけか。なるほど、第一の解答よりはだいぶ説得力があるな。ほとんど完璧な解答と言ってもいいだろう。ある一点を覗けばの話だが……。

「話はわかった。だが、納得できないな」わたしは思うままの言葉を口に出した。「わたしは村田の部屋に何度も行ったことはある。だがいままで、その部屋で動物を見たことなんて一度もないぞ。村田がペットを飼っているとは思えないな」

英知はにやりと笑った。それはまるで、わたしの言葉を予期していたかのようなだった。

「おれの記憶が正しければ、確か学生寮はいかなるペットの連れ込みも禁止されていたはずだ。となると、イヌ、ネコはもちろんケージで飼える小型のペットも学生寮では飼えないんだよ」

「なるほど！」わたしは合点がいった。学生寮はペット厳禁ということをおぼれていた。

英知は理論の穴を淡々と埋め始めた。

「だから村田は、人が来るときなんかは、自分のペットを押入れの中にでも入れて、人目につかないようにしたんだろうな。誰かに見つかった、寮長さんにでも告げ口でもされれば面倒なことになる。村田からしたら、いかなる痕跡も人に見せたくなかったんだろう」

この英知の言葉で、わたしはぴんときた。

「そうか。村田は冷凍庫のバッタを見られて、わたしにあれこれ訊

かれたくなかった。だからわたしの買ってきたアイスクリームをわざわざ自分の手で入れたのか」

英知は最後にこう付け加えた。

「まあ、おれが述べたのは、あくまで憶測だ。村田がバツタを冷凍庫で保存している本当の理由は、常人が理解できないような複雑怪奇なことかもしれないよ」

わたしは根拠もなく、英知の最後の言葉に反対した。

「いや、今言ったことが真相なんだろうな。そうに違いないよ」

英知の話は確かに憶測の域を出ないだろう。しかし、英知の考えは人を、少なくともわたしを納得させるだけの力はあった。

彼の頭の中はいったいどんな構造になっているのだ。わたしが一週間悩んで府に落とせなかったことを、たった一回のわたしの体験談を聞いただけで、彼はすぐに筋の通った可能性を作り出して見せた。まったく、恐ろしいほど聡明な男だ。

内心興奮しているわたしとは対照的に、英知は誇った様子もなく、静かにコーヒートの最後の一口をすすった。

それから、わたしたちは一緒に店を出ることにした。支払いはわたしが全部だそうと言ったが、英知は頑なに断った。わたしが「一週間のもやもやを解消してくれた礼だ」と言ったら、英知は「コーヒートをおごってもらえるほどの頭脳労働はしていない」と言った。仕方ないので、わたしは素直に自分のコーヒート代のみを払った。

そして今、わたしと英知は細い路地を抜けて、交通量のある大通りの端を二人で歩いてた。わたしはまた、英知の推理をほめなおしたが、彼は大したことではないと否定した。

このようなやり取りをしながら、二人で並んで歩いているときだった。わたしはふと、道の向こう側からやってくる男に目を留めた。その男はふさふさの黒い髪を生やし、眼鏡をかけていた。服装は、ブルージーンズ、色柄つきのワイシャツに、黒いジャケットという格好だ。

わたしがなぜその男に注目したかというと、彼がこちらに顔を向けて、手を振りながら、わたしたちの方に歩いてくるからだ。誰に對して手を振っているのだろうかと思っただが、次の瞬間、英知が手を振り返した。

どうやら英知の知り合いらしい。

眼鏡をかけた男は、わたしたちとの距離を縮めて、フランクに挨拶をした。

「よお、学校以外で会うとは偶然だな」

「そうだな」英知も同じ調子で答えた。

わたしは英知に訊ねた。「どちらさん？」

英知は、わたしにその人を紹介してくれた。

「彼は永久武。ながひさたけるおれと同じ推理小説同好会のメンバーだ」

「ちなみに会長をやっている」と永久さんは言った。「君は英知の友達かい？」

わたしは永久さんに自己紹介をした。

「わたしは、英知と同じ学科の国清圭介くにきよけいすけっています」

7・3・その正体（後書き）

読者の皆様へ

さて、今回の話はいかがだったでしょうか。「飛びだせ！ すいどう会」はこれまでずっと『わたし』Ⅱ永久という永久視点で物語を進めてきました。しかし、今回の話では、何の前触れもなく『わたし』Ⅱ別の誰か、という配置換えを行いました。ここまで最初の章から「すいどう会」を読んでこられた読者の皆様は最後の一撃をまともに受けたことと思います。

このトリックを堪能するには今までの章を読んできださり、『わたし』とは誰かをはつきりと意識しておく必要があります。だからまえがきにも、ペてんじみたことを書かせてもらいました。いきなりこの章を読まれても、最後のオチがまったく理解できないはずですから。

この話を最後まで読んでくださった読者の皆様に感謝します。次章を楽しみにしてお待ちください。

J・P・フリーマン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5834v/>

飛びだせ！ すいどう会

2011年10月8日03時28分発行